
漆黒の遊戯

ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の遊戯

【Nコード】

N1788B

【作者名】

ユウチ

【あらすじ】

やつらは人を殺すことに、ためらいなんてないんだ…。舞台は化け物の巣窟と化した高校。その中で生き残った少年達と一人の父親が狂気に立ち向かう。

プロローグ

春空の下、今にも尽きてしまいそうな「命」が一つ。
その目に映るのは、青空に流れる白い雲… 大きな木… 赤い鳥
居…

しかし、「命」にはそのすべてが何なのかわからない。
ただ見つめるだけの物。

自分が何者なのか、なぜここに在るのかさえもわからない。

ついさっきまで確かにあった、あの温もりは… もうない…。

「ごめんよ…」

最後にそんな声を聞いたのを覚えている。
意味はわからないけど、大好きなあの声…。

「命」は小さく泣いた。

小さく… 小さく… 誰にも聞こえないくらい小さな声で…

寂しいよ…

悲しいよ…

苦しいよ…

「命」は静かに目を閉じた。

一…… 2-3 (前書き)

グロ系ですので、苦手な方はあまり読まないほうがいいかも…

「おい、タク！ 聞いたか！？」

祐史がいかにも興奮した面持ちで、卓郎に話しかけた。

2年3組の教室――机に伏せて半分眠っていた卓郎は、めんどくさいと言いたげに、ゆっくりと顔を上げた。

時計を見ると、まだ8時14分。朝礼が始まるまで、後16分もある。

「今度はなんだ？ ツチノコでも見つかったか？」

卓郎はうんざりしていた。モリサキユウシ森崎祐史は、学年――いや、学校一の情報通だ。

その情報通の一番の友達である河上卓郎は、カワカミタクロウ毎朝のように、新情報を祐史から聞かされる。

しかし、そのほとんどが、卓郎には興味のないものであった。

「また、出たんだよ！ 少女の幽霊が！」

祐史は、卓郎の気持ちなど露知らず、話を続ける。

いや、気持ちを知っていたとしても、この情報通はおかまいなく話し続けるだろう。

「幽霊？ もう9月だぞ……。怪談話の季節は終わったよ」

「本当なんだよ！ 3年の村上って人が部活帰りに見たって！ 夜の8時くらい！」

祐史は、まだ興奮が冷めないようだ。

この『私立大脇高校』は、創立7年という新しい学校だが、生徒の間では、そういった幽霊目撃談が尽きない。

というのも、この学校が建てられている場所は、15年前まで小さな神社が在ったのだが、管理者がいなかったため、取り壊されたので

ある。

「えー！ また出たのー？」

二人の会話に聞き耳を立てていた弥生ヤヨイが話に割り込んできた。

「お、おう、そうなんだ。怖いよな…」

祐史がおどおどしながら弥生に対応した。

「どうしよう… 明日、英語の補習で帰るの遅くなりそうなのよね…」

「あ、あれ？ 川瀬カワセって、英語苦手だったっけ？」

「うん… それにしても変な学校に入っちゃったなー なんかすごい曰くありじゃない…。前に話してたじゃん。この学校が建てられる時に、土の中から小さな子供の骨が見つかったとか… 首を吊った人がいたとか…」

「はは…。川瀬って以外と怖がり？」

真っ赤な顔で弥生と話をする祐史を見て、卓郎はニヤつきながら再び机に伏せた。

午前の授業が終わり、昼休み。生徒達は各々仲のよい友達と集まり、昼食を食べている。

「それでな、その村上さんは…」

あれから祐史は休み時間になる度に幽霊談議を持ちかけてくる。卓郎は食堂で買ったおにぎりを頬張りながらそれを聞き流した。

「ははっ！ まだ言ってるよあいつ。何が幽霊だ。ははは！」

どこからか声が聞こえてきた。

祐史が周りを見回す。

教室の隅で男子生徒が3人集まって喋りながら弁当を食べている。

「ちっ、巧タクミかよ。ああいう人の言うことを信じないやつは嫌いだな」

「お前は信じ過ぎだな…」

卓郎はぼそつと言った。

「ん？何か言ったか？」

祐史が卓郎を睨みつけた。

「……………」

卓郎は知らん振りをしてそれをごまかす。

「あーあ、同じタクでもお前とは大違いだよなー」

「……………」

卓郎はあくまで知らん振りを決め込んだ。

1時00分。あと15分で午後の授業が始まる。

教室には休憩を終えた生徒達がちらほらと帰ってきている。

「5限目： 数学： か」

卓郎の席の前で読書をしていた祐史は憂鬱な声を出した。

卓郎は、昼食を終えてからずっと机に伏せている。

「お前、今日はよく寝るよな」

祐史は返答など期待していなかったのだが…。

「ああ、なんか今日は気分悪いんだよ」

どうやら眠ってはいなかったようだ。

「風邪だな」

「いや、そういう気分の悪さではない…」

「そうか、次の授業が数学だから気分悪いんだな。わかるよその気持ち」

腕組みをする祐史。

「アホか」

卓郎の言葉に、祐史はこのグータラを殴ってやろうかと手を上げたが、突然響いてきた軽快なリズムのチャイムで反射的にその手を止めた。

『ピンポンパンポン♪ 2年3組の川瀬弥生さん。理科室まで来てください』

「川瀬？てか、なんで理科室？」

祐史の疑問に卓郎はわからないというように肩を上げた。

「数学の準備しなくちゃいけないのに…」

友達と話をしていた弥生は、ぼやきながらも教室を出て行く。

祐史はその様子を目で追っていた。

「ふふふ…」

突然、机に伏せていた卓郎が飛び起きた。

「どうした？ タク」

祐史の問いは卓郎の耳に届いていないようで、辺りをきよろきよろと見回している。

「今… 笑い声が聞こえなかったか？」

「え？ 聞こえねーよ」

「そうか…？ 気のせい… か」

とは言いつつも、卓郎はしばらくの間辺りを見回していた。

一、―― 2―3 (後書き)

週1〜2回くらい更新します。(保証はしませんが)

二、……不安

同日…PM 1時20分

男は静かな町の中を自転車で疾走していた。

短髪で歳は40代くらい。

運転の荒いその男は、度々通行人にぶつかりそうになるが、謝る素振りも見せず、ひたすら自転車を走らせる。

呼吸が苦しくなってきた。最近では車慣れしているせいで少々運動不足になっているようだ。

くそっ！ こんな時に！

男は混乱していた。何が起こっているのか理解できなかった。

もうすぐだ… もうすぐ着く…！

男の名前は、川瀬春介 カワセ シュンスケ 四十五歳。建設会社に勤めているが、収入は至って少ない。

なぜ、川瀬はこんなにも焦っているのか。

10分程前、自宅に電話がかかってきた。

久しぶりの平日休暇で、のんびり昼寝をしていた川瀬は、眠そうな声で電話に出た。

しかし、受話器の向こうの声を聞き、途端に眠気はふっとんだ。

電話は娘からだった。

切羽詰った娘― 弥生の泣き声は、身の危険を知らせるものであった。

ただ「助けて！」と繰り返し、ひどく混乱しているせいか、こちらの言葉はさっぱり通じていないようだった。

そして、電話は切れた。

川瀬はしばらく受話器を持ったまま呆然としていた。寝起きと、突然の出来事に頭が回らなかった。

今、弥生は学校にいるはず…。学校で何か事件が起こったのか？

数十秒後、川瀬は動いていた。テーブルの上にあった果物ナイフを、長ズボンのポケットに押し込み車へと急いだ。

車庫のシャッターを開け、車のドアに辿り着くまで20秒もかからなかった。

弥生は無事なのか？ ついさっき聞いた弥生の声が、頭から離れない。

まさか、男子生徒にレイプされているのでは…？

なにか重大な事件に巻き込まれている可能性もある。

弥生は、川瀬にとって娘以上の存在である。妻は弥生を産み、早くに他界した。この17年間、娘と二人で力を合わせ生活してきた。何があっても弥生を失うようなことは――

ふと、ドアを開けようとした手が止まった。

車のドアはしっかりとロックされている。

…：キーはどこだ…？ ズボンのポケットにキーは入っていない。家の中に忘れてきたのか…。

今日は一度も車を使っていない。家のどこかにあることは間違い

ないが……。どこにあるんだ？ 昨日着ていた上着の胸ポケットか？
俺の部屋の机の上か？ もしかしたら、ベッドの上にあるのかも
しれない……。

片っ端から探す時間は無い。

車の窓をぶち破ってロックを外すか？ いや、それでもキーがなければエンジンをかけられない。どうする？

川瀬は周りを見回し、車庫の隅に一台の自転車が置かれているのに気付いた。娘がたまに使う自転車だ。

川瀬は自転車に駆け寄り、タイヤに空気が入っていることを祈りながらスタンドを外す。

大丈夫だ。空気は入っている。

ここから娘が通う学校まで、急げば15分もかからないはずだ。

川瀬は自転車にまたがり、娘がいる『大脇高校』へと急いだ。

学校は気味が悪いほどに静まり返っていた。

授業中なのか？ しかしおかしいほどに静かだ。人の気配が全くない。

周りにパトカーなどは見当たらないな。事件というわけでもなさそうだ。

大脇高校は小さな学校で、警備員などは一人もいない。侵入しようと思えば楽々侵入できてしまう。

秋澤神社か……

川瀬はポケットのナイフを確認し、校内へと足を踏み入れた。

来客用玄関の前まで来た時、川瀬は立ち止まった。

空気が重い……。いや、濃いと言ったほうが合っているだろうか。とにかく、何かとてつもなく嫌なものを感ずる。

入ってはいけない！ 本能がそう叫ぶ。

しかし、入らなければいけない。弥生をここから救い出さなければいけない！

川瀬は強い思いで本能の叫びを振り切り、その得体の知れない空間へと踏み込んだ。

静かだ……。

中に入ればそうでもないと思っていたが、外にいるときよりもずっと静かだ。

耳の奥がキーンとする。

数歩進んだところで何かが視界に入った。

玄関の小ホール。そのすみの方に白い塊……。人……？

人が倒れている！

白い夏用のセーラー服に黒のスカート。女子生徒のようだ。

「おい！ どうした！」

川瀬はすぐに女生徒に駆け寄った。

茶色がかったショートヘア。弥生ではない。

「おい！ 大丈夫か！？」

ゆすって頬を何度か叩くが反応はない。

一体ここで何があったんだ？ 弥生は無事なのか？

川瀬に耐えきれない不安が押し寄せる。

ふと、立ち上がって背後を見た。

そこには受付の窓口がある。普段は事務員が座っているはずなのだが……

「なんだ… これは…？」

事務室を覗き込んだ川瀬は愕然とした。

部屋の中には教師や事務員が数人、女生徒と同じく、皆、床に倒れている。

「どうしたんだ！ 大丈夫ですか！？」

呼びかけるがやはり反応がない。

皆どうしたんだ！？ どうなっているんだ！？

川瀬は再び女生徒に駆け寄った。

まだ死んでいると決まったわけではない！

呼吸の確認をしようと、女生徒の口元に頬を近づけたその時、突然ものすごい耳鳴りに襲われ、川瀬は仰け反った。

何だこれは… うるさい…！

周りの音が何も聞こえず、自分が倒れこみ、もがいていることも分からなかった。

だんだん自分のうめき声も聞こえなくなる。

すべてが無になったと感じた時、ふいに何か聞こえたような気がした。

子供の声…。「ふふふ…」と笑う女の子の声が…。

川瀬は自分の意識が無くなっていくのを感じた。

三、――狂喜

暗い廊下の床で、奥川巧は目を覚ました。

オクガワタクミ

「・・・・・・・・」

ここはどこだろう？ 家… じゃない… 学校…？ なぜこんな所で倒れているんだ？

…これは夢？

手を動かすと、床が冷たいことに気づく。

巧はそのまま起き上がり、辺りを見回す。

まだ九月なのに妙に肌寒い。さっきまで倒れていた部分が周りの床と対照的に温かい。

だんだん意識がはっきりしてきた。

廊下か…。3年生の教室が並んでいる。3階の廊下のようなだ。

何があったんだろう？

巧はしばらく考え込む。

2年3組の教室に戻ろうとしたら、突然すごい耳鳴りがして…それから…。よく覚えてない。

外は真っ暗だ。こんな時間まで気絶していたのか？

巧は腕時計を見た。針は1時12分で止まっている。

そういえば、耳鳴りがして気絶したのもそれくらいの時間だった…。倒れたときに壊れたのか？

でも変だな…。気絶していたのなら、なぜこんな所に？ 廊下の真ん中で気絶していたら、誰かが気づくはずだ。そのまま置き去りなんてあり得ない。

突然、背後で足音が聞こえた。

考えるのは後だ。とにかく家に帰りたい。

足音は階段を上がってくる。

おそらく見廻りの先生だろう。たぶん怒られるな…。

ま、でも理由を説明すれば…。

階段は、少し先の角を曲がったところにある。ここから階段は見えない。当然向こうはまだ僕の存在に気づいていないだろう。

どうしようか、びっくりするだろうな…。

「あの一、先生」

巧はまだ見えぬ相手に小声で話しかけた。まずは、自分の存在を相手に知らせなければならぬ。

「誰かいるのか？」そういう返事を期待していたのだが…。

足音は止まったが、返事はない。

「あの一… 先生…？」

巧は再度話しかけたが、やはり相手から返事はない。

普通の人なら、幽霊かもしれないと思うものであるが、あいにく巧はそういう類を一切信じない。

仕方ない、こっちから行くか。

巧は相手に話しかけながら階段へと向かった。

「すいません、先生。実は―」

角を曲がったところで何か音がした。

「バキッ…」という何かが耳元で碎ける音。低く、鈍い音が…

あれ…？　な…　に…　が…？

何も考えることができなくなった。

ぼやけた人影が赤く染まる。視界全体が赤く染まっていく…。

「ああああああああああ…！」

命が尽きる寸前、巧は自分が叫び声を出していることに気づいた。

その後は、もう何も分からない…。

川瀬は遠くから響く叫び声で目が覚めた。

辺りは暗い。すばやく起き上がり、なぜここにいるのか、なぜ倒れたのかを思い出す。

「弥生…」

そうだ、娘が助けを求めている。

この学校で何が起きているのかはわからない…。だが、弥生が危ないことは確かだ。

そういえば、あの子は？

倒れていた女生徒は、いつの間にかいなくなっていた。

「生きていたのか…？」

川瀬は呟きながら立ち上がった。

悲鳴…。そういえばどこから悲鳴のような声が聞こえた…。倒れてからどれくらい経ったんだ？ 時計は止まっている…。だが、外も内も真っ暗だ。もしかしたら、弥生はもう…

川瀬は首を振った。「そんなわけない。そんなこと考えるんじゃない」と自分に言い聞かせる。

「いやあああああ…！」

突然、沈黙を破るかのように響いてくる甲高い女性の叫び声。さつきよりもはつきりと、しかもわりと近くから聞こえた。

「弥生？」

川瀬は、悲鳴が聞こえたほうへ走り出した。

小ホールから左右に分かれる廊下を左に曲がり、教員室の前を通り抜け、その奥の階段を登る。

時折何かにつまずき転びそうになるが、そんなものを気にしている場合ではない。

悲鳴からは弥生かどうか断定できないが、とにかくここで何が起きたのか、何が起きているのかを知りたかった。

一階から階段を駆け上がり、2階へ――

<ドンッ！>

「きゃっ…!!」

突然胸に重いものがぶつかった。

「うわああああ!!」

「きゃああああ!!」

そして、そのままバランスを崩し、階段を転げ落ちた。再び一階へ。

「いっ… つつっ…!」

「いったあああ…!」

幸い頭は打たなかったものの、肩甲骨を強打してしまった。

「なんだ…?」

隣を見ると、少女が跪いて左腕を押さえている。どうやらこの子がぶつかってきたようだ。

「君は…」

「いやあああ！」

「まてっ！」

川瀬はとっさに、逃げ去ろうとする少女の腕を捕まえた。

「放してええ！やめてえええ！！」

少女は必死に振り払おうとするが、さすがに男の大人とでは、力の差がありすぎる。

「まて！どうしたんだ！？ 何があった！？」

「え…」

川瀬の言葉を聞き、途端に少女は大人しくなった。

「なぜ逃げるんだ？」

「……」

少女は答えない。ただ川瀬の目を見据えている。

「…あなた… 人間？」

何を言っているんだ、この子は？

「俺が悪魔にでも見えたか？」

川瀬は少女の腕を解放した。

「うううううっ…！」

泣きながら川瀬に抱きつく少女。

茶色がかったショートヘア… やはりそうだ。この子はあの時、

小ホールで倒れていた女生徒だ。

「教えてくれ、一体何があった？」

「…こっちが聞きたいわよっ…！ みんな… みんながあ…あ…」

みんな…？ みんなって—

コッ… コッ… コッ…

「ん？」

誰かが階段を下りてくる。

「逃げないと…」

少女は川瀬の手を引き、逃げようとする。

「さて、逃げるって？」

コツ… コツ… コツ…

足音の主はどんどん近づいてくる。

「はやくっ！ はやく！！！！」

「誰から逃げるんだ！？ 誰がいるんだ！？」

引っ張る少女の手を振り解きながら川瀬は問いただした。

コツ… コツ…

足音が止まった。

ふと階段を見上げると、そこには男子生徒が立っている。

しかし、暗くてよく見えないがその生徒の白い夏服には、べったりと黒い影が染み付いている。

しかも右手には………… ナタ…？

そいつの右手には黒い影― 血が滴るナタが握られていた。

「……………」

川瀬は沈黙した。

なんだよ、こいつ… 頭がいかれているのか？ この少女はこいつに怯えていたのか？

コツ…コツ…コツ…コツ…

男は再び階段を下り始めた。さっきよりも速く… まるで獲物を見つけ、狂喜しているかのように…

「はやく！」

再び手を引かれ、我に返った川瀬は今度は逃げることに異論はな

かつた。

逃げなくてはいけない！

しかし次の瞬間、その思いも叶わぬと悟った。

さつき川瀬が走ってきた廊下の先にも、うごめく影が3、4つ。

それぞれが武器を振りかざしている

背後にも通路があるが、そちらのほうも2人いる。

「やばいな…… 囲まれた……」

それぞれの影がだんだんと近づいてくる。

[illegible]

ナタ男が突然奇妙な笑い声を発した。

それにつられるかのように、ほかの影たちも一斉に同じように笑
い出す。

人の声ではない。人の発声器官から出せるはずのない奇妙な声。

頭が痛い
：

「倉庫！」

少女が叫んだ。

指差し示した方向、教員室の隣にドアがあるのが見えた。丁度ぎりぎり捕まらずに入れる位置だ。

川瀬は少女の手を引き、迷わずそのドアを開け、中へ滑り込んだ。

<ガンツ！>

ドアが閉まる直前、隙間へとナタが入り込んできた。

「くっ……！」

必死に閉めようとするが、ナタがしっかりと食い込んで閉まらな
い。

「ひひひヒヒひひィひひひヒひひィひひィひひひィ!!!」

ナタ男が隙間から中を覗き込んでいる。

!!!

間近でその顔を見て、思わず力が抜けてしまった。
黒みがかった顔に飛び散った鮮血。そして、眼はその血痕よりも
深く重い赤。

<ガッ！>

一瞬力を抜いたせいで、ナタがより奥まで入り込んできた。ナタ
を握る手が目の前に見えるほどに。

そうだ…！ たしか…！

川瀬はすばやくポケットを探り、果物ナイフを取り出し、ナタ男
の手に思い切り突き立てた。

「イびゃあ、ああアアア…！！！！！」

気味の悪い悲鳴を上げ、ナタ男の手が引っ込むと同時に、ドアを
勢いよく閉める。

「はあ、はあ、はあ…」

ドアに鍵を掛け、川瀬は力なくその場に座り込んだ。

四、……嫌悪

「しまった……」

深い暗闇の中。川瀬は後悔していた。

そこは幅2メートル、奥行き3メートルほどの狭い倉庫。

周りには棚や本、ダンボールなど、さまざまな物が置かれているため、より狭く感じる。

すでに施錠されているドアからはさまざまな武器でそれを破壊しようとする音が響いてくる。

「どうするの？」

隣に座っている少女――ニノミヤユウリ二宮有里と名乗った少女が不安そうな声を漏らす。

「どうしようもない状況だな……」

果物ナイフに付着した血液を紙で拭き取りながら川瀬は言った。

この倉庫の出口は一箇所しかない。しかしそのドアの向こうには、少なくともあいつらが6体はいるだろう。

ドアは鉄製だ。そう簡単には壊せない。

「はあ……ここで何があったのか教えてくれ……」

川瀬は額に手を当てながら、有里に再度聞いた。

「本当にわからないの……突然耳鳴りがして……気絶して……目を覚ましたら……」

有里はまた泣き出した。

「みんな死んでたのっ……!」

「殺された……? あいつらに」

顔を手で覆いながら黙ってうなづく有里。

「なんなんだよ……あいつら……」

川瀬は有里を見た。

「同級生よ……あのナタを持ってたやつ……」

「同級生？ 眼が赤かったぞ。化け物みたいに…」

「2組の山本君よ… あいつだけじゃない、ほかにも何人か… 男子も女子も… 化け物に……」

「……」

川瀬は言葉がなかった。

こんなこと現実であり得るわけがない…。しかし、これは紛れもない現実…。

みんなおかしくなっちゃっただと？ どうなってんだよ、ゲームの世界かここは？

「ハハハハハ…」

なぜか笑みが零れてきた。

こんな可笑しいことが現実にあっているのか？ ちくしょう…
有里が不審そうな目で川瀬を見ている。

「はああ…」

今度は深い溜め息が漏れた。

ドアからは、相変わらず物を叩きつける音と、不気味な笑い声が響いてくる。

ったく… こんなにも精神的に追いつめられたことが今まであっただろうか… 今にも気が狂ってしまいそうだ。

「ねえ… 川瀬って、おじさんもしかして弥生の父親？」

涙声の有里が口を開いた。

「弥生…！ 知ってるのか！？」

有里の肩を掴む川瀬。

「いたい…」

「…すまん」

川瀬はすぐに有里の肩から手を離した。

「クラスメートだもん、弥生は」

「そうだったのか… それで、弥生はどこにいるんだ！？」

「なんなんだ…?」

二人は恐る恐る耳から手を離した。

<ガチャ>

ドアが開き、突然の強い光に目がくらんだ。

「二宮、ここにいたか」

男の声が聞こえた。

「誰だ?」

目の前には懐中電灯を持った男が立っている。

男は、今度は自分の顔に光を当てた。

乱れた長めの髪に、アイドルのような顔立ち。しかし、その眼にはまるで感情がない、何か悲しみを感じさせる眼。

「河上君!」

有里が男に駆け寄った。

「無事だな。そっちのおっさんは?」

「ああ、無事だ。ありがとう。どうやって鍵を?」

川瀬はズボンの尻を払いながら立ち上がった。

「この鍵なら教員室にあったよ」

そう言って、人差し指に引っ掛けた鍵を見せる。

「この人、弥生のお父さんなんだって」

「川瀬の?」

「ああ、川瀬春介だ。弥生を助けに来たんだが」

「そうか、俺は河上卓郎。ところで、助けに来たって―― いや、話は後か、ついて来てくれ」

遠くからかすかに聞こえるやつらの不気味な声で、卓郎は話を中断した。

「おい、そこにいたやつらはどうした?」

川瀬の質問に卓郎は黙って後ろを親指で示す。

よく見れば、白い粉が大量に舞っている。その中に倒れているそいつらの顔は粉で真っ白に染まり、後頭部からは血液が大量に溢れ出し、粉と混ざり合っている。

「なるほどな」

消火器で相手の目を潰してその隙に止めを刺す。なかなか頭が回るようだ。しかし：

「本当に殺してもよかったのか？　もしかしたら元に戻せたかもしれないだろう？」

「殺さなきゃ、殺される」

それだけ言い、卓郎は倉庫を出た。

懐中電灯を照らす卓郎について廊下を歩く。

教員室、校長室、応接室と、さっき川瀬が走ってきた通路を逆戻りする。

あの時は真っ暗でよくわからなかったが、電灯で照らされたその廊下には、教員や生徒の死体が多数転がっている。

「う……………」

川瀬は一瞬、吐き気をもよおした。

なんてことだ…　まるで悪魔の巣窟だ。

有里は、卓郎と川瀬の腕にしがみつき、死体から目を逸らしながら歩く。

卓郎を見ると、まるで何も感じないかのように、平然と死体をまたぎながら歩いている。

川瀬は死体から目を逸らすわけにはいかない。もしかしたらその中に弥生がいるかもしれないからだ

女生徒の死体を見つけたたびに、川瀬の胃はねじ切れるように痛む。

来客用玄関の小ホールを通り、事務室の前にさしかかった時：

<バン!>

事務室のドアが勢いよく開き、中から事務員の制服を着た化け物が一体飛び出してきた。

「くっ…!」

不意打ちだったため、戦闘体勢に入ることができず、卓郎はそのまま首を締め上げられた。

川瀬はとっさに引き離そうとするが、卓郎を締め上げる腕はびくともしない。

なんて力だ…! 人間だったとは思えない…!

素手じゃ手におえないと判断した川瀬は、ポケットの果物ナイフを取り出し、事務員の肩に深々と突き刺した。

ナイフの先が骨に当たる感触とともに、もう一つ嫌な感触が伝わってきた。ナイフの刃が根元から折れてしまったのだ。

「びゃあああああ!!!!」

激痛に悲鳴を上げ、事務員は卓郎の首から手を離れた。

「げほっ! げほっ!」

無力に床に倒れ込む卓郎。

事務員は、怒りの顔で三人を睨みつけた。

やばい!

もう川瀬の手元には武器がない。とはいえ化け物の怪力に素手で対抗するのは危険だ。

「おっさん…!」

卓郎が咳き込みながら呼びかけ、床にナイフを放った。

川瀬はすばやくそれを拾い、首を絞めようと両手を突き出し迫ってくる事務員の額に突き立てた。

相手の勢いもあってか、刃渡り10センチはあるナイフも、思ったより簡単に刺さっていく。

一瞬で事務員の動きは止まり、床に崩れ落ちた。

「げほっ！ げほ…！ はあ… はあ…」

しばらくし、回復した卓郎が立ち上がり、床に転がるナイフを拾い上げた。

事務員の額に開いた長細い孔からは、ドロドロした血液が垂れ出している。

「………」

立ったまま呆然とどこかを見据える川瀬。

人を殺してしまった… 人を殺してしまった… 人を…

いくら防衛のためだとはいえ、人の形をした者の命を絶ってしまったことに凄まじい嫌悪感を抱いた

「殺さなきゃ… 殺される…」

綺麗に血を拭き取ったナイフをホルダーに戻しながら再び卓郎が言った。

「なぜそう割り切れる…？ 君は人… 人の姿をした者を殺して… 何も感じないのか…？」

「感じないわけないでしょ。俺も人です。」

そう言い、座り込んでずっと泣き続けている有里の手を引き、立たせる。

「急ごう。歩いて移動する暇はない」

川瀬と有里は、小走りで卓郎の後を追う。

廊下の奥の生徒用玄関の前を左に曲がり、ロッカースペースの前を通り、突き当たりの扉にたどり着いた。

扉の上のプレートに『第二校舎』と書かれている。

扉の鍵を開けながら、卓郎が川瀬に言った。

「慣れなきゃいけないんだ。でないと生き延びれない」

五、……談合

第二校舎は、より一層静かだ。
あの化け物の気配が全くない。

「こっちだ」

第二校舎入り口の鍵を閉め、卓郎が再び歩き出す。
入り口から入ってすぐ正面には図書室がある。

その図書室の前に校舎内部の見取り図があるのを見つけた。
これは使えるな。何度かこの学校には来たことがあるが、ほんの一部分しか知らない。

川瀬は貼ってある見取り図をはがし、卓郎を追いかけた。

なるほど、見取り図があるとなんとわかりやすい。いたって単純な構造だ。

さっきまで川瀬たちがいたのは第一校舎で、一階には教員室、校長室、応接室などが並んでいる。

二階から三階は1年から3年の教室。今いる第二校舎のほうは1年の残りの教室が二つあるほかは調理室、理科室、実験室、美術室、音楽室など、特別な授業の時に使う部屋が主なようだ。

さっき川瀬たちが走ってきたのは、東渡り廊下。

反対側にも渡り廊下があり、途中に保健室と食堂、体育館へ行く通路があるようだ。

北のほうには第二体育館。こちらへは第二校舎一階から行ける。

全体の主な構造はこんなもんか。見取り図があれば探索しやすいな。

川瀬はそれを丁寧に折りたたみ、ポケットに入れた。

三人は第二校舎の階段を上り、二階へ。階段のすぐ横にある音楽室のドアの前で止まった。

<コン… コココン…>

卓郎がリズムよくドアをノックした。

「卓郎か？」

中から男の声が返ってくる。

「ああ」

<ガラガラ…>

ドアが開き、中からがたいのよい男子生徒が金属バットを持って現れた。

「無事か？ おお、二宮！ よかった！」

男が有里の肩に手を置く。

と、男の視線が川瀬に移った。

「そっちのは？」

「この人は川瀬の父親だ」

川瀬が口を開く前に、卓郎が答えた。

「まあ、入れよ」

そう言う男は道を開け、三人は音楽室の中へ。

音楽室の中は外とは違い、薄明るい。中央に置かれたアルコールランプのおかげだ。

そのランプを5人の生徒が囲むようにして座っている。

川瀬はすばやく全員に目を走らせた。どうやらここにも弥生はい

ないようだ。

「有里！」

「和海ちゃん！ よかった！」

有里が、ランプを囲む一人の少女に駆け寄り、互いを抱きしめ合う。

「おい、河上！ 巧はいなかったのか！？」

ピアノの上に座っていた長身で丸刈りの男子生徒が卓郎に詰め寄り、胸ぐらを掴んだ。

「いや、だめだった。三階の廊下で頭をばっさりやられてたよ」

相手を睨みつけながら堂々と答える卓郎。

「ちくしょう！！！」

<ガァン！！>

卓郎を殴ろうと思い切り振られた拳は、軽くかわされ、後ろの壁に激突した。

「ちくしょう……」

丸刈りの男は戦意喪失したのか、反抗することなく床に崩れた。

「とにかく、8人か……？ 生き残りは」

川瀬が卓郎に聞く。

「今のところは。でも、ここへ移動する途中に何人が殺された。川瀬はその前からいなかったけど」

「そうか……」

「いや、9人か。今、俺の友人が川瀬を探してる。まだ生きていれば9人だ」

卓郎が訂正した。

「弥生を探してる？」

「ああ。ま、その話は後だ。まずはおっさんに聞きたいことがある」

音楽室にいた生徒は、男子3人、女子3人。

見張りをしている、がたいのよい男子は、《藤原 昇》フジワラ ノボル

呆然と床を見つめている先ほどの不良のような男子は、《相沢幸司》アイザワコウジ

一言も喋らずうつむいている、長髪の男子は、《辻 優哉》ツジ ユウヤ

有里と一緒に泣いている黒髪ポニーテールの女子は、《坂野和海》サカノカズミ

隅の方で一人泣いているセミロングで小柄の女子は、《川見由真》カワミユマ

ずっと窓の外を眺めて口笛を吹いているロングヘアの女子は、《

ミナミ アオイ
南 葵》

「さて、おっさん」

「なんだ話って？ 別に話すようなことはないと思うが？」

川瀬と卓郎は、ランプを挟んで向かい合って座っている。

「腑に落ちない。なぜ部外者のあんたがここにいいのか、詳しく説明してくれ」

「言っただろう。弥生を助けに来たんだ。1時10分くらいだったか、弥生から助けを求める電話があって、異常に怯えてる様子だった。やつらに襲われたんだろう」

「妙だな」

「何がだ？」

後ろ頭を掻きながら卓郎は続けた。

「あのな。俺達が気絶したのもそのくらいの時間なんだよ。しかも今は電話が使えない」

皆黙って卓郎の話を聞いている。

「実際、どの時計も1時12分で止まっている。本当にその時間に

あんたの家に電話がかかったんならおかしいだろ？ 川瀬は何に怯えていたんだ？」

「……」

確かに卓郎の言うとおりだ。あの化け物がそんな時間からうろついていたというのは考えにくい。もしも： 弥生が別の何かで助けを求めていたとしたら、今俺がここにいて、こんなことに巻き込まれているのは： 偶然か：？

「わからないことは多すぎる。俺たちはどのくらいの間気絶していたのか。そして、その間に何が起こったのか」

卓郎が激しく頭を掻く。

「少なくとも今は夜だろ？ 外は真っ暗だし」

見張り役の昇が言うと

「……そうとも言えないかもよ、空に星がないのよね……」

外を眺めていた葵が呟いた。

確かに、窓から見える空には星も月も雲さえも見えない。ただの闇だ。

「あ、それとおっさん、ここへ来る途中、死体を調べてたよな？」
思い出したように卓郎が聞いた。

「その時調べた中で明らかな外傷がある死体はどのくらいあった？」

「いや、ほとんどは外傷なしだ。でも脈がなかったから間違いなく死んでいたよ」

卓郎がゆっくり立ち上がり、皆に背を向る。

「二宮を見つけたときに確信した。どうやら生き残っているのは、2年3組のメンバーだけらしい。それとこのおっさんも」

その言葉を聞き、一瞬、優哉が反応したが、すぐにまたうつむいた。

「そういえば： そうね……」

有里がみんなの顔を見る。

「俺の見解では、皆気絶した後、2年3組のメンバーを除いて、一部の人間が化け物になり、そうでない人間はそのまま死亡した。というところか」

うん、卓郎の見解には俺も納得できる。いや、納得したい。弥生が生きているという希望を捨てたくはない。

「卓郎の見解が当たってるとしたら、まだ生き残りがいるかもしれないな。俺も一緒に探そうか？」

「いや、藤原はこの見張りをしてくれ」

「……」

「誰かがここを守らなきゃいけないんだ」

卓郎の説得に、昇はしぶしぶ了承した。

「すまないな。それと皆これを持っててくれ」

卓郎が全員にホイッスルを渡す。体育の時間に先生が首からぶら下げているやつだ。

「危ない状況になったらそのホイッスルを吹け」

なるほど。助け合いも必要か。しかし、高校生に助けを求めるのもな……

川瀬は苦笑いしながらホイッスルを首にかける。

「くそつたれえ!!」

幸司が渡されたホイッスルを投げ捨て、音楽室を出て行った。

「おい！相沢！」

「放っとけ」

昇の制止も聞かず、幸司は走り去り、それを見て卓郎が冷たく言い放った。

「おっさんは川瀬を探すんだろ？」

「ああ、もしかしたら弥生が一番危険な状態なのかもしれない」

「ねえ、弥生、理科室にいなかったの？」

二人の会話を聞いていた有里が言った。

「弥生が理科室に？」

「一時頃に放送で呼び出しがあったんだ。理科室に来て。でもそこにはいなかったよ」

それを聞き、腕を組む川瀬。

弥生を呼び出し…。その直後に起こった異変…。すべてが偶然なのか？

川瀬の表情を見て、卓郎が切り出した。

「何なら行ってみるか？ 理科室はすぐそこだし、俺も用があるし」
それに川瀬はうなずき、卓郎と連なって音楽室を出た。

六、探索

音楽室を出た二人は、二階の廊下を進む。理科室は音楽室と同じ階にあるのだ。

「それにしても、暗いな。非常灯も点いてない」

川瀬は少し落ち込んだ気分だった。

月明かりが射し込んでこないの、頼りは懐中電灯の明かりだけ。「ブレーカーを上げてでも灯りは点かなかった。第二体育館裏の小屋に発電機があつて、非常時に動かすんだけど、そっちへはまだ行つてない。動かせば補助灯くらいは点くと思う」

「君はこの辺を調べたのか？」

「いえ、第二校舎はあまり調べてない。化け物の気配がないから」

理科室へはすぐに着いた。音楽室から階段を挟んで実験室がある。理科室はその隣の部屋だ。

「学校から逃げることは出来ないのか？」

その問いに卓郎はうなずいた。

「どうやら逃げることはできないらしい。自分の目で見てみればわかりますよ」

そう言って、卓郎が理科室ドアを開けた。

理科室の中には誰もいないし死体も転がっていない。

テーブルの下、ロッカーの中、隅々まで探すが、やはり弥生は見つからない。

「駄目か……」

溜め息をつく川瀬の後ろで、卓郎は忙しなく動いている。準備室からいろいろな物を持ち出し、テーブルに並べている。

「何をするんだ？」

テーブルには、さまざまなラベルが貼ってある瓶や、豆電球、キ

ツチンタイマー、電池などが並べられた。

「何か作るのか？」

川瀬の疑問に、卓郎は無表情で答えた。

「爆弾」

「ああ、爆弾――爆弾!？」

川瀬は驚いた。

爆弾を作るなんて平然な顔をして言うものなのか？

「理科室にあるもので簡単に爆弾は作れる」

「なんでそんな危ないことを知ってるんだ？」

川瀬の疑問ももっともである。

しかしそれに対し、卓郎は作業を続けながら言った。

「悪用しなければ、こういう知識はあって損はない」

「確かにそうか」

確かに今の状況では卓郎のこの知識はありがたい。心強い存在だ。

川瀬は準備室に入ってみた。

薬品の臭いが鼻を突く。何か使えそうな物はないか？

狭い準備室の中を歩き回ると、蝋燭と蝋燭立とライターが、ワンセットで箱に入っているのを見つけた。

懐中電灯を持っていない川瀬にとっては何ともありがたい。

さっそく蝋燭を蝋燭立に立て、火をつけた。

途端に周囲は明るくなり、かなり見やすくなった。

やはり明かりがあると安心する。妙に落ち着くな。

「ほかにほ……」

ライターをポケットにしまい、蝋燭で棚を照らした。

「エタノール……フェノールフタレイン……ベネジクト……」

役に立ちそうにないものばかりだな……

「ん？ sulfuric acid……硫酸!」

棚の奥には10センチほどの高さの瓶があり、ラベルに【硫酸】りゅうさんと書いてある。中身もけっこう入っているようだ。

これは強力な武器になる。しかし、こんな物を持ち歩くのは危険か？　もしも瓶が割れたりしたら：

ここで考えても仕方がないか：　でも持ち歩くにはちょっとでない：

川瀬は硫酸を空の小瓶に入れ、ポケットにしまった。

卓郎の爆弾作りは、まだまだ時間がかかりそうだ。秤に粉を少しづつ乗せている。

「俺は行くぞ」

「・・・・・・」

卓郎から返事はない。

理科室から出た川瀬はドアを閉めようとして、ふと卓郎を見た。真っ暗な中、懐中電灯一つだけの明かりで作業している。よく集中できるよな：　すごい精神力だ。

川瀬は静かに理科室のドアを閉めた。

さて、まずは第二校舎をしらみ潰しに探索するか。

理科室の隣はトイレ、奥に生徒会室か：　まずは実験室のほうを見てみよう。

『保健室』

祐史はベッドに座り、怪我をした右腕に包帯を巻いていた。

「くう… 痛え…」

消毒の痛みが体を貫くようだ。

「先輩…」

祐史は先ほど、先輩だった人物に襲われ、腕を負傷しながらも、命辛々保健室に逃げ込んだのできたのだ

そしたら今度はこれかよ…

目線の先の床には、人型に盛り上がったシートがあり、大量の血で染まっている。

保健室に逃げ込んだ瞬間、今度は保健の中尾先生ナカオがはさみを振りかざし、襲ってきた。はさみが頭をかすってしまったが、祐史もとっさに、持っていた包丁で先生の首を刺した。先生はけたたましい叫び声を上げ、動かなくなった。

中尾先生… 俺も何度か世話になった先生だ… 体育で怪我をした時にも優しく介抱してくれた。その優しい先生に怪我を負わされるとは…

頭の傷に消毒液を塗りながら、昔の先生を思い出す。

「もうっ… いやだ…」

途端に涙が溢れてきた。仲のよかった先輩も、優しくかった中尾先生も、今は皆自分の敵。

「どうしてだよっ…！」

こんなことがあってたまるか！ こんな現実があったたまるか！ 祐史は自分の頭を思い切り殴った。痛みは感じないが、これが夢でないことはわかる。

…！
なんでこんなことになったんだ…！ 誰も… 殺したくないのに

胃が痛い、胸が痛い、脳みそが痛い。体が爆発しそうだ。

「川瀬え…」

弥生の声が聞こえた気がした。

川瀬を助ける… 決めたんだ！ 川瀬… 卓郎… もう好きな人を死なせたくない！

祐史は勢いよく立ち上がり、自分の頬を叩いた。

しっかりしろ俺！ 俺が守るんだ！ 泣いてる場合ではない！！

残りの包帯をポケットに突っ込み、保健室を出た。

「はぁ… いないな…」

トイレから出てきた川瀬は呟いた。

実験室にもトイレにも弥生の姿はなかった。次は生徒会室だ。

理科室のドアのガラスからは、相変わらず、懐中電灯の小さな明かりが見える。

川瀬は生徒会室のドアを開けた。

ホワイトボードと、長机がいくつか置いてあるだけで、簡単に見渡せる部屋だ。

「ん？」

ホワイトボードの向こうに誰か倒れている。

川瀬はすぐに近寄り、蠟燭を当てた。

この人は… たしかこの学校の教頭か…

死んでいるが、外傷はない。やつらに殺されたわけではないようだ。

やつらに襲われるよりも、気絶したまま死んだほうがどれだけ楽なことか…

机の上に紙が置かれている。教育委員会が教頭に宛てた手紙だ。

手にとって読んでみた。

『6年前の教員自殺事件内部調査』

自殺：　　そういえばそんな事件もあったな。この学校で女性教員が首を吊り、死亡したとか。しかも自殺の動機は不明…。

教頭に学校の内部調査をさせていたのか：　　どうやら校長を疑っているようだ。

まあ、関係のないことか。

手紙を再び机に置いた。

次は3階を探してみるか：

川瀬は見取り図を見ながら生徒会室を後にした。

七
—
—
—
—

疾走

「うゝ… うゝ… うゝ…」

小さな泣き声が倉庫の中にこだまする。

ナツキ
津稀はいた。

体育館の器具置き場。その隅に置いてある飛び箱の中に、柴崎菜シバザキ

目が覚めたら突然、友達に殺されかけ、ずっとここに隠れている。何がどうなったのか理解できない。

ただ、現実から目を逸らし、泣くことしかできない。

遠くから奇妙な笑い声や悲鳴が聞こえてくる度に、菜津稀は現実
に引き戻される。

嫌だ、こんな現実認めたくない！

ただ、この悪夢が早く覚めますようにと、願うだけ。

「何で覚めないの……？
なんで……
どうして……？」

菜津稀は頭を抱えた。

「覚めてよ…… 覚めてよ…… 覚めてよ…… 覚めてよ…… 覚めてよ！」

思わず大きな声を出してしまい、慌てて口を塞いだ。

「いやだよお… うっ… うっ…」

<がらら…>

一瞬息が詰まった。突然、器具置き場のドアが開いたのだ。

菜津稀は泣くのをやめ、黙って耳を澄ました。

足音が菜津稀が隠れている飛び箱に近づいてくる。

だめっ……来ないでっ！

菜津稀は神に祈つた。

心臓が早鐘を打ち、呼吸が苦しくなる。
来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで…！

「川瀬…？」

え…？

「川瀬、いるのか？」

明かりが飛び箱の中に差し込んだ。

化け物じゃ… ない？

菜津稀はゆっくりと飛び箱の蓋を開けた。

痩せ型で中背の男。その人物の短めの黒い髪が、周囲の闇に溶け込んで見える。

「森崎… 君？」

声に驚いたように、男は飛び箱に懐中電灯を向けた。

「ん？ 柴崎さん？」

体育館には生徒の死体が大量に転がっている。

休憩時間に体育館を利用する生徒がけっこういるのだ。

バスケットをしていたと見られる男子生徒、そしてそれを見学していたであろう女子生徒。

しかし、今は皆死んでいる。

祐史は必死に吐き気を堪えながらその中を歩いた。

見たことがある男子生徒も大勢いる。何度か話をしたことがある者もいる。皆あの時までには元気に遊んでいたのだろうか…。

そう考えると、どうにもやり切れない気持ちになる。

祐史は、できるだけ死体を見ないように歩いた。

その時だった。どこからか女生徒の声が聞こえてきた。

体育館の器具置き場。祐史の目の前には、カチューシャをしたロングヘアの女子生徒がいる。

柴崎菜津稀。祐史と同じクラスの子だ。

生存者がいたことは嬉しいが、弥生ではなかったということが祐史を少しばかり落胆させた。

祐史の顔を見て、菜津稀が飛び付いてきた。

「ちよっ……」

女の子に抱きつかれるのは、初めての経験。祐史は自分の顔が熱くなるのを感じた。

「よかった。まともな人がいた」

菜津稀は、しばらくの間祐史の胸で泣き続けた。

[illegible]

あの笑い声が体育館に響いた。

見ると、体育館奥の外へと通じる扉が開きっぱなしになっている。そして、そこから化け物が2体こちらへ向かってくる。

「来た……！ 行こう！」

祐史はまだ泣いている菜津稀の手を引き、体育館の出入り口へと走り出した。

出入り口からまっすぐ行くと、保健室と食堂がある渡り廊下へ出る。目の前の角を左に曲がれば第二校舎へ行けるのだが、直前で祐史は足を止めた。その角からも、1体こちらへ向かってくるのが見えたからだ。

後ろにはやつらがすぐそこまで迫ってきている。意外と足が速い。2体と1体なら当然1体を相手にする。しかも相手は武器を持っていない。

祐史はベルトに挿してある包丁を抜き、懷中電灯を菜津稀に渡した。

「おおおおおおお!!!」

そして、両手で包丁を構え、敵に突っ込んだ。

「ひひひひひひひひひひひひひひひひ……!!!」

祐史の声と、化け物の笑い声が交わる。

<ドスッ！>

包丁は、見事化け物の腹部に刺さった。

「びびやあああああああああゝ！！！！！！」

笑い声が悲鳴に変わり、祐史は勝利を感じた。

「柴崎さん！ 走れ！！」

菜津稀に呼びかけた瞬間、祐史は息ができなくなった。

「森崎君！」

目を下に持っていくと、自分の首に重傷を負ったはずの化け物の左手がかかっている。

「が
…
あ
…
あ
…」

もう遅かった。すでにその手は祐史の気管を押さえつけていた。

ものすごい力だ……！
片手だけの握力とは思えない……！

腕が痺れ、包丁を床に落としてしまった。

腕が上^あがらない… 力が入^いらない… 体中の力が抜^ぬけていく…

祐史を覗き込むように睨みつけるその赤い眼からは、明らかに憎悪がうかがえる。

指が祐史の首にじわじわと食い込む。

くそ… やろう… こんなやつに…
視界が真っ白になり、自分の世界が消えていく…

ごめん… 川… 瀬…

「びぎやゝああああああああアあゝあゝ…！！！！！」
次の瞬間、化け物の二度目の悲鳴が大音響で聞こえてきた。
気づいた時には祐史は床に倒れていた。

「…柴…崎…？」

菜津稀が化け物の胸に包丁を突き立てている。

「森崎君！ 立ってえ！」

いつの間にか、後ろから追ってきたやつらが祐史に腕を伸ばしている。

祐史はとっさに振り払い、ふらつく足で立ち上がった。

「行くぞ…！」

掠れる声で叫び、何とか二人はその場を脱した。

もう少しだ！ すぐその扉を開ければ第二校舎だ！

走って角を曲がり、第二校舎の扉を目指す。

「ああ… ちくしょう…」

第二校舎の扉の前には、スコップを持った男子生徒と、角材を持った女子生徒がいる。

こちらを振り向いたそいつらの眼は暗闇で赤く光っている。

扉には鍵がかかっているはず…。

内側からならキーがなくても指一本でロックを解除できるが、外側からは別だ。ポケットの中には卓郎から受け取った第二校舎の合鍵がある。しかし、武器を持った2体を相手にしながら鍵を開けるなんてことはさすがにできない。

遠回りするしかないか… 考えてる猶予^{ゆづり}はない！

「こっちだ！」

祐史は、廊下を反対側へ走り出した。

校長室や教員室が並ぶ廊下。やはりそこにも、化け物が3体ほどいる。

その中の2体は武器は持っていない。全力で走れば捕まらないか…？

祐史は、菜津稀が握り締めている包丁を受け取り、もしもの時のために戦闘体勢に入った。

「全力で走るよ、柴崎さん」
黙って頷く菜津稀。

敵はまだこちらに気づいていない。敵の動きに合わせて確実に逃げ切る…！

今だ！

東渡り廊下を目指し、全力疾走する。

祐史の後ろからは菜津稀の足音が聞こえてくる。しっかりついてきているようだ。

近くの2体が足音に気づき、振り返った。

しかし、敵が攻撃を仕掛けるまでに二人はすでにそこを走り抜けていた。

あと30メートル… 20メートル… 10メートル…
残りの一体を逃れ、無事渡り廊下に着いた。

「はあ… はあ… ははは…」

やった！ 逃げ切ったぞ、ざまー見ろ！

安堵から祐史はただただ笑うことしかできなかった。

「柴崎さん、無事か？」

祐史は後ろを振り返った。

「…柴崎…さん…？」

しかし、そこに祐史の後をついてきたはずの菜津稀の姿はなかった。

八、…… 覚醒

川瀬は重々しい足取りで3階から階段を下りた。

「はああ……」

溜め息しか出てこない。

3階の美術室にも視聴覚室にも誰もいない。会議室と小会議室には、生徒と教員合わせて9人ほどが死んでいた。しかし、このどこにも弥生はいなかった。

川瀬は見取り図を取り出した。

第二校舎に化け物は一体もないようだが、第一校舎のほうはおそらく化け物のたまり場だろう。

あと第二校舎一階と、第二体育館を調べて見つからなければ第一校舎へ行くしかない。

理科室ではまだ卓郎が作業しているのだろう。小さな明かりが見える。

川瀬は一階に下り、階段に腰を下ろした。

一階にあるのは、図書室、相談室、倉庫、1年3、4組の教室、トイレ、調理室、第二体育館への通路……

まずは図書室から調べるか…… 調理室には武器になる物がありそうだな…… 他は……

蠟燭の揺らめく炎を見つめながらこれからの行動を考える。

弥生を見つけ出したところで、この学校から脱出できなければ意味がない……。そういえば卓郎が言っていた学校から出れない理由というの……？ 自分の目で見ればわかると言っていたが……

<カチツ>

すぐ近くの扉―― 川瀬たちが入ってきた扉の鍵が開く音がした。

やつらか…!?

川瀬は立ち上がってポケットから硫酸の小瓶を取り出した。

来るなら来てみる。

すぐに扉が開き、一人の人物が入ってきた。

男子の制服： 短めの黒髪： 人間か？ 化け物か？

右手に血のついた包丁を持ち、白い制服に無数に飛び散った血。その見た目からは化け物の仲間だと疑いたくなるが：

その男は、扉を閉め、再び鍵をかけた。

やつらがこんなご丁寧なことをするとは思えない：

「ふう：」

男が溜め息をつき、こちらへ懐中電灯を向けた。

「うわああ…!」

光が川瀬を照らした途端、男は叫び声を上げ、包丁を振りかざした。

「ち、ちょっと待て！ 俺は人間だ！」

川瀬が叫ぶと、男の動きが止まった。

「人間？」

光がしばらくの間川瀬の顔を照らす。

「悪かった…」

納得したのか、男は包丁と懐中電灯を下げた。川瀬も硫酸の小瓶をポケットにしまった。

「誰だ？ おじさん。校内では見たことないな」

「俺は川瀬春介という。弥生を見なかったか？ 君も2年3組だろう？」

男はしばらく黙っていた。頭の整理をしているのだろう。

「弥生： 川瀬の父親！？ いえ、お父様!？」

なぜ言い直したのか気になるところだが： どうやらかなり動揺しているようだ。

「は、初めまして！ 森崎祐史といいます！」

姿勢を正し、川瀬に固くお辞儀する祐史。

なぜ緊張しているのだろうか：

「僕も川瀬さんを探してるんですよ」

「え…」

そうか… この子が卓郎が言っていた弥生を探している友人：

「どうして、弥生を探してるんだ？」

「えと… それは… 何ていうか…」

川瀬の問いに、祐史はどぎまぎし、川瀬から目を逸らした。

ああ、そういうことか… この子は弥生を：

「まあいい、無事で何よりだ」

祐史は照れくさそうに頭を掻いている。

「あの、お父様は—」

「その呼び方はやめろ」

理科室のドアが開いた。

卓郎は作業を中断し、ドアのほうを見た。

「よお、タク」

川瀬と祐史が理科室に入ってきた。

「…大丈夫か？ 祐史」

卓郎がまじまじと祐史の姿を見て言った。

「あはは… 大丈夫、全部返り血だから。何回か殺されかけたけど」
それを聞いて、卓郎はまた作業にもどった。

「川瀬は見つからないか」

『ああ』

川瀬と祐史が同時に答えた。

「それとタク。体育館で柴崎を見つけたんだけど、途中ではぐれちゃって…」

「柴崎…？ まだ生き残りがいたのか…」

「けど、あの状況ではもう…」

祐史の話を聞きながら、黙々とキッチンタイマーをいじる卓郎。
テーブルの上には銀色の小さな筒が3つ置いてある。

「祐史、おっさん」

卓郎は二人に、導火線がのびているその筒を一つずつ投げて渡した。

「ダイナマイトだ。試したことないから安全に保証はできないけど」

「……………」

「……………」

二人は沈黙した。

「それと… 気をつけてな… この学校にはおそらく、ほかに何か…」

そこまで言い、卓郎は口を噤んだ。

「とにかく、常に用心してくれよ」

川瀬は、祐史と卓郎がしばらく話をしている間、何も言わずにそれを見ていた。二人が話を終えた後、まだ作業が残っているという卓郎を残し、川瀬と祐史は再び搜索を続けることにした。

「おじさんは川瀬を探すんですよね？」

祐史がさっきとは違う、普通口調で話しかけた。

「これからこの校舎の一階を探してみようと思う」

「この校舎にはいませんでしたよ」

「ああ、だが一応な、もしかしたらこちらへ逃げ込んだるかもしれない」

「いないとわかっていても探してみたい。限りなく低い確率でも信じてみたいのだ。」

「わかりました。俺はもう一度体育館のほうへ行きます」

「怖くないのか？」

川瀬は一番疑問に思っていることを聞いた。

「もう… 腹をくくりました」

その言葉を聞き、川瀬はその場に立ち止まった。祐史はそれに気づかず、一人で歩いていく。

腹をくくったか…。普通なら怖くて身動きがとれないだろう。実際俺もそうだ…。少し力を抜けばその場に崩れてしまいそう…。

本当はもう…。動きたくなかない…

本当にこいつら、高校生なのか？

川瀬には祐史の背中が急に頼もしく見えた。

「……………」

ここは、第二体育館横の部室棟。その中の野球部の部室で、幸司は呆然としていた。

音楽室を飛び出しここへ来てから、ずっと床を見つめ、何かを考えている。

その手には、途中で拾った金属製の杭が握られている。外からは物音一つ、虫の声すらも聞こえない。

巧…。どうして…。死んじゃったんだ…？

同じ大学行こうって…。言ってたじゃねーか…！

将来、一緒にでかいことしようって…！！

なのにどうして死んじゃうんだよ…！！

「ち…。くしょう…」

コンクリートの床に次々と涙がぶつかり、弾ける。

九、……深闇

「どうしようか……」

川瀬の目の前には、コンクリート造りの小屋が建っている。小屋には鉄製の頑丈な扉があり、その扉は鍵がないと開かない。

第二校舎一階を探索し、死体しかないと、弥生がいらないのを確認した川瀬は、第二体育館へ向かった。

しかし、第二体育館は、廊下や教室とは違って広い。しかも、明かりは手に持っている蝋燭だけだ。

蝋燭一本の明かりで広い体育館を探索するのは骨が折れる。

その時、卓郎が言っていたことを思い出したのだ。

「第二体育館裏の小屋に発電機があって、動かせば補助灯が点くと思う」

補助灯が点けば、いくらか明るくなるはず。ちょうど第二体育館の近くにいろのだ。探索の前に発電機を動かしておこう。

そう思い、第二体育館裏の小屋に来た川瀬であつたが……。

鍵がないとどうしようもないな…… コンクリート造りのうえに鉄製の扉じゃ……。

思うようにいかないことに、だんだん腹が立ってきた。

「ああ…… くそっ！」

川瀬は、扉に一発蹴りを入れた。重い鉄の音が響く。

八つ当たりしてもしょうがないか…… 教員室に行けば鍵があるだろう。しかしそれには第一校舎へ行かなければならない。やつらの

たまり場へ…。

川瀬の武器は、調理室を探索中に手に入れた、出刃包丁一本。果物ナイフよりはずっと頑丈で頼りになるが、戦うにはどうしても接近戦になってしまう。あの怪力に捕まったら逃れるのは至難の業だ。できるだけ戦闘は避けなければ…。

とりあえず第一校舎へ行ってみるか。やつらがうじゃうじゃいるようなら何か作戦を考えなければいけない。

今、川瀬は屋外にいる。このまま外回りで第一校舎側へ行って、来客用玄関から入れば、すぐに教員室へ行けるはずだ。

いや、いっそのこと窓から侵入するか。そのほうがより安全だ。頭の中で何度かシミュレーションする。

教員室の中へは入ったことがないから構造はわからない。そこからは行ってみて考えるしかない。

すばやく行動しなければ命取りになるな…。

川瀬は足早に教員室のほうへと向かう。

教員室へ行くには、第二体育館のすぐそばの部室棟の前、それから生徒玄関の前を通り、川瀬が初め校内に入った来客用玄関の所まで行かなければならないのだが、部室棟の前を通り過ぎる時、何かの視線を感じ、とっさにそちら側へ顔を向ける。部室棟の影で何か動くのが見えた。

やつらがこんな所にまで…？

面倒なことにならないよう、川瀬は駆け足で部室棟前を通り抜けた。

生徒玄関の前まで走り、振り返る。

誰もいない。追いかけてこなかったようだ。

「ふう…」

安心し、溜め息をついた。

そこから少し歩くと、川瀬が入ってきた校門が見えてきた。

「ん な っ ！ ！」

校門の先を見て川瀬は立ち止まった。

道がない。本来そこにあるはずの――川瀬が自転車を走らせてきた道がそこにはなかった。

ただ深い、深い闇が校門の先に立ちはだかっていた。

気味が悪い…… 見ているだけで吐き気をもよおしそうな深い闇。

あそこへ行ったらどうなってしまうのか…… あれはあの世の入り口に違いない。

川瀬は闇から目を逸らした。

「自分の目で見てみればわかりますよ」

卓郎の言っていたことがわかった。たしかにこれは自分の目で確かめるのが一番だ。そうすれば誰もここから逃げ出そうなんて考えは起こさないだろう。

誰も逃げ出せない……

「ここから出ることはできない……」

再び胃がねじ切れるように痛んできた。

大丈夫…… 大丈夫…… 必ず脱出する方法はあるはずだ。

今、川瀬を励ますことができるのは、ほかでもない川瀬自身なのだ。

川瀬は自分の胸に手を当て、呟く。

「大丈夫…… お前は俺が守る…… 何も心配することはない」
自分自身に言葉をかける。

俺を守るのは俺自身なんだ。

不思議と落ち着いた気持ちになった。

「行こう」

そして川瀬は闇に背を向けた。

教員室の所へたどり着くまでやつらの被害にはあわなかった。

化け物化が一部だけにとどまったのは不幸中の幸いか。全員が化け物になっていたら俺達はひとたまりもなかっただろう。

学校の外側の窓から教員室の中を覗く。

真っ暗だが、動くものは見あたらない。

「よし」

川瀬は窓に手をかけた。

すんなりと窓はスライドし、内部への侵入を許してくれた。

助かった……。もしも開けなかったらガラスを割って入るしかない。音をたてたらやつらに気付かれかねないからな。

しかし、川瀬が再度中の様子を見ようと、窓から頭を入れた瞬間――

「うお!？」

何者かに後ろ襟をつかまれ、すごい力で中に引きずり込まれた。

そのまま床に叩きつけられた川瀬は一瞬、気を失った。

すぐに意識が返り、目の前の人物に目を遣った。

赤い眼をした女性教員が川瀬の首に片手をかけ、不気味な笑みを浮かべている。

不覚だった……! 死角に一体いたのか……!

初め覗いた時、すぐ横に潜んでいたのだ。

女性教員の左手はしっかりと川瀬の首を床に押さえつけ、そして右手にはボールペンのような物が握られている。

逃れられない……! 女の力でこんなにも……!

ためらいなく振り下ろされた右手首をすばやく掴み、攻撃を阻止

するが、今度は左手のほうに力を入れてくる。

「慣れなきや生き延びれない： か」

川瀬の右手にはまだ包丁が握られていた。引きずり込まれた時に落とさなかったのは幸いだ。

だが、いざとなった時に腕が動かない。やはりまだ人を殺すのにためらいがある。

あの時の――事務員の頭にナイフを突き刺した時の感触を思い出した。

しかし、殺すしかないのだ。生き延びるためには…。

川瀬は強張る自分の右手を無理やり持ち上げた。

一発だ：一発で急所を仕留めないとこいつは悲鳴を上げ、ほかのやつらに気付かれる。

川瀬はゆっくりと女性教員の右腕を引き寄せ、頭を近づけた。

女性教員は目を見開き、真っ赤な開ききった瞳孔を川瀬に向けている。

川瀬も敵の眼を睨みつける。

「ごめんな」

悲鳴は聞こえなかった。出刃包丁は正確に敵の後頭部を仕留めていた。

川瀬を押さえつけている左手からゆっくりと力が抜けていき、女性教員の瞳から赤い光が消えた。

普通の人間の眼にもどった。今まで何かにとり憑かれていたかのように、その顔からあの化け物の面影は消え去った。

胸に崩れた女性教員をそつとどかし、立ち上がった。足元には火の消えた蠟燭が蠟燭立から抜け、転がっている。

川瀬は再び蠟燭に火をつけ、教員室を見渡した。

やはりここでも何人か死んでいる。

死体は教師が主なようだ。

あまり長居したくないな：

川瀬の頭にホラー映画のワンシーンが浮かぶ。主人公の背後で死体 que 起き上がり、襲いかかってくるシーン。

「勘弁してほしいぜ：」

まったく、いい演出だ：。無事に家に帰ったらホラー映画でも観てみよう。きっと笑いが止まらないだろう。

そんなことを考えながら鍵を探す。

鍵はすぐに見つかった。

奥の壁のフックがついたボードにいくつも鍵がぶら下がっている。

「ん？」

遠くで＜ガラン：＞と何かが落下する音が聞こえた。

気にすることはないか。音がしないというのも却って怖い。

再びボードに目を戻す。

重要そうな鍵はいくつか抜けているが、発電小屋の鍵は残っていた。

他に使える鍵はないかと一つずつ確認する。

ぺたぺたぺたぺたぺたぺた：

＜ドンッ！＞

突然の物音に心臓が止まりかけた。

何かが教員室のドアにぶつかった音だ。

川瀬は二つある内の遠いほうのドアを凝視した。
化け物に気付かれたか！？

＜ドゴォン！！＞

二度目の音と共にドアは吹っ飛んだ。

「ゴウおおおおおおオオオオ！！！！！！」

轟音ともとれる低い声が響いた。

突如飛び込んできたずっしりとした黒い影。

人型ではない……！　なんだ！？

確認する暇はない。どう考えても味方ではないのだから。川瀬は発電小屋の鍵と、複数の鍵を適当にポケットに押し込み、近くのドアから脱出した。

「グウオオおおオオオオオオ！！！！！！」

教員室から響き渡る轟音と、物がめちゃくちゃに壊される音を振り切るように川瀬は廊下を走った。

十数秒後には生徒玄関から外へと飛び出していた。

背後からはすでに物音は聞こえない。

「な……なんだったんだ……？」

走ってきた真っ暗な校内を見るが、何かが追ってくる気配はない。今のはいつもの化け物じゃなかった……もしかしたらここには……もっと厄介な化け物が潜んでいるのか？　ここは……ここは本当に本物の悪魔の巣窟なのだろうか？

果てしない無力感が川瀬を襲った。

九…… 深闇（後書き）

そういえばこの小説の登場人物の名前って「ユウ」が多いよな…（独り言）

十……増殖

「はああ… もう…！」

これほどの絶望と恐怖を味わった人間が俺たちのほかにいるのだろうか？

今、昇の目の前には一人の男子と四人の女子がいる。

こいつらを守るのが俺に任せられた役目。

音楽室のドアの前の椅子に座り、金属バット片手にクラスメートのお守り。

ったく…、何やってんだか…。本当なら夕飯食って、風呂入って、テレビ見て、寝る。それが日常のパターンなのに…。

何やってんだよ…

昇は熱くなる目頭を押さえた。

今まで昇は、体格がよいのと面倒見がいいことから周りの人たちからは頼もしい人物だと思われてきただろう。昇も頼もしい人間を演じていた。

アクション映画に憧れて体を鍛え、いつでも誰もを守れるようにと、心の準備はしていたつもりだった。だけど実際は、そうではない。自分よりも軟弱だと思っていた卓郎と祐史が先頭に立って動いている。昇は怖くて動けないのだ。

悔しい…。一番戦うべき俺がなぜ安全地帯にいるんだ？ 力では

卓郎や祐史よりも勝る俺が…！

これが俺が卓郎に任せられた役目…。

あの時、卓郎にここの見張りをしてくれと言われた時だって、「役目を交代しよう」とも言えたはずなのに… どうしても言えなかった。逃げ腰の本能が俺を安全な方向へと導いてしまった。なんて情けないんだ…。

誰かを守るっていうのは肉体の問題ではない。精神の問題なのだ。

誰かが椅子から立ち上がる音がした。

葵が昇のほうへ近づいてくる。

「南、どこ行くんだ？」

「トイレよ」

すました声で葵が答えた。

「危険だぞ」

昇が立ち上がり、止めようとするが、

「ここですろっていうの？」

その言葉には反論できなかった。

「トイレはすぐそこよ。それに第二校舎は安全なんですよ？」

「あ… わたしも…」

隅でうつむいていた由真も立ち上がり、葵の後に続いた。

「はあ…」

暗い廊下を歩いていく二人の後ろ姿を見送りながら昇は溜め息をついた。

緊張感がないな…。ったく… 余計に情けないじゃないか…。

五分後―

あれからまだ音楽室のドアは開いていない。

遅いな…。女のトイレはこんなにも長くかかるものなのか？

なかなか開かないドアを見つめながら、昇のイライラは頂点に達しつつあった。

優哉は、さっきから一言も喋らない。もっとも、普段もそうだが… 有里と和海のひそひそ話だけが聞こえてくる。

本人達は、気を紛わそうと話をしているのだろうが、昇にとってそれはイライラを悪化させる原因に過ぎない。

遅い遅い遅い…！ 何をしてるんだよ！？ こんな時に！

我慢できなくなり、トイレまで様子を見に行こうと立ち上がった時、ドアをノックする音が聞こえてきた。

コン… コココン…

リズムカルにノックされるドア。

卓郎が考えた、自分は敵ではないと相手に教える時のノック音だ。やっと帰ってきたか…昇はドアを開けた。

「ふう… 完成——」

理科室—

やっと作業を終えた卓郎は背伸びをし、完成したお手製爆弾を見た。

これでいいはず。少しでもミスがあれば命取りだが…。

派手に散らかったテーブルの上にはデジタル式のキッチンタイマーが取り付けられた、15センチほどの大きさの四角形の箱が置かれている。

この学校にはあの化け物以外にも何かがいる… もっと恐ろしい何かが…。

第一校舎で見たあれは… もしかしたら錯覚だったのかもしれない。そう思いたい。しかし、嫌な胸騒ぎがおさまらない…。祐史達

は無事だろうか？

パタ… パタ… パタ…

廊下から足音が聞こえてきた。

祐史か？ おっさんか？ この足音はスリッパだな…。

パタ… パタ…

足音が卓郎がいる理科室のドアの前で止まった。

卓郎はゆっくりと部屋の隅へ移動する。

<ガラガラガラ…！>

ドアが勢いよく開かれた。

「ヒヒヒ…」

暗闇にあの赤い眼が浮かび上がる。

あいつだ！！ 第二校舎にまで侵入してきたのか！？

卓郎は懐中電灯でそいつを照らした。

「教頭…」

<ピリリリリリリリリリリ…！！！！！！>

突然ホイッスルの音が第二校舎に響いた。

同じ階― 音楽室からだ。

しまった！ あっちにも！！

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ…！！！！！！」

ああ… ちくしょう…

教頭がものすごい勢いで卓郎に接近した。

「すいません教頭…！」

「何があつたんだ？」

有里は友人の亡骸を前に泣き叫び、優哉は手で目を覆い、首を振っている。昇は…

「藤原…？」

卓郎は部屋の中を懐中電灯で照らす。

「…ここだ…」

卓郎の傍らで声がした。

「大丈夫か！？ 何があつた！？」

すぐ横で額を押さえ、倒れている昇を起こしながら卓郎が聞いた。

「くそっ… あいつだ… あいつが…」

「誰が坂野を殺した？」

「あいつ… 相沢だ…！」

昇の目から涙が零れた。

「相沢が…！？ なぜ…！」

「わからねえよ… いきなりバットで殴りかかってきやがった…」
なぜ相沢がそんなことを？ まさかあいつまで化け物に…？ それとも気が狂ったのか？

「二宮の… ホイッスルで逃げていったが…」

さっきのか… 今追えば捕まえられるかもしれない…。

「大丈夫か？ 藤原。俺は相沢を追う」

「ああ… 気をつけろ…」

昇がなんとか立ち上がった。大丈夫そうだ。

「それと、ここにもやつらが入り込んでいるみたいだから、用心しろ」

「わかった… 任せろ」

相沢… 逃げたってことはおそらく化け物にはなっていないな…。
やはり気が狂ったのか…！

おかしくなった人間は、もしかしたら化け物なんかよりも厄介か

もしれない…。

となると祐史やおっさんも危険だな…。とにかくまずはあいつをとっ捕まえ

て―

「！！！」

階段の前で卓郎は立ち止まった。

ダッ、ダッ、ダッ、ダッ、ダッ…

上の階から大勢の足音が聞える。
瞬く間に卓郎の背筋は凍りついた。

おいおい… うそだろ…？
だんだん足音が大きくなる。

「ああ… 神様…」

十…… 増殖（後書き）

今回はクリスマスに浮かれて更新が遅れてしまいました。これから
も大晦日や正月でしばらく更新できないと思います。ご了承ください
い。

十一、決死（前書き）

思ったより更新が遅れてしまいました。

その様子を見て昇は慌てて音楽室へ引き返した。

「卓郎！！ 早く来い！！」

「言われなくても――！！！！？」

卓郎が駆け出そうとした瞬間――体が宙を浮いた。一体の男子生徒に突き飛ばされたのだ。

「卓郎！！」

床に落ちた衝撃で息が詰まった。

やべ……！ 起き上がれない……！！

「に…… げろお……！ 早く……！！ 鍵を掛けろ……！！」

卓郎は声を振り絞り、昇に叫んだ。

音楽室のドアよりも奥まで突き飛ばされてしまった。そしてドアは早くもやつらに埋め尽くされた。

くっ……！！！！ 終わりか……！！

しかし、敵はすぐには襲ってこなかった。どうやら昇が逃げ込んだ音楽室のほうに興味を示しているらしい。

「こっちだ……！ 化け物……！！」

なんとか立ち上がった卓郎が、自分のほうに敵の気を引こうとする。

しかし、卓郎に近づいてきたのはその中の10体ほどで、残りは音楽室に入ろうと、ドアを壊し始めた。

最悪だ…… このままでは皆死んでしまう……。

卓郎は廊下の端に追いつめられてしまった。

音楽室のドアは一箇所しかない。横に窓があるが、ここは二階だ。飛び降りて無事ですむという保障はない。卓郎に逃げ道はなくなってしまった。

「仕方ない……」

そう呟き、手に持ったカバンからお手製のダイナマイトとライターを取り出した。

こいつをこの群れの中心に投げ込めば、逃げ出す隙くらいできる

だろう。

火をつけてから爆発するまで10秒ほどか： うまく中心へ投げないとな…。

卓郎はゆっくりと導火線に火をつけた。

ジジジジジジ： という音をたて、火花を散らしながら短くなっっていく導火線。

あと8秒…。 くたばれ！！

ダイナマイトは確実に群れの中心に向かって投げられた。

よし！ 行った！

正確な軌道を描き、宙を舞うダイナマイト。

しかし…

<コン：>

群れの中で空中を掻き回すやつらの腕に弾かれ、ダイナマイトが撥ね返ってきた。

そして中心ではなく、卓郎の目の前にいる敵の足元へ：

しまった…！！ 近すぎる…！！

ここで爆発したら間違いなく巻き込まれてしまう…！！

導火線は徐々に短くなっていく。

ちっ… ここでゲームオーバーか…

ごめんな、祐史…

父さん…

<ドォーーンッ！！！！>

凄まじい爆発音とともに、廊下にいた化け物共が吹き飛んだ。

「！！？ 卓郎——！！？」

音楽室の奥で固まって立っている昇と優哉と有里。
何をしたんだ卓郎！！

廊下に駆け寄ろうとする昇の肩を優哉が掴んだ。

「逃げよう…」

優哉が小さな声で言った。

「…… どうやって逃げるんだよ……？」

優哉は音楽室の窓を開けた。

「ここから出よう」

「馬鹿か……！ 二階だぞ？ ここは二階だぞ……！」

「大丈夫、いけるよ」

窓から下を除きながら優哉が言った。

「いけるだと？ 何言ってるんだ？」

廊下では生き残ったやつらが、再びドアを壊そうとしている。

「死ぬんだよ……！ もう、終わりだ……！ 皆死ぬんだよ……！」

「やめてえ……！」

有里が叫ぶが、昇の耳には届いていない。

「皆殺されるんだ……！ 逃げることもなんかできない……！」

「……るせえ……」

「逃げられ—— なっっあ……！！？」

優哉が両手で昇の胸ぐらを締め上げた。

「生き残ったやつが軽々しく死ぬなんて言うな!!」

「.....」

言葉が出なかった。

普段大人しい辻が： 本気で怒っている...？

優哉の腕から震えが伝わってくる。

泣いているのか...？ 辻：

次々と仲間が消えていく... そうだ... 苦しいのは俺だけじゃない...。

「悪かった... すまない...」

俺は... とことん弱い人間だ...

昇と有里は、黙って優哉の説明を聞く。

「ここは二階だけど、すぐ下に花壇がある。うまくそこに着地すれば...」

たしかに、地面まで3メートルはあるが、真下に丁度花壇があり、花が植えてある。土がクッションになって衝撃を抑えることができるだろう。

隣で有里が不安そうな顔をしている。

「二宮、いけるか？」

有里はすぐに頷いたが、その顔から不安の色は消えない。

優哉が先に窓を跨ぎ、窓下にある足場に立った。

「ふー...」

目を閉じて深呼吸する。

そして昇に目で合図をし、飛び降りた。

<ドッ:>

土を踏む音が小さく聞こえた。

前に転がり、受身をとった優哉がすぐに立ち上がり昇にむかって手を上げた。

「よし、次、二宮だ」

有里から返事が返ってこない。唇を震わせ、呆然と窓の下を見ている。

「大丈夫か？」

「……藤原君… 先に行って」

有里の声は明らかに震えている。

音楽室のドアはもう1分も持たないだろう。

「わかった。すぐに来いよ」

二番目に昇が足場に立った。

「よっ！」

昇も無事に着地。次は有里の番だ。

「二宮！ 早くしろ！」

しかし、有里は足場に立ったまま一向に動こうとしない。

「……和海ちゃん…！ 河上君…っ！」

「おい、二宮…！」

やつらがドアを突破する音が聞こえた。

「受け止めてやるから…！ 早く…！」

昇が真下に立ち、腕を構える。

「ひひひひひひひひ…！！！」

来た…！！ 二宮早く…！！

有里はしばらく何か呟いていたが、決心したのか、目を見開いた。昇の腕にも力が入る。

有里の足が足場から離れた。

……あれ…？

しかし、有里は落下してこない。

「二宮あ！！！！」

何が起こつたのかわかっていない様子の有里。しかし、昇と優哉にはすぐに状況が把握できた。

一体の化け物が、有里のセーラー服の襟をしっかりと掴んでいる。そして瞬く間に腕の数が増え、音楽室へ引き込んでいく。

「いやあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！！！！！！」

無数の手に掴まれた両腕を必死に振り解こうと体をくねらせるが、それも無駄な足掻き。

有里は音楽室の中へ消えていった。

「いや!!!!
いや!!!!
いやあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!!」

ゴキユツ……！
バキバキユ……
ズリユ……

やつらの狂喜の声と人体を破壊する生々しい音とともに、悲鳴は聞こえなくなった。

昇と優哉はその光景をただただ見つめることしかできなかった…。

十二、狂者

闇に覆われ、風の吹かない不気味な屋外。

川瀬は発電小屋の鉄扉を引いた。

ギギギ…と音を立てながらゆっくりと開く鉄扉。

今にも尽きてしまいそうな短い蠟燭の炎で小屋の中を照らした。

小屋に入って左手には、道具棚。右手には大型の発電機が置かれている。

「これか」

川瀬は発電機に近づいた。

発電機は、川瀬の背丈の半分以上の大きさで、軽油で動かすエンジン式のものだ。

まめに手入れがされているらしく、あまり埃は付いていない。油はほとんど満タンに入っている。あとは電源を入れれば動き出すはず。

さっそくスイッチを押してみた。

グーーーーーン…という唸りを発しながら発電機が起動した。これでいいのだろうか？

次は道具棚を調べる。

ん…： たいした物は置いてないな…。ノコギリ… 金槌… ドライバー… どれもいい武器にはなりそうにないな。せめて電動ドリルでもあればいいのだが…。

川瀬はとりあえず、プラスチックドライバーを手に取り、ポケットに入れた。

もう特にないかな…

再度道具棚を眺めていると、

ザッ… ザッ…

風が吹かないはずなのに空気が動いた。
背中の毛が逆立つ。

誰だ…？ 背後に気配を感じる。

ブオオ…！！！！

川瀬が振り向くのと同時に、空気が鳴る。
反射的に身をよじった川瀬の左腕を勢いよく何かがかすった。

<バグンッ！！！！ ガラガシャァン！！！！>

代わりに道具棚が被害を受け、そこに置いてあった物が、床に散らばる。

バット…？

川瀬に振り下ろされたのは、木製のバット。

「危ねえ…！！」

くっ！ また敵か！ こんな狭い所で…！
目の前の影を睨んだ。しかし、今回は違った。

「ちっ、避けんじゃねえよ…」

影が喋った。人間か？

川瀬の前に立っているのは、紛れもなく人間だ。

背が高い丸刈り頭の男。

こいつは… あの時ヒステリー男か？ たしか相沢幸司とかい
つたな。

よかった。化け物ではなかった…。

「さて、俺は人間だ」

幸司が勘違いしたのだと思った川瀬は、安心した声で言った。

ゆつくりとバットを持ち上げる幸司。

ブォン……！！！！

二度目の空を裂く音。

「なっ……！！！」

<バゴン！！！！>

振り下ろされるバットを寸前でかわし、小屋の隅に逃れる。

蝋燭立が床に落ちたが、短い蝋燭は落ちず、火を点けたまま蝋燭立にのっている。

「ぼっ……！！ 人間だって言ってるだろ……！！」

<ガゴン！！！！>

息を切らしながら叫ぶ川瀬を容赦なくバットが襲う。

「人間だから殺すんだよ」

ニヤつきながら幸司が言った。

「人間だから！？ 何を言ってる！？ 逆だろ……！！」

<ガウン！！！！>

相手の攻撃をかわしながら川瀬が叫ぶ。

幸司の身長は川瀬よりも高い。その分振りが大きいため、何とかぎりぎりのところでかわせる。

「わかったんだよ…… このゲームを終わらせる方法が」

<ガッ！！！！>

「いっ…た…！」

横に振られたバットが川瀬の左腕に直撃した。

幸司から目を離さず、腕を押さえる。

激しく痛むが大丈夫。ただの打撲だ。

「つまりなあ、生き残ったやつだけがここから出られるんだよ」

何を言ってるんだこいつは…！？　生き残ったやつだけが助かる
だど？

「なぜそんなことがわかる！？　何を根拠に―」

<ガゴン！！！！>

川瀬が避けたバットがコンクリートの床に当たる。

「根拠？　ハハッ！　だってそうだろう？　これはゲームなんだ」

ゲーム…！？　これがゲームだと！？

「最後の一人になるまで帰ることはできないんだよ」

幸司は笑っている。

ちっ…！　何を言っても無駄か。完全にイカレている。

川瀬はポケットを探った。

人間を殺したくはない。どうかして外へ逃げないと…。

出入り口は幸司の背後。逃げ出そうとしても捕まってしまう。

「なあ、悪いけど死んでくれよ。おっさん」

幸司がバットを振り上げた。

それなら―！

「動くな！！」

ポケットから卓郎にもらったダイナマイトを取り出し、前につき
出した。

幸司の動きが止まる。

「吹っ飛ぶぞ」

幸司を睨む川瀬。

無言で睨み合う二人。

しばらくの沈黙の後、幸司が笑った。

「やってみろよ」

その言葉を聞いて、川瀬は床に落ちた蠟燭の火に導火線を近づけた。

ジジジジジジ：

導火線が火花を散らす。

「え… おい…」

おそらく本当に火を点けるとは思っていなかったのだろう。

「道連れだ」

幸司の顔が恐怖に染まった。

「やめろ…」

バットを下ろし、後ずさる。

川瀬はそのチャンスを逃さなかった。

すばやく、幸司の左手を通り抜け、外へ逃げた。

「あ…！！」

バットを右手に持っていた幸司は、それに対応することが出来ない。

「くっそお！！！」

幸司の悔し声が背後で響く。

川瀬は指で導火線をつまみ、火を消し、校舎のほうへと走った。

昇と優哉は、第二校舎と第二体育館を繋ぐ渡り廊下まで逃れていた。

この渡り廊下は、一部が壁がない吹抜けになっていて、屋外から

も出入りができる。

二人はそこに設置されている手洗い場に黙って腰を掛けていた。

深い沈黙――

有里の死に特にショックを受けたのは昇のほうだろう。

あの時、無理矢理にでも有里を先に外へ行かせていたら死ぬことはなかったのだ。

責任感の強い昇は、自分を責めずにはられない。

「行こう」

優哉が立ち上がって昇の前に立った。

「ああ」

もう、悩むとか、諦めるとかはやめよう。後ろを見ずとにかく前へ進むんだ。

昇は立ち上がった。

ちょうどその時、

「はあっ…… はあっ…… はあっ……！」

外で誰かが走る足音と、息づかいが聞こえてきた。

タッタッ……

「はあっ…… はあっ…… はあっ……」

すぐ横の吹抜けに男が走りこんできた。

川瀬弥生の父親か。

「おじさん……！」

昇の呼びかけに、川瀬は振り向いて笑みを浮かべた。

「よかった…… みんな無事か？」

二人の顔が曇る。

「……………そうでもないですよ……」

うつむく昇を見て、川瀬はそこにいるのが二人だけだということ

に気付いたのだろう。

十三、微笑

<ザシュツ…!>

「ぎぴゃあああああっ…!!!」

暗い空間に真っ赤な血しぶきがあがる。

祐史は耳元で聞こえる叫び声に耐えながら、男子生徒― 化け物の首に突き刺さった包丁を握りしめる。

「ふう… ふう…」

俺はここまで何体殺した？

倒れた化け物を見下ろす。首から血を流しながら痙攣する人の形をした化け物。

それはやがて動かなくなり、ただの屍と化した。

俺が殺したのはこいつで何体目だ？

祐史は死体をまたぎ、先へ進む。

なんだ、この気持ちは…？ 化け物を殺す度に強まるこの気持ちは…？

快感…？

これが人間の本能なのか？ 理性じゃない、人間の本能？

白かった制服も、今は真っ赤に染まっている。

ここにいたら俺までおかしくなりそうな気がする…。俺も理性のない化け物に…。

一部の人間だけが化け物になったと、タクは言っていた。信じていいのか…？

川瀬と別れた祐史は、体育館へ向かっていた。

前に来た時は、すべて調べる前に菜津稀を見つけたので逃げることを優先した。

しかし、それによって結果、菜津稀を見失ってしまった。

川瀬― 弥生を探す…。それに、もしかしたら菜津稀が無事で体育館にもどっているかもしれない。

体育館には相変わらず死体だけが転がっている。化け物はいない。祐史は体育館の奥にある階段を上る。二階のドアの前に立ち、深呼吸。

懐中電灯で照らされたプレートに「体育館監視室」と表示されている。

<ガチャ…>

ノブを回し、ドアを押す。キィ…と音をたてて開くドア。耳を澄ますが、物音は聞こえてこない。

室内に一歩足を踏み入れると、ひやりとした空気が頬を撫でる。体中の毛がゾワリと逆立つ。

空気が冷えきっている…。冷房はついてないよな…。

懐中電灯で室内を照らす。

「ひっ… あ…」

祐史は息を呑みこんだ。

端にある机の前の回転椅子に誰かが座っているのだ。

その人物は、祐史に背を向け、監視室の大きなガラスから館内を見つめている。

長い髪を後ろで三つ編みにしている女性。制服ではなく紺のセー

ターを着ている。

「だ… れですか…？」

祐史が恐る恐る喋りかけた。

女はゆっくり椅子を回転させ、祐史を見た。そしてにっこりと微笑む。

女がかけている眼鏡のレンズが、光に当たって白く反射する。光を顔に当てているのに眩しそうな素振りを見せない。

「誰ですか？」

もう一度、今度ははっきりと聞きなおす。

女は何も答えず、ただ祐史を見て微笑んでいる。

何者？ こんな先生はこの学校で見たことない。

不思議な時間が流れる。

祐史は動けなかった。女の微笑みから感じられるのは優しさではなく、悲しみと憎悪。

しかし、なぜか恐怖を感じない。

なんだろう… この感じ… 頭がぼー、とする

しばらくして女が立ち上がった。

一瞬セーターの襟の下から紫色のアザが見えた気がした。

はっと我に返る祐史。今の今まで女がいた場所には誰もいない。座っていた回転椅子がむなしく動いて止まった。

「逃げなさい…」

耳元で女の声がした。

とっさに振り向くが、誰もいない。

……………何だったんだ…？

あの人…？

逃げろ…？

女が見つめていたガラスから体育館を見下ろす。
闇の中に赤い光が次々と増えていく。

「うあっ!!?」

祐史は慌てて監視室から飛び出した。

体育館ではさっきまで死んでいたはずの人間が赤い眼を浮かべ、
起き上がっている。

おいおい!　なんで!?

何体かの化け物が祐史に気付いた。

「タクのバカヤロー!!」

体育館を出た祐史は、急いで扉を閉める。

化け物が増えた!　もうこれ以上の地獄は勘弁してくれ!...

「.....もう涙も出ないや!」

<ドォーーン!!>

遠くで爆発音が響いた。

絶望!　か!...

祐史の頭に先ほどの女の微笑が浮かんで消えた。

「もうやめてっ…!」

「ふふふ… 何言ってるの。まだまだこれからよ?」

「やめてっ!! お願い… だからあ……」

「嫌よ。あなたにはもっともつと絶望を味わわせてあげる」

十四、眼光

外の肌寒さは校舎の中とあまり変わりはない。
星も月も存在しない世界…
ここは本物の地獄のようね…

「南さあん…！ 助けて…」
頭の上で声がする。

「はあ、もう。さっさと降りてきなさいよ」

「そんなこと言っちゃって…」

「ほら、下を見ない！」

葵が、壁のパイプにしがみついたままなかなか降りてこない由真に声をかける。

トイレで用を足した葵と由真は、音楽室へもどろうとした。

しかし、トイレから出た二人が目にしたのは、化け物の渦巻く廊下。

音楽室の前も階段も、完全に化け物に埋め尽くされていた。

必死になって脱出口を探していると、トイレの窓から、外壁のパイプをつたって下へ降りられないかと、由真が提案したのだ。

葵が先に地面に降り立ち、提案した本人である由真のほうは今だパイプにしがみついている。

「何やってんのよ…」

呆れた声で言い、ふとトイレの窓を見る。

早くしないとやつらに―

<ガシャンッ…！！>

頭上からガラスの破片が降ってきた。

葵はとっさに後ろに回避し、それを免れた。

「きゃあああ!!」

「由真…!!」

ついさっき葵たちが脱出したトイレの窓に化け物が群がり、由真に向かって腕を伸ばす。

だが、由真は頭を屈め、ぎりぎり捕まらない位置にいる。

次々と窓に群がる化け物たち。

早く降りてくればよいのだが、由真は縮こまって動けない様子でいる。

その時、前で身を乗り出していた一体が、後ろからの圧力に押し遣られ、落下した。

「ひぎゃあああああ!!」

由真のすぐ横を落下する化け物。その手が由真の腕をかすった。

「ギえ…!!」

そいつは頭から落下し、葵の目の前で、グシャツ…と音をたて、死んだ。

二人の顔が恐怖に引きつった。

「……はやく…降りてきなさいよ…」

昇の話聞いた川瀬は、愕然とした。

和海が幸司に殺されたこと。化け物の増殖。有里の死。そして何より、卓郎が死んだということが、川瀬には信じられなかった。卓郎だけはどんな状況に陥っても生き延びるだろうと思っていたから

だ。

「そう… か…」

「……………」

「おじさん… 吉田理枝^{ヨシダ リエ}って女の子見かけませんでしたか？」
うなだれる川瀬に優哉が聞いた。

「見かけなかったが…？ クラスメイトか？」

「いえ…」

優哉はそれ以上何も言わなかった。

「いてっ…」

導火線の火を指でつまんだ時に火傷をしてしまった。

あの時は必死だったからな…。まさか人間に襲われるとは… 化け物になった人間ならまだしも、生きている人間を殺すことは俺にはできないだろう…。

「これからどうしよう？」

昇が溜め息混じりにつぶやいた。

「…俺は第二体育館を調べようとしていたんだが…」

「すぐそこですね。俺らも手伝います。な、辻？」

優哉も頷いた。

「助かるよ」

川瀬は幸司に襲われた時に、明かりをなくしてしまった。だが、第二体育館にもちらほらと補助灯が点灯しているし、昇が懐中電灯を持っていたので、明かりには困らない。

第二体育館は大して広くはない。ステージなどはなく、柔道場と

いったところだろう。

右側の壁に、大型の鏡を覆うカーテン。奥には倉庫らしい扉がある。

「そういえばさ… 何年か前にこの体育館で自殺した教師がいたんだよな…」

先頭に立って懐中電灯を構えている昇が突然話し始めた。

優哉が如何わしそうな目で昇を見る。

この状況で辛気臭い話をするのかこいつは…。

川瀬は先ほど生徒会室で見た資料を思い出した。

「知ってるよ。6年前に女性教員が首を吊り、自殺した。それがここだったのか？」

「ええ、あの倉庫の中で…」

昇が倉庫の扉を懐中電灯で照らした。

「この学校、前は神社だったって言うし、やっぱ呪われてるんですよ…」

「……倉庫の中か…」

そういう話をされると行きづらいじゃないか…。場の空気を読んでもほしいものだ。

横では優哉が苦笑いしている。

その時…

<ドシャンッ！！！！>

突然、目の前に何かが落下した。

「うえ！？」

驚いた昇が、落下物に光を当てる。

「電球？」

体育館の天井にぶら下がっている巨大な電球の一つが落下してきたのだ。

「ははははは… 普通落ちねえだろ…？」
昇の言うことはもつともだ。だが実際それが落ちてきた、ということ…？

三人は恐る恐る天井を見上げた。

何もいない…。

「何で落ちてきたんだろ…？」

優哉が言った。

「…偶然だよ偶然… 笑えるよな…」
そういう昇の顔はちつとも笑っていない。

<パリン…>

今度は左側で何かが割れる音がした。

館内が少し暗くなった。割れたのは壁に取り付けられた補助灯のようだ。

<パリン…>

また一つ… 次は右側の補助灯が割れた。

三人とも固まったまま恐怖で身動きが取れない。

<パリン…>

次々と明かりが減っていく。

<パリン…>

そしてすべての補助灯が割れ、残った明かりは、昇の持つ懐中電

灯のみとなった。

「おい！！！！」

いきなり優哉が叫んだ。

「ぐわあ……！！」

それと同時に、昇が呻いた。

「なんだ！？」

懐中電灯を落とし、膝をつく昇。右手で耳を押さえ、その指の間から血が滴っている。

さつき横を何かがすり抜けた。黒い大きなものが。

「おじさん……」

優哉が前を向いて立ったまま固まっている。

川瀬もすばやく優哉の視線の先を見た。

「なに……？ あれ……」

大きな赤い一つ目が明かりに照らされていた。

十五、昭光

床に転がった懐中電灯の明かりに照らされ、大きな赤い一つ目が瞳孔を伸縮させている。

形も図体も人間とさほど変わらないが、体勢は異様に低く、全体的に真っ黒な色。大きな一つ目の下には、鋭い牙のような歯が何本もむき出しになっている。腕と指も人間のものよりもずいぶんと長い。

指の先から伸びた赤黒い爪は攻撃のためのものだろう。

川瀬は声に出さず苦笑した。

こいつは、怪物……というより悪魔か……？

「藤原……立てるか……？」

川瀬の呼びかけに昇がかすかに頷き、耳を押さえたままゆっくりと立ち上がった。

「シャア————」

喉が潰れたような声で“一つ目”がうなり、光から逃れるように横へ移動する。

川瀬はすばやく床に転がっている懐中電灯を拾う。

どこへ行った？

少し目を離れた隙に、“一つ目”は姿を消していた。

<ヒタツ……>

<ヒタツ……>

<ヒタツ……>

“一つ目”が移動する音が周りから聞こえる。かなりすばやい動きのようだ。

天井の電球を落としたということは上下関係なく自由に移動できるということか。

「周りに注意しろよ」

川瀬は足音のしたほうに明かりを向けるが、敵の動きが速すぎて追いつけない。

武器は俺が持っている出刃包丁と、藤原の鉄バットか… それと硫酸…。

どれも役に立たないな…。

<ビチツ>

天井でワイヤーが切れる音がした。

「避ける！」

<ドシャァン!!!!>

三人が避けるのとほぼ同時に、電球が床に落ちた。
上か！

懐中電灯を上に向けるが、もう天井にはいない。

くそっ！ 動きを捉えることすらできない！

一旦、第二体育館を出ないと殺される！ しかし、やつから逃れることができるのか！？

「……………」

何かいい方法は…

<ヒタツ:>

<ヒタツ:>

<ヒタツ:>

「.....」

おかしい、攻撃してこないぞ:?

“一つ目”は、さっきから川瀬たちの周りの壁を飛び跳ねるばかりで、三人に近づいてこない。

どうなってるんだ? 戦意喪失か?

川瀬は明かりで“一つ目”を追いつける。

そういえば: さっきやつは明かりに照らされて動きが鈍くなったな:。しかもわざわざ周りにある明かりを一つ一つ破壊した。

やつが攻撃してこないのはここに明かりがあるからか? こうやって俺が引つ切り無しに明かりでやつを追っているから攻撃してこない。とすると――

こいつの弱点は「光」か!

いや、こいつだけじゃない。今までの化け物だってあの暗闇でも平気で行動していた。こいつらは暗闇で自由に動ける反面、光に弱いんだ! しかも目玉が大きいこいつにはそれ以上に効くはず:!

なるほどな:。しかし、こいつはすばやすぎて光を当てることができない。

「おい、懐中電灯はこれ一つだけか?」

“一つ目”を明かりで追いながら、川瀬は二人に尋ねた。

「……ええ…、それ一つだけです… 俺が卓郎に渡された…」

右耳の痛みに耐えながら、昇が答えた。

「化け物どもの弱点はおそらく光だ。どうにかしてやつに光を当てることができないか？」

「……………」

「……………」

辻も藤原も考えているが、いい答えは期待できそうにないな。

補助灯を壊された今、ほかに明かりなんて…

「あ、そうだ…。おじさん、援護してください」

優哉が、昇の手から鉄バットを取り、走り出した。

「何を…!!? ちよっ… 待て!!！」

「シャウアア————…」

明かりから離れた優哉を、“一つ目”が狙う。

川瀬はとっさに優哉に明かりを向けた。

優哉が右壁のカーテンを開いた。

何をする気だ？

カーテンに覆われていた鏡が姿を現す。

“一つ目”は、様子をうかがっているのか、天井を這い回っている。

<ガン!!>

優哉が昇から借りたバットで、鏡をたたく。

川瀬は優哉が何をしたいのか見当もつかない。

昇も何を考えているのかわからないという様子で優哉を見ている。

<パリッ…>

何度かたたくうちに、鏡に円形状のヒビが入った。

同じように何箇所にもヒビを入れていく。

「あっ……!!」

川瀬の横腹に鋭い痛みがはしった。

優哉に明かりを向けていたせいで、自分は無防備になっていたのだ。

“一つ目”は再び壁を蹴り、天井に跳ね上がった。

「くっ……! ああっ……!」

床を転がり、喘ぐ川瀬。その手から懐中電灯が転げ落ちた。

「シアア……!!」

今度は天井から川瀬に向かって落下してくる。

「うわぁ……!!」

「ビャアウツ……!!」

間一髪、昇が“一つ目”に蹴りをくらわせた。

「大丈夫ですか？」

「……ああ…… ありがとう」

<ヒタツ……>

吹っ飛ばされた“一つ目”が再び動き始めた。

くそっ! またか!

「おじさん!」

優哉が荒い息づかいで叫んだ。

「こっちに光を……!!」

「シアア……!!」

“一つ目”が天井を移動しながら攻撃態勢に入った。

そうか……! 鏡を……!

川瀬は懐中電灯を拾い、ヒビの入った鏡に光を向けた。

「ビャア……!」

ヒビの入った鏡に当たった光がいろんな角度で反射する。すばやく動く敵も、この光の乱反射からは逃れられない。

光で目が眩んだ“一つ目”が背中から床に落下した。そういうことか！

優哉が鏡の前でガッツポーズする。

川瀬はポケットから硫酸を取り出した。

「くたばれ！」

起き上がろうともがく怪物に硫酸の小瓶を思い切り投げつけた。

<パリン…！ シュウ——…>

「ヒシャアアアアアアア——！！！」

顔に硫酸を浴びた“一つ目”が、低い叫びを上げながら体育館中を暴れまわる。

ちっ！ 死なないか…。

「逃げるぞ！」

昇と優哉は川瀬の後に続いて第二体育館から脱出した。

扉を閉め、手洗い場まで走った三人はそこで足を止めた。

もう怪物の悲鳴は聞こえない。

「ふー… 脱出成功…」

「…追ってきませんね…」

「あきらめたんだろ」

三人はその場に座り込んだ。

「いてて…」

“一つ目”に攻撃された横腹が痛む。

血がにじんだシャツをめくって見てみると、皮膚に一本の切れ目できていた。

深くはなさそうだな… でも手当てしないと…。

「君は大丈夫か？ 耳」

川瀬は昇の耳を見た。

「うわ…」

耳が横に半分近くぱっくりと裂けている。

「痛むか？」

「じんじんする… 寒いです…」

「大丈夫だ、大丈夫。ちゃんと治るから心配するな」

痛みと恐怖で寒さを感じているのだろう。あまり心配させないほうがいい。

これは俺よりも重傷だ…。保健室は近くだったか？ 早く手当てしないと壊死する可能性がある。

第二体育館は後回しにしよう。とにかく今は怪我の手当てだ。

十六、友人

真っ白な世界――

どこまでも果てしなく続く世界――

ここは… 来たことがある…

いつだっけ？

前に一度だけ… 来たことが…

歩いても歩いても先が見えない、真っ白な世界。

何も聞こえない。自分の足音も、呼吸の音さえも…。

遠くで何かがキラリと光った。

・・・

これは… ナイフ？

柄の部分に『T』の文字が刻まれている。

そうだ、これは父さんの…

父さん……？

父さん……？

「……父さん……」

「お？ 復活か？」

「……え……？」

いつの間にか目を開けていた。

ここは、どこだ？

蝋燭の明かりが眩しい。

ベッド… 机… カーテン……

ほのかに香るアルコール…。昔からなぜか落ち着く匂いだ。
そして俺の目の前には見覚えのある顔。

「よお、タク」

「……祐……史？」

「ああ、記憶はあるみたいだな。はは……」

「……」

頭がくらくらする…。

頭を抑えながらゆっくり起き上がる卓郎。

「なんで…」

卓郎がつぶやく。

「なぜ生きてるかって？」

「いや…」

……どうも頭が正常に働かない。

「びっくりしたよ。お前、中庭の植え込みの上に倒れてたんだぜ？」

「……」

ああ…　そうか…。

焦っててよく覚えてないが、たしかダイナマイトが爆発する寸前に、窓から中庭に飛び降りたんだ。

丁度真下に植え込みがあったのか…　それを祐史が見つけて保健室に運んでくれたんだ。

「ほんと…　俺は神に愛されてんのか、嫌われてんのか…」

「遊ばれてるんだよ」

笑いながら祐史が言う。

「ははは…」

笑い事じゃないけどな。

「別に怪我はないみたいだけど…。奇跡だな。」

「ああ、逆に元気になったよ」

「どんなだよ？」

顔を見合わせ、笑いあう二人。

「そういえばお前元氣だよな。いつもはやる気ない目をしてるのによ。なんつーか、生き生きしてる」

「……」

んー、今の俺は生き生きしてるのか…。

「嬉しいのかな…？ 俺」

「はあ？」

祐史が呆れたような声を出す。

卓郎は頭を掻いた。

「勘違いするなよ。ただ体がうずくんだよ。わくわく… っていうか…」

「わかんねえ」

俺もわからない。自分で自分が理解できないんだ。

「危機的状況下にいるとなぜかな。父さんの影響かもしれない」

「タクの父親か…。前に話してくれたよな」

「そうだった…？」

祐史とは中2の頃からの付き合いだ。

コミュニケーションが苦手… というか、人と関わり合いを持つのが面倒くさくて、いつも同級生達と距離をおいていた俺に、しつこく話しかけてきたのが祐史だ。

こいつもそれほど目立ったやつではなかったが、なぜか俺にだけ親しくしようとしていた。

あの時の俺にとっては迷惑この上なかったが、今ではそれも慣れたこと。

この高校に進学する時も祐史が俺についてきたようなものだ。

聞いたら「仲のいいやつがいたほうが楽じゃん」とか言ってたけど、無愛想な俺よりもほかに仲のいいやつがいただろう。なのにこいつは俺についてきた。

俺は人にベタベタされるのが嫌だったが、こいつが一緒にいてほ

つとした自分がいることにも気付いていた。
それでどういうわけか、1、2年生とも一緒のクラスになったんだ。

「川瀬弥生は： 見つかってないんだな？」

しばらくの沈黙の後、卓郎が口を開いた。

「見つからないねえ： どこにいるのやら：」

祐史が溜め息をつく。

「祐史： こんなこと言いたくないんだが、もう川瀬は―」

言い終わらないうちに祐史が卓郎の頭をど突いた。

「祐史：」

「死体も見つからないんだ。俺が見た化け物の中にもあいつはいなかった。確信がない以上、探すしかないんだよ」

「……そうか」

殴られた頭を撫でる。

好きな人のために命を張る。正義感が強いのも昔と変わらない。

俺もいつのまにかこいつに打ち解けていた。

「お前は誰かのために泣けるんだな」

卓郎の言葉に祐史が首を傾げた。

「あ、そういや俺のかばんは：」

手元を探るが、かばんはない。

「お前の近くに落ちてたかばんか。ちゃんと持ってきたよ」
そう言っ、床に置いていたかばんを卓郎に手渡す祐史。

卓郎がかばんの中を確認する。

よかった、壊れてはいないようだ。

「祐史： お前何か変な化け物見なかったか？」

「変な化け物って… そこらじゅうそういうやつばかりじゃん」

「そうじゃなくて、何ていうか… 変わったやつだよ」

「……そういえば… 幽霊っていうのかな？ 妙な女の人なら見たよ」

幽霊？ 妙な女？

「体育館監視室にいたんだよ。三つ編みの女が。あれは人間じゃなかったな」

「今朝お前が話してた少女の幽霊？」

「少女ではないよ。おばさんに近かった。あ、でも少女に見間違えたっていう可能性もあるよな…」

祐史が腕を組んで考え込む。

こんな非科学的な話を真面目にできるっていうのもなかなかないものだ。もう、これからは幽霊でも何でも本気で信じることができるな。

「たぶん関係あるよな。その女が消えた直後に死体が起き上がったんだ」

直後に化け物が増殖した…？ たしかにその女の幽霊とやらが何か鍵を握っているようだな。

しかし相手が幽霊では…

<ガラガラ…>

保健室のドアが開いた。

二人は慌てて身を屈める。

卓郎は腰のナイフホルダーから『T』の字が刻まれたナイフを引き抜いた。

十七、少女

「もう少し。がんばって」

耳を怪我した昇を優哉が支えながら歩く。

川瀬は化け物の襲撃に備えて包丁と懐中電灯を構えながら先導する。

「すみません…」

心なしか昇の足はふらついている。

耳の傷口から流れる血はまだ止まらない。早々に手当てをする必要がある。

保健室まであと20メートル。第二体育館からここへ移動するまでに化け物の襲撃には遭わなかった。前方にも化け物の気配はない。増殖したはずの化け物がなぜ姿を現さない？ 全員で襲えば俺達なんて簡単にひねり潰される。

やつらに作戦を立てるほどの知能はないのか？ ただ目の前に現れた人間を殺すことしか…？

「お、ここだ」

『保健室』と書かれてプレートがドアに貼り付けられている。

ん？ 中から何か聞こえる。話し声か…？

川瀬は優哉と目を合わせる。

首をひねる優哉。

<ガチャ…>

そっと、ドアノブを回し、ドアを内側に開ける。

「なんだ… おっさんか」

中にいた人物がほっとした表情を浮かべ、ナイフをホルダーにもどした。

「い…生きていたのか。卓郎…」

卓郎の背後では祐史が同様に安心した表情を浮かべている。

「ああ… 卓郎… 無事だったのか」

昇が優哉の肩から離れ、卓郎に近寄った。

「怪我… したのか」

血が流れる昇の耳を見て卓郎が心配そうに言った。

「二宮たちはどうした？」

昇の耳の手当てをしながら卓郎が聞いた。

昇も優哉も川瀬も黙り込む。

「死んだのか？」

雰囲気を感じた祐史がに聞き返す。

「……そうか…」

三人はここまであったことを卓郎と祐史に報告した。

祐史は驚いていたが、卓郎は昇と川瀬の手当てをしながら、表情を変えることなくその話を聞いている。

そして、“一つ目”の話になった時、ふと手を止めた。

「一つ目の化け物？」

「たぶん今も第二体育館に潜んでる」

「どんなやつだった？」

「でかい一つ目で、人の形はしていたが、恐ろしくすばしっこいやつだ」

「……」

途端に卓郎は黙り込んだ。

「どうかしたか？ タク」

祐史が卓郎の顔を覗き込む。

「ん、ああ。とにかく何が潜んでるかわからない。できるだけ単独行動は避けたほうがいい」

東渡り廊下のロッカースペースに、葵は、由真と二人でいた。

襲ってくる化け物を棒切れで殴り倒しながら、やっこのことで逃げ込んだのだ。

ロッカーの陰に二人身を潜め、背後で足音がする度に息を止め、気配を消す。

「ふう……」

最初皆で第二校舎へ避難するときよりも明らかに化け物の数が増えている。

しかし、校舎内よりも屋外のほうに化け物は密集していた。

耳を澄ますと化け物の足音は外へ向かっている。

なぜ、外に集まるのかしら？ 何があるっていうの？

とにかくここにいてもどうしようもないわ。皆と合流しないといけないわね。

もっとも、皆が生きているかどうか……。音楽室にいた皆はどうなつたのかしら？

「南さん……？」

立ち上がった葵に由真が不安そうな声を漏らす。

「行くわよ。私も、自分の身を守るだけで精一杯だから： あんたを守るほどの余裕はないの。わかってるわね？」

葵に睨まれて由真が小さく頷いた。

大丈夫かしら、この子…。

どこか安全な場所は…？

第二校舎はあの様子だとても絶望的ね：

葵は頭の中に学校の見取り図を思い浮かべる。

ああ… この状況でどこに安全な場所があるっていうのよ…？
頭を抱える葵に由真が話しかけた。

「南さん… あれ見て」

由真はロッカースペースの窓から外を見ている。

そこは中庭。中庭は屋外だが、周りを建物で囲まれ、他と隔離されているおかげで化け物の侵入はないようだ。

そして由真が指差すほう― 中庭の向こうのカーテンがかかった窓にうつすらと明かりが見える。

あそこは保健室ね。誰かいるのかしら？ もしかして皆あそこ…？

由真が葵を見る。

「行ってみましょ」

一旦、中庭に出て保健室へ行くほうがおそらく安全ね。

ロッカースペースの横にある扉から中庭に出ることができる。目の前の窓から出たいところだが、窓の下に植え込みがあるので諦める。植え込みに足を取られてる隙に襲われたらたまらないからだ。第一音で気付かれてしまう。扉はすぐそこだし、鍵もかかっていないはず。幸い化け物の足音も今は聞こえない。

二人は扉の前に立った。

周りに化け物の気配はない。行くなら今しかない。
ゆっくりと扉を開ける。

校舎の中は補助灯が点灯し、ある程度明るい、中庭は真っ暗だ。
二人は明かりを持っていないので、足元に注意しながら進まなければいけない。

「気をつけなさいよ」

由真は葵の腕を掴んでいる。

ほんと、頼りないわね…。

「！」

葵が中庭に踏み入ろうとした時、後ろで人の気配がした。

「だれ？」

人間？ 化け物？

その人物は、長い髪をなびかせ二人の後ろを通り抜ける。

その後ろ姿には見覚えがあった。

「川瀬さん…？」

葵がとっさにその人物の後を追う。

「えっ… なに…!？」

葵の腕を掴んでいた由真が引っ張られて転びそうになる。

「川瀬さん!？ 待って…！」

「どうしたの!？ 南さん!？」

由真はわけがわからないまま葵についていく。

あれはたしかに川瀬さんよね…？ なんて…？ 私達に気付かないの!？

「ちよっと、川瀬さん—！ あっ…！」

事務室前の廊下で死体の腕につまづいて転んでしまった。

「ったあ… 川瀬さ—ん…？」

前を見たときにはすでにその人物の姿はなく、まっすぐ伸びる廊下には補助灯だけが怪しい光を放っていた。

「み… なみさん…?」

後ろでは由真が首をかしげ、不思議そうな目で葵を見つめている。

「ねえ… 今の川瀬さんよね?」

「…なに言ってるの…?」

え…? 何言ってるのって… それはこっちのセリフ…

「誰もいなかったよ…?」

「は!?!」

…

どうということ? 由真には見えてなかった… ってこと?

「…」

また不安そうな目で葵を見る由真。

「どうなってるの…?」

不思議な時間が流れたようだった。

「大丈夫…? 南さん…」

「ええ」

やはり気になる。あれは幻覚などではなかった。なぜ由真は見えなかったのか…。

廊下に化け物がいないのを確認し、どうせなら少しでも明るい屋内から保健室に向かおうと、中庭に出るのはあきらめた。

それに、さっきの人物がどこかに隠れているかもしれない。

なぜ私に見えて由真には見えなかったのか。ただ単に暗くて見えなかったかもしれないが、考えるのは後でいい。今は細心の注意を払いながら行動しなければ殺られてしまう。

死体から目を背けつつ来客用玄関の前を通り抜ける。

先には死体の山が見える……。できればあんな所通りたくはない。
補助灯で照らされた廊下はまさに血の海であった。

「南さあん……」

由真は今にも泣き出しそうだ。

まったく…… 子守りをしてるわけじゃないっての……！

玄関、応接室、校長室の前を無事通り抜けた。普段は短く感じる廊下も、今は5倍以上長く感じられる。

ああ…… 最悪……

<…チャ……>

背後で何か音が……

「うあっ……！」

「えっ……!？」

二人は腕を引っ張られ、わけがわからないまま後方に引きずられていった。

<パタン……>

十八 約束

「さて…」

卓郎がベッドから立ち上がった。

「とにかく何か行動しないと」

「そうだな。ただ死を待つのはごめんだ」

川瀬は同意した。

それに、弥生も探さないといけない。

「で、どうする？ 単独行動は避けるんだろ？」

祐史の言葉に卓郎が腕を組む。

「……おっさんと祐史は川瀬を探すんだろ？ それなら二人は別行動のほうがいい」

「藤原は怪我してるしな…」

祐史が昇の耳を見る。

「俺は大丈夫。たいしたことはない」

たしかに昇はさっきよりも元気そうだが、その顔は言葉の割りには強がっていると思えない。

しばらく考えてから卓郎が言った。

「藤原は休んでろ」

それを聞いて昇の顔が曇る。

「ここにおいて行くのは危険だ」

川瀬の反論に卓郎は再び考える。

「じゃあ、どこか安全な場所に…」

「俺は大丈夫だ！」

昇が声を荒げた。

「……っ…」

叫んだ勢いで傷が痛んだのか、顔を歪め、ガーゼと包帯で治療された耳を押さえた。

「……戦える……！」

右手の金属バットを握り締め、昇が卓郎を睨む。何かを決意したような力強い目。

一瞬卓郎が微笑んだように見えた。

「じゃあ、俺は祐史と行動しよう。藤原と辻はおっさんとだ」

「わかつた」

昇が頷いた。

「ああ」

優哉と川瀬も共に頷く。

何か押し付けられたような気もするが、仕方ない。俺なんかよりも卓郎のほうが頭はよさそうだ。言う通りにしても大丈夫だろう。怪我をしてるとはいえ少なくとも戦力にはなる。大勢で行動したほうが安心もできるしな。

とにかく俺は弥生さえ見つけ出せばそれでいいのだから。

保健室から出たとき、昇が卓郎の肩を軽く叩いた。

「死ぬなよ。卓郎、祐史」

「……お前らもな」

”必ず生き残る！”

皆が誓い合い、卓郎と祐史は第二校舎、川瀬と昇と優哉は体育館のほうへとそれぞれ分かれていった。

<ゴオオオオオオオオオオ……>

遠くから不気味な音が響いてくる。

風は吹いていないから風の音ではないだろう。

その音は胸の奥まで響き渡る。

気持ち悪い！ 気持ち悪い！！ キモチワリイ！！！！

何だよこの音はあ！！！！

まるで心の中を引っ掻き回されるようだ。

「うるせえ、うるせえ……」

野球部の部室の中で幸司が小さく悪態を吐く。

外はいつの間にか化け物だらけ。

しばらく外に出ることはできない。

「死ねえ……！ 死ねえ……！」

幸司のイライラはすでに限界を超えている。

<グシャッ！>

<グシャッ！>

足元にある肉塊を何度も何度も踏み潰す。

人の形をした肉塊――それは、衣服を剥ぎ取られ、もはや顔も性別もわからないほどに無惨に切り刻まれ、踏み潰されている。

「ははっ はははは…… は……」

<グシャッ！>

<バキッ！>

<ぶしゅっ!>

冷たくなつた血液が肌^{はだ}に飛び散る度に不思議な興奮^{こうふん}を覚えていく。

「あははははは……」

俺が勝者だ…。

俺だけが生き残ってやる。

全員：殺してやる…。はははははははは…。

＜ガタガタ：ガタガタガタツ：＞

何か部室のドアを開けようとする。

だが、鍵がかけてあるドアはびくともしないようだ。

ドアのすりガラス越しに人影と赤い二つの光が見える。

幸司は不気味にやけ、バットを手に取りドアへ向かった。

<ゴオオオオオオオオオオオオ……>

不気味な音は納まる気配がない。

「困ったものね……気が早いんだから……」

長い髪の毛は深い闇を見下ろしながら眩いた。

「せっかくこれから面白いところだったのに……。もう皆死ぬのよ」

誰かに話しかけるように喋り続ける。

「もっと足掻いてくれればいいのにな……。どこまでやれるのかしら……？ ふふふ……」

そう言って後ろを振り向く人物。

「あなたも楽しいでしょ？」

「……」

そしてニコリと微笑みまた闇を見下ろす。

「あなたは最後まで見届けるのよ？ お姉さん」

十九、苦痛

開け放たれた体育館の扉の奥から聞こえてくる鈍器の音と凄まじい悲鳴。

武器を持っていない優哉が敵の顔に懐中電灯の光を当て、目を眩ませる。そこをすかさず川瀬と昇が攻撃し、止めを刺す。

「ぎっ……！！！！」

木刀を持った男子生徒の頭蓋に穴を開けた瞬間、体育館は静寂を取り戻した。

6体は倒しただろうか……。体育館にいた化け物は一掃できた。

川瀬はほっと一息ついた。

優哉が足元に転がってきた木刀を拾い上げ、横に振ってみせる。

ああ……生きてた……。よかった……。

敵の弱点がわかっていれば何とも簡単に撃退できる。でも肝心なのはこちらも捨て身で向かっていかないと勝てないということ……。微塵の失敗が死を招く世界なのだ。

「戦場の兵士もこんな感じなのかな……？」

昇が座り込んで天井を見上げながら漏らすように呟いた。

「たしかに戦場に違いはないが、こっちは相手が得体の知れない化け物だからな。人間とは違う」

顔の冷や汗を肩で拭いながら川瀬が答える。

優哉は木刀を杖にしてうつむいている。さっきから一言も喋っていない。

……こんな状況じゃあな……。

「さあ、弥生探すの手伝ってくれるんだろ？」

川瀬が立ち上がって背伸びをする。

「俺は…　ここで見張りをします」

そう言つて昇は座ったまま立ち上がろうとしない。

まあ、無理して動き回るのはよくないからな。

「わかった。行こう」

川瀬が優哉と目を合わせる。顔を強張らせながら軽く頷く優哉。

一つしかない懐中電灯は、優哉が手に持っているが、やはりここにも補助灯がいくつか点灯しているので見張るだけなら十分に明るい。

まずは器具置き場…。第二校舎の時ような化け物がいないようにと祈りながらドアを開ける。

「……誰も…　いませんね…」

「ああ…」

散らかった雑多な室内だが荒らされた様子はない。おそらく元からこれなのだろう。乱雑に置かれたバレーボールのネット、飛び箱が数台、隅で山積みになれた運動マットは雪崩れのように崩れている。自分が学生の時もこんなだったっけ…。と少し苦笑い。

隠れるようなスペースはなさそうだが、念のため飛び箱の中やマツトの下などを調べてみる。

「ダメか…」

優哉のほうを振り向くと、落ち着かないという雰囲気は何やらそわそわしている。

「どうかしたか？」

「え…　いえ………」

「次、行こうか」

ああ… 体がだるい…。

昇は壁にもたれて、開けっ放しになった体育館の扉の先を見つめていた。

入り口の両側に補助灯が取り付けられているため、奥のほうはよく見えないが、動くものがないことは確かだ。

しかし… 体が動かない…。一度座り込んでしまうとだるさで体を動かせない。

ふと、数メートル先の死体に目をやる。

先ほど自分が殴り殺した化け物の頭からはおびただしい血が流れ出ている。

……もし、あれがまた動き出したら、俺どうなるんだろ…？

昇の前を川瀬と優哉が横切り、監視室への階段を上っていく音が聞こえる。

ああ… 一人になってしまった…。俺が襲われてもすぐに助けに来てはくれないな…。

あー、気持ち悪い…。変な気分だ…。きっと耳の怪我のせいだ…。

・・・・・・

怪我のせい… か…。

そういえば小学生の頃…

朝、起きるのが辛くて学校に行きたくなって… 憂鬱だった時…

体が妙にだるく感じられた。

でも、母さんが学校に休みの電話をかけた後は、体はいつも通りで、だるさも消えていた。

大切なのは気の持ちようなのだ。

今もあの時と同じなのかもしれない…。ズキズキと治まらない傷の痛みに集中するせいで、体がだるさを感じるのか。

気の持ちよう…。怪我を気にしないように。大丈夫だと…。

くっ…。でもやっぱり痛えよ…。ちくしょう…。

やっぱ、まだまだ駄目だな、俺は。

そういえば母さん、言ってたっけ…。

『空^{から}元気でもいいから、とにかく元気を出しなさい』

空元気か…。そうだよな、振りでも元気にしてないとますます駄目になる。

そうだ、母さん…。父さん…。心配してるかな…？

今は何時頃なんだろう…？

早く帰んなきゃな…。

……………帰れるかな…………？

「藤原、大丈夫か？」

監視室を調べ終わり、昇のところへもどってみれば、死んだような目でどこかを見つめていた。

一瞬本当に死んでいるのかと思ったが、小さく肩を動かしている。突然声をかけられた昇が、慌てて振り向く。

「あ、大丈夫です」

「じゃあな」

出て行こうとする川瀬に優哉が言葉をかけた。

「お気をつけて…」

川瀬は微笑み、保健室を出た。

二十、冷酷

川瀬たちとは別行動の卓郎は、祐史と第二校舎内に入った。懐中電灯を持つ卓郎の後から祐史が包丁を構え警戒しながらついて来る。

そして安全を確認し、ドアを閉めた。

「ひひヒ…」

数歩進んだとき、廊下の奥からあの笑い声が…。

卓郎はそちら側へ懐中電灯を向けた。

明かりの中でうごめく影。

3体はいるか… あまり相手をしたくないな。

「ひひひヒヒひい！！！」

奇声を発しながら3体の化け物が早足で二人に近づいてくる。

ちっ… 遠くからじゃ明かりを当てても怯まないか。

祐史はすでに戦闘態勢に入っている。

広い場所なら相手にしても勝てるが、狭い通路で3体を相手にするのはマズイな…。

放っておくは後々面倒だし…。

「そうだ、シャッター…」

丁度二人のすぐ前方― 左右の壁に、ガイドレールがあり、天井から防火シャッターが下ろせるようになってる。

これを下ろせば少なくとも一時的にでも敵の進行を止めることができる。

この学校の防火シャッターは自動式ではないので、金属のフック棒を使ってシャッターを下ろさなければいけない。

「祐史、明かり頼む！」

卓郎が懐中電灯を祐史に投げ渡した。祐史はかろうじて落とすこ

となくそれを受け取る。

フック棒はすぐ近くの壁に掛けてあったので、探さなくともすぐに見つかった。

急いでフック棒を引っ掴み、先端部分を天井に向けるが、そうしてる間にも3体の化け物たちは刻々と二人に迫ってきていた。

祐史が明かりで敵を照らすが、さすがに真っ直ぐな通路ではさほど効果がない。眩しそうに顔を歪めながらも、獲物の位置を把握した化け物たちは祐史に向かって直進する。

「くそっ……！ 暗くて見えない！ 祐史！ 明かりを頼む……！」

フック棒はいまだにシャッターの穴に入っていない。明るい時でも、手馴れていないとなかなか成功しないものだ。しかも今は周りが暗く、更に敵が目前まで迫っている焦りのせいで、余計に手元が狂う。

「まだか！？ タク！」

シャッターの穴の部分に明かりを当てるが、焦れば焦るほど失敗する。

「ひひひひひひひひひひ……！！！！！」

狂った笑い声を上げ、目の前まで来た化け物の一体がデッキブラシを振りかざした。

<ガンッ！>

卓郎がフック棒で敵の攻撃を防ぐ。

「うおらあ！」

攻撃を防がれた化け物は、祐史の入魂の蹴りを胸元にくらい、後方に仰け反り、倒れた。しかもそれによって、後ろにいた2体も躓かせ、怯ませることができた。

「ナイス！」

卓郎は一言言って微笑み、再びフック棒を持ち上げた。

一瞬、敵の動きを止めたのはいいが、また体勢を戻し、前進してくる。

「よし！ 掛かった！」

その言葉を聞いて、祐史に安堵の表情が戻った。

「引けえ！」

二人は力を合わせてシャッターに掛けられたフック棒を引いた。

<ガララ、ガラガラガラガラ…>

と音を立てながらシャッターが下りる。途中まで下ろせば、後はシャッターの重さに任せればいいのだが…。

そうはいかなかった。

途中で何かにつつかえ、それ以上下りなくなったのだ。見ると、シャッターの下に化け物の手が…。

そうだ… こいつらかなりの馬鹿力だった…。

片手一つで支えているにも関わらず、体重をかけてもビクともしない。

「ひっひひひひひひ…」

片手でシャッターを持ち上げながら隙間から勝ち誇ったような表情で顔を覗かす化け物。

しかし、それが運の尽き。

祐史が滑り込ませた包丁の突きがその化け物の顎の下を通り、首に刺さった。

「ビグッ…！」

瞬く間に支える力が衰え、シャッターがゆっくりと下がりはじめ

る。

祐史が首から包丁を抜くのと同時に、隙間から血しぶきが飛び散り、祐史の右腕を赤く染めた。

<ガシャン…>

支えが無くなったシャッターはそのまま完全に下りきり、廊下を遮断した。

その後も残った化け物が、その壁を破壊しようと殴り叩く。しかし、さすがに2体だけではそれを破壊することはできないらしい。祐史は無表情で包丁と腕に付いた血を振り払っている。

まるで冷酷人間のように……。

「祐史… お前……」

卓郎は言いかけた言葉を途中で吞み込んだ。

お前がお前じゃないみたいだ。

シャッターをしきりに叩く音を背後に聞きながら、二人はまっすぐ第二校舎を出た。

そこはさっきまで川瀬たちがいた第二体育館への渡り廊下。先には手洗い場が見える。

「なんだろうな？ この音」

外に出て少し経ってから立ち止まった祐史が言った。

「音？ 何の？」

卓郎は耳を澄ますが、風の音も虫の鳴き声も聞こえない。ただ、

化け物の悲鳴や何かを破壊するような音が微かに聞こえるだけ。

「聞こえないの？ この音だよ。ほら、ゴオオオ…って。中にいるときはそれほど聞こえなかったけど」

そう言われても卓郎にはそんな音は聞こえない。

「んー？ 発電機の音じゃね？ おっさんが動かしたみたいだし」
「お前、耳がいいんだろ？ 聞こえないのか？ 機械の音とかじゃないって」

たしかに俺は視力にも聴力にも自信がある。他の人間に聞こえて俺に聞こえないなんて考えられないが…。

「錯覚じゃないか？ 気にするな」

首をひねる祐史を横目に、卓郎は歩き出す。

「お、おい、どこ行くんだ？」

「第二体育館だよ。ちよつと様子を見てくる」

「ええ…？ マジで？」

「祐史は待ってろ、すぐもどる」

そう言い残し、卓郎は第二体育館へ歩いていった。

「どうなってんだよ？ あいつは」

一人残された祐史は卓郎が歩いていった通路をしばらく見つめていた。

おじさんは忠告のつもりで第二体育館に一つ目の怪物が潜んでいると言ったはずだ。なのにあいつは自らその巣窟へ向かって行った。これは明らかな自殺行為だ。

でもあいつも馬鹿じゃない。どちらかと言うと頭はいい。危険なことくらい重々承知しているはずだ。様子を見てくるだけと言っていたし…。

それに稀に見る強運の持ち主だ。そのことはよくわかっている。

……ん？ まてよ？ こんな危機的状況下にいる時点で不幸なやつか。俺達皆…。

手洗い場の縁に腰を下ろすと、コンクリートの冷たさがお尻に伝わってくる。

「はあ…」

自然と溜め息が出た。

なんでこんなことになったんだろう？ いつから俺の人生の歯車は狂い始めた？

今日この学校に来た時から？ いや、違う。この学校に入学した時点からすでに地獄行きの改札口を通っていたんだ。

俺はタクがこの学校に進学すると言ったからついてきた。

何か引かれるものがあいつにはあったからだ。

何か引かれるものがあって俺はあいつと親しくなろうとしていた。

なぜ？

俺がタクに引かれた理由…

俺は本能的にあいつを選んだのか？

たしかにタクはいいやつだ。俺が今までつくった友達の中で一番いいやつ…。

初めての親友と呼べる友達かもしれない。

心の読めないやつではあるが…。

本を辿ればあいつに出会ったところから地獄行きは決定していたのかもしれない。そんなことは思いたくないが。でもだとしたらハ

ズレくじだったのかもな…。

祐史は何気なく水道の蛇口をひねった。

<ジャァー…>

思いも寄らなかった日常の効果音が手元で聞こえた。

あれ？ 水出るじゃん…。水道は通ってるのか？

あつ、そうか。貯水槽に水が残ってるんだ。ラッキー

血まみれになった腕と顔を丹念に洗い、水を飲む。

血を見すぎたな…。綺麗な水のはずなのに血の味がする…。でも冷たくてうまい。

<ゴオオオオオオオ…>

まだ聞こえる。なんだろう？ この音。

「あなた聞こえるの？ この音が」

背後で女性の声がした。

祐史は口に含んだ水を勢いよく吐き出し、後ろを振り返る。

鼻に水が入ったのか、ツーンとした痛みが鼻の奥に走る。その痛みに耐えながら涙目で見据えた先には…

「……あんた…」

見覚えのある女性― 三つ編み、眼鏡、紺のセーター… 体育館

監視室にいたあの女が、祐史のすぐ後ろに立っていた。

二十一 殺意

何なんだ、この人は？ いつの間に後ろに？
その女はまたあの微笑を祐史に向けた。
相変わらず悲しみと憎しみに染まった微笑み。

「聞こえるのね？ この音が」
女が再び聞いた。

「この音って… この音…？」
祐史は鳴り止まないその音に耳を傾ける。
「聞こえちゃいけないんですか…？」

女は答えない。さっきと違って無表情で祐史の目を見つめている。
心を見透かされているような感覚…。
心臓の鼓動が早くなる。

「あなたは… 誰なんですか？」
声を低くし、今度は別の質問をする。
しかし、これにも女は答えない。

「何か知ってるんでしょ！？」 教えてください！」
あまり大声を出すと、化け物共に気付かれる。それはわかっている。しかし何も答えずに自分を見つめているその女に、祐史はしだいに腹が立ってきた。

何なんだ！？ この人は何がしたいんだ！？
もうわけがわからない。この女が人間ではないことはわかっている。人間だったら殴り飛ばしたいところだ。俺は何人も人の姿をした化け物を殺したんだ、もう化け物を殺すことに罪悪感なんてものはない。

無意識に右手がベルトの刃物へ動く。

……！？ 俺は何を考えているんだ？

すでに中指が包丁の柄に触れている。

今、俺は… 何をしようとしていた？

急いで刃物から手を離し、拳を固める。

祐史は怖くなった。自分の自制心が薄れていることに。

俺はこの女を殺そうと考えていたのか…？

しかし女はそんなことを気にも留めていない様子で、祐史を見ている。

怒りを抑えろ…。自分を見失うな…。

祐史は自分に言い聞かせた。

「気をつけなさい」

女はやっと祐史から目を逸らし、また微笑んだ。

「闇へ導かれないように…」

そして、女は祐史の目の前から姿を消した。

「導かれる…？」

どういう意味だ？ あの人俺に忠告しに来た… のか…？

<ジャァー…>

「おっと…」

出しっぱなしになっていた水を止め、通路の暗がりを見た。

タクのやつ遅いな… 様子を見るだけじゃなかったのか？
途端に不安が波のように押し寄せてきた。

「タク…！」

んー… やっぱり暗いな…。

卓郎は目を凝らし、ホールを上から下まで眺める。

もしもまだおっさん達が言う怪物がいたらまずは明かりは点けないほうがいい。むやみに点ければ気付かれるだけだ。

しかし、見たところ動くものはない。

卓郎はそっと懐中電灯のスイッチを入れた。

…何もいない…。

天井も壁も明かりで照らすが、何もいない。

床には大きな電球が転がっており、その破片が周りに散乱している。

奥まで行ってみるか…。

できる限り足音を消して、散らばったガラス片に気をつけながら館内を歩く。

左手で懐中電灯を持ち、ナイフを握った右手を前で構える。

どこにいる？ もしかしてもういないのか…？ そのほうが都合

がいいが。

さほど広くないので、ゆっくり歩いても奥までたどり着くのにその時間はかからなかった。

倉庫： おっさん達はこの中は調べてないと言っていた。どうせだから調べてみるか。

卓郎は扉の取っ手に手をかけた。

3回ほど深呼吸をし、扉をゆっくり手前に引く。

キィ： という軋む音を耳元に聞きながら、頭を中に入れる。
次に電灯を持った左手を…。

あれ…？

倉庫の中には剣道の防具や竹刀、柔道着などが整理されて置かれているが、一つだけおかしい物も視界に入った。

「え： ロープ…？」

ロープ―― それはその場に有るまじき物だった。

普通にロープが床に置いてあるだけなら卓郎も驚きはしないだろう。しかし、そのロープは明らかに異様だった。

まるで絞首台のロープのように輪になって、それが天井から垂れ下がり、風も吹いていないのにゆらゆらと左右に揺れている。

「なんで…？」

「シャアアうーうー…」

突然、頭上から聞こえた喉を潰したような声。

時間が止まった気がした…。

こんなところに… 隠れていたのか……。

すばやく空気を切る音が聞こえ、慌てて身を屈めると何かが髪をかすった。

そのまま前方に転がり、後ろを振り向く。

卓郎が立っていた場所の真上に一つ目の怪物が吊り下がるようになっている。

こいつが…？

くっ…！ しまった… 完全に倉庫の中に追いやられた…。

「シャアうー…うー…」

また怪物が唸った。

そしてそのまま開いた扉を塞ぐように卓郎の前に立ちはだかる。閉じ込められた…。

そうだ、光を当てれば… いや、狭い室内でそれはまずいか…？ 暴れられたらどうなるか…。

「タクっ！」

「ヒヤアアああー…！…！…！」

祐史の叫び声の後に怪物の悲痛の声が響いた。

「祐史…！？」

「こいつ…！ とつとどけえ…！」

<ザシュッ！>

<ザシュッ!>

祐史が何度も包丁を怪物に突き刺す。

「シャワアアー……!!!」

さすがにこれには耐え切れなかったのか、怪物は壁を飛び跳ね、天井に張り付いた。

卓郎の肩や腕に血液が滴る。

<ガタン…!>

倉庫の扉を閉めた後は、ひたすら全力疾走。

「助かった!」

卓郎が走りながらお礼を言うが、返ってきた言葉は手厳しいものだった。

「お前ほんと馬鹿だろ! 馬鹿だよな!？」

「……」

反論できない自分が悲しかった…。

二十二 意志

昇と優哉を保健室に残した川瀬は、2階への階段を慎重に上っていた。

底無しの恐怖で足は震え、段差を踏み外してしまいそうだ。

この状況で恐怖しない人間なんているのだろうか？ 死を恐れない人間なんているのだろうか？ もう先へ進むのは嫌だ。いつそのことじつとしながら死んだほうがマシだ。

そんなことを考えながら一段一段踏みしめるように階段を上る。

今、川瀬の背中を押すのは娘を助きたいという強い思いだけ。しかし、その娘もはや生きているという保証はない。

先ほどまで射していた一筋の希望の光も、今はもう薄れて見えな

い。

逃げ出してしまいたかった…。

苦もなく死ねたらどれだけいいだろう？ 死んでしまえば過去のことにも弥生のことにも、もう苦しまずにすむ。

川瀬はそんな思いを振り切り、邪魔な感情を押し殺す。

俺は死ねないっ！！！！

そうだ、強い信念がないとここでは生きていけない。気の迷いはいざという時に判断を鈍らせる。

大切な人の命と自分の命とどちらが大切ななんて、そんな質問は意味がない。

答えは『両方大切』に決まっている。どちらも失いたくない。結局、人を生かしたいということも自分自身の欲望なのだから…。

2つ目の階段…。

この階段を上れば2階だ。この先に何がある？　これ以上の地獄が待っていないことを願おう。

上から騒々しい物音が聞こえる。一体先には何体いるのだろうか？
今、手元に明かりはない。頼りはこの出刃包丁一本か…　くそっ…。

他の持ち物は、首に卓郎に渡されたホイッスル。右ポケットにはダイナマイトとライター…。左ポケットにはドライバーと…　鍵…
…？

ああ、忘れてた。

発電小屋の鍵と一緒に適当に他の鍵も持ってきたんだ。何か使えそうなものがあるかもしれないな。

ええと…　3つか…。

『資料室の鍵』…いないか…？

『体育館の鍵』は、いない。

あとは『生徒ロッカーのマスターキー』

…：ロッカーのマスターキーか、これは使える。

たしか卓郎達と第二体育館へ行く時、ロッカースペースを通りかかったな。生徒用玄関のすぐ近くだ。

そこまで考え、川瀬は引き返すことにした。

他人のロッカーをあさるのは好ましいことではないが、高校生だからそれなりに使えそうな物を持っていそうだ。やっぱりまずは準備が必要だな。

川瀬は上ってきた階段を下り、1階の廊下を歩いていった。

理枝… 僕は……

保健室に昇と二人残された優哉は、椅子に座って机にひじを突いている。

昇はベッドに横になって何も喋らない。もっとも仲がいいわけではないので、普段の学校生活でもお互いに会話はしない。
今自分の気を紛わしてくれるのは揺れ動く蠟燭の炎だけ……。

僕はどうしたらいいんだ？

優哉には一つだけどうしても気がかりなことがあった。
それは一人の女の子… 栗色の綺麗な髪の子……。

「理枝……」

吉田理枝― 優哉の彼女だ。

高校2年生になってようやくできた恋人と呼べる存在。

優哉は彼女を一生守り抜くと誓った……。

しかし……

理枝… 君は死んでしまったのか……？

『生き残ったのは2年3組のメンバーだけらしい―』

卓郎の言葉が、鉛のように重く優哉の胸にのしかかる。
そう、理枝は同学年だが、優哉とは違うクラスなのだ。

今にも潰れてしまいそうな心…。

胸が苦しい…。誰かに心臓を握り締められているような感じ…。

怖い…。彼女を失うのがとてつもなく怖い。

もう彼女の笑顔が見れない…。彼女と話ができない…。彼女との
思い出だけが虚しく胸に残る…。

形のない思い出なんてまっぴらだ！

おじさんと一緒に行動していればもしかしたら見つかるかもしれない。
ない。

おじさんが保健室を出て行って3分ちよっと…。2階へ向かった
だろうから今ならまだ追いかけられる。

優哉は胸を押さえ、床を踏みしめる。

行くんだ…！

優哉が立ち上がった音で、小さな寝息をたてていた昇が目を開け
た。

「どうした？」

「……おじさんを手伝ってくる」

そう言って優哉は木刀と懐中電灯を手に取り、ドアの前に立った。

どんな現実であっても… 僕は耐えられるかな…？

<カチツ…>

鍵を開け、ドアノブを握ると、金属の冷たさが余計に恐怖を誘う。優哉は恐怖を握り潰すように、振り捨てるようにノブを前へ押した。

ここを出たら数秒後には死んでいるかもしれない。

・・・

それでいいじゃないか…

死ぬ時は… 死んでやるさ…。

「はは……」

狂気に満ちた空間が再び優哉を迎え入れた。

二十三 怪音

優哉は重い非常ドアを慎重に開けた。

2階には2年生の教室群がある。

おじさんも… 理枝もいるとしたらここだろう。

……でも、理枝… 本当は僕は…

階段を上がり、2階へ着いた時、防火シャッターが下りて廊下を塞いでいた。おそらく卓郎が調べに来た時に下ろしたのだろう。

優哉はシャッターの横の非常ドアから侵入を試みた。

<カタン…>

ノブを回したままの状態でゆっくりドアを閉めた。

おじさんはどこにいるんだ？

点々と明かりが灯ったまっすぐな廊下のどこにも川瀬は見当たらない。ちらほらと人の形をした赤い目の化け物が徘徊しているが、優哉の存在には気付いていない。

身を隠しながら行動するのはまず無理…。早くおじさんと合流したいのだが…。

優哉は、このままこの階の探索を始めるか、それとも探索はあきらめ、敵に気付かれないうちに背後の非常ドアから引き返すか迷っていた。

それじゃあ何のために僕は決心してここまで来たんだ？ 死を覚悟してまで…。

右手に握り締めた木刀を左手に持ち替え、冷や汗でべっとりとな
った手の平をズボンで拭い、再び木刀を構える。

この堅い木刀ならうまくやれば一撃で敵を殺せるはず。

「よっしゃっ…」

優哉は決心した。

木刀を両手で持ち、斜め下に力強く構える。

まずは前方の女子生徒…。

気付かれないように足音を消し、ゆっくりと近づく…。

くらえっ…！

<バキッ…！！>

木刀を、折れそうな勢いで敵の後頭部に叩き込んだ。

「きいッ…！」

女子生徒はふらっと膝をつく。

—
すかさず木刀を頭上に振り上げ、2メートルほど前の男子生徒へ

木刀が振り下ろされる寸前、男子生徒が振り向いた。

……！！！！

「くっそっ…！」

<ドッ…！！>

「ぎ… ギェ… え……」

男子生徒は叫びを上げることなく崩れ、同時に優哉を激しい吐き

気が襲った。

「……昌洋…… うっ……」

たった今優哉が殴り倒したのは、優哉のよく見知った人物であった。

小学生の頃からの付き合いで、優哉にとって数少ない友人の一人……。

そう、ここは2年生教室の廊下。当然襲ってくる敵のほとんどが見知った同級生達なのだ。

「昌洋……」

優哉は痙攣しながら息絶えていく友人を見下ろした。

ごめんっ……！ 昌洋っ……！

「ひひひひひっ……」

「ひひっ……」

優哉の前方から照っていた補助灯の光が突然遮られた。

ぐっ……！ 泣いている場合じゃない！

涙を拭き、前を向いた優哉は息を詰まらせた。

「ひひひひ……！」

「ひひひひひひひひ……！」

「ひひひひひひひひ……！」

「ひひひひひひひひ……！」

おびただしい笑い声が耳を劈く。

いつの間にか優哉の前方は化け物に埋め尽くされていた。

必死に混乱しそうになる脳を落ち着かせ、しっかりと現状を把握する。

ヤ
バ
:
:
:
:
:

教室の中から、廊下の奥から、優哉を狙う赤い目は次々と増えていく。

僕……死……ぬ……？
のか……？

「ひひひひひひひひひひひひひひひひ……!!!」

いや、まだ死ねない！！！！

優哉は硬直した体を無理矢理後ろへひねった。

逃げるが勝ち!!!

走り出すのと同時に、背後で聞こえるドタバタという足音。

一斉に追ってくる……振り向いたら負けだ！

引き返す方向に敵はいない。

廊下の突き当たりで左へ曲がり、非常ドアのノブに手をかけた。回し辛いノブを何とか回し、そのままドアに体重をかける。

しかし、体が前に動かなかった。寸前で化け物が優哉の左腕を掴

まえたのだ。

「……—……—!!!!!!」

気付いたときには、仰向けで床に叩きつけられていた。

<カ…タン…>

数センチ開いた非常ドアが虚しい音をたてて閉まった。

く…
くそっ…！
誰かつ…！

そうだっ… ホイッスルを…

優哉は意識の中で首にかかったホイッスルを掴もうとするが、それとは裏腹に体が微塵も動かない。声も出せない。

「ヒヒッ…！」

優哉を押さえつける化け物が、嬉しそうなニヤケ顔を見せる。

そんなに嬉しいのか？ 人を殺せることが…！？

優哉は横に顔を背け、目を瞑った。自分が死ぬところを見たくないかった…。

二宮さんみたいにバラバラにするか？ 嬉しいのなら早く殺せよ…。

だが、しばらく経っても死が来る気配はない。

代わりに妙な声が耳に入った。

「キ… こ エる…」

なんだ…！？

化け物は優哉を押さえつけながら、首を後ろへひねっている。

「お ト…」

それは明らかに目の前の化け物の口から発せられていた。

化け物が優哉から手を離し、よろよろと立ち上がる。

キコエル…？ オト…？

化け物達が優哉から遠ざかっていく。

助… かった…？

「……………」

まだ体が動かない…。

その頃、川瀬はマスターキーでロッカースペースのロッカーを片っ端から開けていた。

鍵をあける小さな音も、ここでは命取りになりかねない。

<カチッ:>

…………ハズレか…

これで10つほど開けただろうか。その中のほとんどはジャージや文房具などの雑貨で、アダルト雑誌やタバコ、化粧品といった宜しくない物もあったが、やはり不必要な物ばかりだ。

役立ちそうな物は今のところ「チョコバー」一本…

腹は減ったが食欲が出ない…。しかし、カロリーは摂っておくべきか…。

川瀬は包みを開け、チョコバーを口にくわえた。

「はぁ……」

甘いはずのチョコバーなのに、何も味を感じない…。

チョコバーをくわえたまま、また一つロッカーを開ける。

よく整理されたロッカーの中にあったのはウエストバッグ。それ以外に使えそうな物はない。

川瀬はくわえたチョコバーを胃に押し込み、ひっくり返してカラにしたウエストバッグを腰に装着した。そして、その中にポケットの必要品を放り込んだ。

まだいくつか入れることができる。とりあえず邪魔にならない程度に持っておくか。

ロッカースペースで手に入れたのは「ウエストバッグ」と「飴玉」を数個。それと「ペンライト」と「催涙スプレー」を一つ。

丁度明かりを探していたので、ペンライトは非常に助かる。催涙スプレーも効果的な武器だ。

さっそくペンライトを点灯させて引き返そうとすると、二階で何かが破壊される音が聞こえた。

急いで廊下の柱に身を隠し、見ていると、たくさんの化け物が階段を下りてきて、近くの生徒玄関から外へと歩いていく。

巻き込まれないうちに逃げるか…。

川瀬はそつともう一方の階段へ向かった。

化け物大行進か？ シャレにならん。

化け物がぞろぞろと階段を下りてくるのがわかる。

獲物を探しているのか…？ 上の階にあんなにもいたとはな…。

先にこっちへ来て正解だった。

「あれ？」

前に向き直った時、川瀬はあるものに気付いた。

今まで見向きもしなかったが、ある部屋のドア横にある小さなガラスからオレンジ色の明かりが視界に入った。

校長室だ。中に誰がいる。

ドアに駆け寄り、ノブを回すと、やはり鍵がかかっている。

無駄だとわかりつつもガチャガチャと何度か回す。

誰がいるんだ？ 開けてくれ。

声に出そうと、口を開いた瞬間、ドアが勢いよく内側に開いた。

<ゴッ……!!!!>

突然、頭に鈍い痛みが走り、同時に目の前が真っ白になった。

二十四 悪夢

川瀬は赤い鳥居の前で、白い何かを抱きかかえて立っていた。

鳥居以外は何も見えない。真っ白な空間。

いや、見えないのではなく、ただ意識していないだけかもしれない。
い。

抱きかかえているそれが何かは自分でも確かめられない。

自分が何をしているのかもわからない。ただ流れに身を委ねるように、心地よい空間を感じていた。

しばらくして川瀬は鳥居をくぐった……。

……………!!???

くっ……!! あっ……………!!!!

息ができない… 首が… 痛い…

さっきまでの白い空間は真っ黒な漆黒の空間へと変わっていた。

首…! 何かが首を絞めつける…!!

小さな…… 手……?

抱きかかえた白いものから小さい真っ黒な影のような腕が伸びて
川瀬の首を絞めつける。

苦し… い… や メ ロ……………

……………

抵抗はできない。これは現実ではないのだから……。

コトン……

その小さな手に…… 川瀬の首はもぎ落とされた……。

「ぐうつつ……！」

川瀬は全身の攣縮とともに目を覚ました。

「……………」

その様子を2人の女の子が目丸くして見つめている。

「びっくりね。大丈夫？」

呆然とする川瀬にロングヘアの女の子が聞いた。

「……………」

「でもよかった。生きてたのね、おじさん」

「おお……」

「くっ…！」

起き上がろうと腹筋に力を入れると、脳天に痛みが走る。
痛みに耐えながら何とか起き上がり、寝ていたソファから床に足を着く。

ひどい寝汗だ…。いや、ひどい夢だった…。あの夢はまさか……。
「いやあ、すいませんな」

後ろで男の低い声がした。

振り向くと、小柄な男が川瀬を見下ろしている。

「まさか人間だとは思いませんでした…」

その男は、川瀬の前にあるテーブルに蝋燭を置き、向かいのソファに腰を下ろした。

川瀬は痛む頭に手を乗せ、男を見る。

学生ではない。歳は川瀬とさほど変わらないだろう。40代半ばくらいだ。髪は短め、体格は小柄でどこことなくがっちりとしている。茶色い背広を着ていてネクタイをしているところを見ると教員の一人だろうか？

男は一息ついて言った。

「校長の… 大脇です」

「俺はどのくらい気絶していました？」

「ほんの10分程度です。すいません。人間だとは思わなかったもので…」

オオワキシユウドウ

大脇校長― 大脇愁道が申し訳なさそうに頭を下げる。

川瀬を殴って気絶させたのはどうやらこの人らしい。

「いや、いいですよ。この状況じゃ当然のことです」

「おじさんもタイミング悪いわね」

葵が川瀬の隣に座って言った。

「君達も生きててよかったよ」

由真はテーブル横のパイプ椅子に座っている。

葵の話では、由真と保健室に向かう途中、いきなり校長にここへ引き込まれたそうだと。

「ほんと、ビックリしたわ」

葵は腕を組んで文句を言っていたが、

「歩き回るのには危ないでしょう」

という校長の意見ももつともだ。

「でも、安全な場所を探してたから丁度よかったんだけどね」

「……あの子はどうしたんだ？」

川瀬はさっきから気になっていた3人目の女の子を指差した。

その子は、隅の黒い長椅子で眠っている。

「ああ… 柴崎さんね…」

「彼女はこの部屋の前で倒れていたんです。襲われなかったのが不思議ですね」

校長が、無表情で眠る菜津稀を見ながら答えた。

「まだ目を覚まさないんです」

「……そのほうがいいかもな。しばらくは」

「ところで、何か情報は掴めたの？」

葵が川瀬の顔を見ながら問いかける。良い話を期待しているようだ。由真も期待の表情で川瀬を見ている。

「特になし。得体の知れない怪物を見かけた—— くらいだ」

それを聞いて2人はガツクリと肩を落とした。

が、すぐに葵がニコニコしながら川瀬に言った。

「私ね、弥生を見つけたわよ」

川瀬は驚いて葵を見た。

「どこで！？ 本当に弥生だったのか！？ 弥生は生きていたのか！？」

「でも南さん… あれは――」

由真が何か言いかけたが、

「いいから」

という葵の言葉に遮られた。

「その廊下にいたんだけど、声をかけても振り向かなくて、すぐどこか行っちゃったのよ。でもあの後ろ姿はたぶん弥生よ」

川瀬は頭の痛みも忘れて、じっと葵の話に耳を傾けている。

「襲ってこなかったし、化け物にはなっていないみたいよ？」

「……生きているのか…？」

希望の光が再び川瀬に射し込んできた。

「あなた娘さんを探しているんですか」

校長も話を聞いていたらしい。

川瀬は自分がこの学校にいる理由を一から話して聞かせた。

「大脇さん。あなたは見かけませんでしたか？」

「あいにく、私はこの部屋から出ていない。一体何がどうなったのか…。目が覚めたときに一度出たきりです。その時にこの――柴崎くんを見つけて…」

校長が立ち上がり、自分の机のほうに歩き出す。

そして校長用の大きな黒椅子にもたれ、顔を天井に向けた。

「私のほうが聞きたいです。これは現実なのか？」

二十五 追想

『優哉〜〜〜!』

頭の中で聞こえる楽しそうな女の子の声。

綺麗な栗色の髪を上下させながら走ってくる女の子の姿が鮮明に浮かんでくる。

「……理枝……」

二階の廊下に優哉は今だ寝そべっていた。

なぜ自分は死んでいないのか？ これは夢ではないだろうか？
闇を見すえながら、ずっとそんなことを考えていた。自分が生きて
いることが信じられなかった。

どうして僕を殺さなかったのだろうか？ 音が聞こえるとはどう
いうことなのか……？

「……やっぱり… 死ぬのは怖いよな…」

もう化け物共の気配はない。さっき何か壊すような音が聞こえた
… たぶんシャッターを壊してどっか行ったんだろう。

理枝… 探さなきゃ……

優哉が初め彼女を見つけたのは高校2年生の春、新しい学年にな

ったばかりの頃だ。

新学年になり、友達のいなくなったクラスにうんざりして廊下で立ち尽くしていた時： その子は綺麗な栗色の髪をなびかせて優哉の目の前を通り過ぎた。

この学校に髪を染めている子は少くないが、彼女の雰囲気は他と違って目立たせようとしているふうじゃなく、その空間に馴染んでいるように感じた。

それが心揺らいだ瞬間。優哉はその後ろ姿を見えなくなるまで見つめていた。

優哉は起き上がり、重々しく立ち上がった。

廊下の隅々を見ても何もいない。

理枝はいるのだろうか？

初めて彼女を見かけたときから数日が経った頃、優哉にチャンスがめぐってきた。

曇り空の下、休憩時間に一人屋上で景色を眺めていた時のこと。肌寒いせいか、屋上には誰も上がって来ず、優哉は一人だけの時間をのんびり過ごしていた。

内気な優哉はなかなか新しいクラスに溶け込めないし、他のクラスの友人達を見ても楽しそうに知らない生徒と話している。

優哉は孤独だった。

かと言って別に誰かに助けを求めていたわけではないし、助けてもらいたくもない。ただ優哉は一人の時間が好きなのだ。だから小さく聞こえたカタン… というドアの音にその時間を壊された気がした。

こんな日に僕以外にここへ来る人がいるとは…。

話し声は聞こえないから、少なくともぺちゃくちゃとうるさい女子集団でないのはわかる。

屋上を囲む高さ1メートルほどのコンクリートの塀に座っていた優哉は、近づいてくる人の気配に目を遣った。

「あ…」

聞こえたのは女の子の声。

……この子は…

この前廊下で見かけた女の子が少し驚いた表情を浮かべ、そこに立っていた。

あの時は顔はよく見えなかったが、この綺麗な栗色の髪の毛は紛れもないあの時のものだ。

「えっと… どうしたの…？」

優哉は目を丸くした。

どうやら彼女も寂しくてここへ来たようだ。

2年生になって転入してきたそうで、まだ友達もいないらしい。

この子も僕と同じようなものか。と不思議な親近感を抱いた。

彼女は吉田理枝と名乗り、まるで寂しさを吐き出すかのように、積極的に話をしてきた。

「私のおばあちゃん、イギリス人なの」

「へえ…じゃあその髪、染めてるんじゃないんだ？」

「うん、生まれつき」

二人は短時間で親しくなっていた。

「辻君ってやさしいね」

「え？ そうかな？」

「うん、やさしいよ」

照れくさかったけど、とても楽しい時間だった。

優哉は正直、内気な自分が異性と打ち解けていることが信じられなかった。

それから二人は度々屋上で話をするようになり、自然と互いに恋人という関係を認めはじめていたのだ。

楽しい時間って…なんで早く過ぎていくんだろう？

『優哉』 どうしたの？』

『ねえ、優哉』

『私、優哉のこと… 好きよ』

『優哉…』

『優哉…』

目に見えない理枝の声を頭で聞きながら、優哉はもぬけの殻となった暗い教室を調べていく。

クセになっているのか、無意識に明かりのスイッチに手が伸びるが、明かりが灯ることはない。

さっきからずっと、理枝が自分を呼ぶような幻聴に見舞われる。

いないよな… いるわけがない。

なにもいない教室を見回して、優哉は内心ホッとしていた。

『優哉…』

まただ… もう嫌だ… やめてくれ…

『優哉…』

トツ… トツ… トツ…

何か聞こえる。足音か？

「理枝：？」

……そんなはずないか。

トツ： トツ： トツ：

足音はどうやら階段を上がってきているようだ。

その階段は数分前に化け物達が下りていった階段だ。

優哉は階段から見えない死角で、上がってくる人間か化け物かを待ちかまえた。

こちらからもギリギリまで相手は見えない。

足音が同じ階に到達した。

そのまま3階に上がってくれ：！ こっちに来るなっ：！！

だが、願いも虚しく、足音は迷うことなく優哉へ近づいてくる。

優哉は一步後ろへ下がった。

「ふー：っ」

汗がこめかみから顎へ、顎から床へ滴り落ちる。

何が怖い？ 戦うことが怖いんじゃない。人を殺すことが怖いのだ。

今まで味わったことのない異様な恐怖感。生きるにはそれに打ち克たなければいけない。

優哉は唾を飲み込んだ。

「ひひ： ヒ：」

「え……?」

……うそ……

心臓が潰れそうなほど早鐘を打つ。

途端に目眩がして、優哉は床に膝をついた。

どうしてだよ……? どうして……?

足音の主―― 女生徒の化け物が優哉の目の前に姿を現したのだ。

綺麗な栗色の髪をなびかせて……。

さてと、寝てる場合じゃないな。

昇は保健室のベッドの上でいろいろと思考を巡らせていた。

これからどうするか、どうやって脱出するのか、この悪夢の原因は何なのか…。

しかし、どうしても答えが見つからない。

さっきまでの気分の悪さはもう消えている。

俺も何か行動しないと…。

そう思い、昇は蠟燭を消して保健室を出た。

「うーん…」

補助灯があるとはいえ、廊下はまだ暗い。しかし化け物がないことは確認できる。

それにしても… 静かすぎるな…。

二十六 異形

優哉は涙で霞んだ目で目の前に立つ化け物——理枝を見た。
綺麗な栗色の髪とは不調和に、その顔は昔の愛らしい面影はなく、
青白く染まり、不気味な表情を浮べている。そして恐ろしい真っ赤
な眼で優哉を見下ろしている。

「どうして…？ 理枝…？」

理枝… 僕は本当は君を見つけたくなかった…。
こんな現実が待っているのは目に見えていたことなのに… 僕は
…。

「ヒヒヒヒヒ…！」

理枝が肩を震わせて笑う。

そして手にはクラフトナイフが握られていた。

僕は君がいらないことを願っていた。君のこんな姿… 見たくなか
ったから…。

理枝がクラフトナイフを振り上げた。その表情に、優哉を殺すた
めらいはない。

「理枝え…！」

優哉は木刀を捨て、振り下ろされる理枝の手首を掴んだ。

「理枝…！ 目を覚ませ——どふっ！」

喉の奥から酸っぱい液体がこみ上げてきた。

理枝の左拳を鳩尾みぞおちに受けた優哉は腹を抱えてその場に崩れ、口に
溜まった胃液を理枝の足元に吐き出した。

「ぐっ…！ 理っ… 枝っ…。」

「ユウヤユウヤユウヤユウヤユウヤ… ヒヒヒヒひひヒヒヒイ！
！！！！」

優哉はその奇妙な狂った声に、ひどい吐き気と頭痛を覚えた。

「くそうっ！！ 理枝ええ！！！！」

「ユウヤユウヤユウヤユウヤユウヤユウヤユウヤ…！！！！」

「やめろおおおお！！！！」

「ユウー」

<バツンッ…！！！！>

突然声が途切れた。

………え………？

優哉の顔に激しい血しぶきが降りかかる。

「……理枝………？」

おぞましい光景だった。目の前に立ったままの理枝の首から上が
ごっそり無くなっていたのだ。

頭のなくなった首から噴水のように血が飛び散り、天井や床に散
乱する。

胴体が血を噴きながら後ろへ倒れた。

何が………え………？

<ボリッ… ガリ…>

それは廊下の片隅、優哉から3メートルほど前方にいた。

懐中電灯の光に照らされたそいつは、黒々しく濃い緑色の、ごつごつした丸い胴。その胴から細い手と太い足が生えているような化け物。

後ろ姿で人間の形を成していないことがわかる。

照らされていることに気付いたのか、ボリボリと堅い物を砕く音をたてながら振り向いた。

ああ…… やめてくれよ……

あの大きな赤い一つ目が照らし出された。

喰屍鬼^{グール}…… とでも言おうか……

第二体育館の怪物とは違うその姿に、優哉は更に吐き気をもよおした。

喰屍鬼が光を恐れ、後方に飛び上がった。

正面から見ると更に異様だ。大きな目の下には、それよりも大きく裂けた口。言ってみれば一つ目の巨大な蛙だ。

ただ、口に真っ黒な大きな歯が並んでいるのは蛙とは明らかに違う。

そして…… その大きな歯に、理枝の頭部が生々しい音をたてて噛み砕かれていた。

優哉の好きだった綺麗な栗色の髪が、喰屍鬼の巨大な口からダラリと垂れている。

滴り落ちる血液がその髪を黒く染める。

「う……」

ガリゴリという音と共に、栗色の髪が喰屍鬼の口の中に消えていく。

「うわあああああああ！！！！！！！！」

「あ？」

近くで悲鳴が聞こえた。

そしてその後に響いてくるホイッスルの音。

昇は上りかけていた2階への階段を一気に駆け上がった。

今の声は辻だろう。どうしたってんだ！？

2階へ駆け上がった昇は、道を塞ぐシャッターにぶつかりそうになり、急ブレーキをかけた。

「シャッターが……」

すぐに左手の非常ドアに気付き、ドアノブに飛びついた。

ドアをそっと手前に引くと、突然目の前に人影が現れ、何かから逃げるように中から飛び出てきた。

「くっ！」

その人影は勢いよく身を投げるように肩から床を滑る。

「辻！？」

優哉は横になって倒れたまま、昇を見て一瞬ホッとした顔を見せたが、すぐに必死な声で叫んだ。

「閉めてっ！！！！ 閉めて！！！！」

「何があった！？」

ぺたぺたぺたぺたぺた……

「ゴウおおおおおおオオオオオ！！！！！！」

「い！？」

妙な足音と共に聞こえたのは空気を揺るがす轟音。

そして角から走り出てきた大きな塊が、勢い余って一直線に壁に激突した。

「ああ……！？」

……狂ってる……。

その塊の姿を見て、昇は思った。

一つ目の恐ろしい怪物が大きな口を開いてこちらを振り向く。

「グウオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

二度目の轟音。昇は全身で非常ドアを押した。

どうにか非常ドアを閉めたが、直後に響いてきたゴウンッ！という音と、強い衝撃で昇は弾けとんだ。

「つつつ……」

昇はすぐに上半身を起こし、ドアがぶち破られたときに備えて、バットを構えた。

しかし……

「グウウ……」

ぺたぺたと怪物が去っていく音が聞こえる。

……あきらめたのだろうか？

「はあ…… はあ……」

「おい…… 辻…… あれは何なんだ……？」

「……わからない……」

2階からの叫び声とホイッスルの音に気付き、急いで救出に向かった川瀬の目の前に、二人の男子生徒の姿があった。

防火シャッターの前で二人は恐怖に引きつった顔をしている。

「おい、どうした？」

川瀬の呼びかけに昇と優哉が顔を向けた。

「おじさん……」

「え…… ええ…… ちよつとね…… 理科室の蛙が暴れだしたみたいで……」

昇の冗談めいたセリフに優哉が苦笑する。

かなりヤバイ目に遭ったのだろう。冗談は言えるが、腰が抜けて立ち上がれない様子だ。

川瀬は二人に肩を貸し、立ち上がらせて言った。

「まあ、無事ならそれでいい。ちよつと校長室まで来てくれ」

助けに向かう途中、聞き覚えのあるあの怪物の吠える声が聞こえた。

腰が抜けるほど恐ろしいものを見たのだとしたら…… たぶんあの怪物に遭遇したのだろうな。

俺はちゃんと姿を見たわけではないが、俺達にとってかなりの脅威になるのは間違いないだろう。後でじっくり話を聞くか。

二人は黙って川瀬の後をついてくる。

昇は、もうほとんど元の表情にもどっているが、優哉のほうは微塵もシヨックが消えないようだ。それになぜか悲しそうな表情も見せている。

「……………」

三人は一言も喋ることなく階段を下りた。

一階に到達したときだった。

「あ…」

昇が声を漏らした。

「どうした？」

「おじさん達は先に行つていてください。ちょっと忘れ物取りに行つてきます」

小声でそう言った昇は、大丈夫ですと言うように二人に手を振った。

「そうか… 早く来いよ」

「ええ、すぐ行きます」

すましたその言葉とは裏腹に、バットを持つ右手には力が籠もっているように見えた。

二十七 勝敗

2階から1階へ階段を下りた時、昇は体育館のほうへ歩いていくある人物を見つけた。

「先に行つていってください」

と、川瀬と優哉に言つて、昇はその人物を追った。

おじさん達には忘れ物を取りに行くと嘘をついた。心配させたくなかったから。

皆ががんばってるのに、今までの俺は自分でも情けなかったと思う。皆の役に立ちたい。せめて、今俺にできそうなことくらいは…。

その人物は体育館の中央に立っていた。闇の中、首を傾けてまるで何かに聞き入るように…。

長身で丸刈りの男…。真っ黒なバットを手を持っている。

「相沢…」

昇の言葉に、幸司が我に返ったように振り向いた。

「藤… 原…」

幸司が微かにニヤケた。

そしてバットを引きずりながら力無く近づいてくる。その姿はあの化け物共と見間違えそうになるくらい不気味な雰囲気だ。

黒く細い影がバットを通った床に残っているのが見える。

それは一歩近づいてくる度にだんだんはつきりと…。

血だ……。

真っ黒に見えていたバットは、べったりと血に染まっていた。それだけではない。そのバット自体にも恐ろしい細工が施してある。それを見て昇は鳥肌が立った。

まるで鬼の金棒を思わせるように、ところどころに釘が打ち付けられているのだ。

見るだけで戦意を喪失しそうだ。

いかにも狂人が考えそうなことだな…。

昇は後ずさりした。

近づいてくるほどに、感じる恐怖が強くなる。

こいつ… 人間なのか……？

闇を全身にまとう魔物――

昇は自然と後ろへ下がる足を精神力で止めた。

今、俺にできることは、こいつを説得すること…。望み薄かもしれないが、やるしかない。

「相沢… もうやめろ。仲間を殺して何になるってんだよ？」

相変わらず歩み寄ってくる殺気の塊に、震える声で話しかける。すでに3メートル前まで迫っていた。

昇はまた一步後ろへ下がった。

「お前は何かしたいんだよ！？ 戦う相手が違うだろ！！」

幸司が足を止め、釘バットを持ち上げた。

「俺が――」

バットが血を飛び散らせながら動く。

「勝者だぁっ！！！！」

ドスッ！ と音をたてて釘バットが床にぶち当たった。

昇は身を屈めて攻撃をかわすが、釘バットの脅威に足がすくみそうになる。

くそっ！ 攻撃に容赦がない！ 当たったら… 死ぬ…！！

「もうやめろ相沢ぁ！！！！」

「ハハハ…！ 俺が勝者だ…！ 俺が勝者だ…！！ 俺が勝者だぁ！！！！」

<ガゴッ！>

振られる釘バットを金属バットで防ぐ。

片手だと衝撃がすごい。両手で握りたいところだが、それだと防ぎづらくなる。

昇は走って幸司と距離をとった。

何がいいつをここまで変えさせたのか…。

普段の学校生活では、いつも奥川達と連んでがやがやしてただけのやつが…。たしかに不良かもしれないが、校則を破る以外の問題を起こすようなやつではなかった。暴力を振るうこともなく、ただ不良ということで周りから少し迷惑がられていただけの存在だった。

この脅威が逆のほうへ向いていれば…。

なぜこんなやつが生き残ったのか…。

出来すぎている…。まるで一つのシナリオに沿ってすべてが動いているような…。

そしてそのシナリオは、確実に俺達を苦しめるためのもの…。

<ズリズリズリ…>

バットを引きずる音が目の前まで来た。

いや、今はこいつをどうするか…。それだけを考えなければ。

相手は釘バット…。ベースは木製のバットだ。強度なら金属バットのほうが上だろう。でも殺傷能力は釘バットのほうが遥かに高い。一発でも当たったらかなりヤバイ。

<ブンッ…!>

幸司が無言でバットを振るう。

昇はそれをすばやく防ぐが、力に容赦のない攻撃に腕がしびれる。釘バットにこびり付いた血が顔に飛び散ってくる。

<ブンッ…!>

「ぐうっ…!」

攻撃を避ける昇の背中に釘がかすった。

<ガウン…!>

体勢を崩しながらも一心不乱に攻撃を防ぐ。

このまま連続攻撃が続くと腕がもたない…。

昇はバットを払いのけ、再度、幸司から距離をとる。

「はあ… はあ…」

両者ともすでに息があがっている。

防御だけじゃ勝てない。力では俺が上だ。こっちから攻撃を仕掛ければ勝てるかも。向こうが殺す気なら俺も殺す気で戦わないと。

それにさっきまでの攻撃で何本か釘が抜け落ちている。意外と脆いようだ。

幸司が走って攻撃を仕掛けてくる。

昇は振り上げられたバットを渾身の力で叩き払った。

「うおっ…」

釘が数本抜け飛び、幸司がよろけた隙に、手加減しつつ金属バットを振った。

「ぐふっ…!!」

横腹にバットを受けた幸司が痛みに顔を歪める。

よし！ 一発入った！

と思ったのも束の間、今度は昇の腕に痛みが走った。

しまったっ…!! くらったか…!! 釘が……!!

「くそっ…!! ぐああっ…!!」

刺さった釘が引き抜かれる痛みで身を縮める。

幸司が不気味ににやけ、次の攻撃に移ろうと、両手で釘バットを頭の上に大きく振り上げた。

死ねるか…!! クソツタレ…!!

「ああああ…!!」

昇は隙のできた幸司の腹に思い切り蹴りを入れた。

あうっ…!!

釘で穴の開いた二の腕が激しく痛むが、昇は歯を食いしばり前を見た。

幸司は尻餅をついて床に倒れたが、すぐに腹を押さえながら立ち上がろうとする。

「相沢ああ…!!」

バットを振りかぶる昇に幸司は座ったまま釘バットを前に構え、防御の姿勢をとる。

<ガウーン……!>

釘バットが弾け飛んだ。

ドンッ、と弾かれたバットが傍らの床に落下し、静止した。
幸司はポカンと口をあけて目を見開いている。

「ふー… お前の負けだ相沢」

昇の顔は安堵と喜びで満ちていた。

やった… 俺が勝ったんだ…。いまいち現実味がないけど。

「……んだと…?」

幸司が声を殺して言った。

「俺は負けてねえっ…!」

「ふざけんな…!」

昇が幸司の顔面に拳を叩きつけた。

「いいかげんにしろよ!! ゲームだか何だか知らねえけどなあ!

! お前の勝手で坂野は…!!!! それに俺達まで殺されてたまるかあ…!!」

倒れた幸司に馬乗りになり、何度も殴る昇。

「目え覚ませよ!! 相沢…!!」

「うるせえ…!!」

昇を蹴り飛ばしながら幸司が叫んだ。

「相沢——」

「巧は…!」

体育館に幸司の声が反響する。

「巧は死んじまったんだぞ…!!!!」

「相沢……」

「どうしろってんだよ……? 生き残った俺は……」

そう言い、涙を流しながら床を殴る。

「俺は生きたいんだよ……!! どんなことをしても……!! 死ぬ

わけにはいかねえんだ…！」

悲しみ溢れるその顔からは、さっきまでの狂人の表情は完全に消えていた。

……相沢… 本当はこいつも……。

「死ねねえんだ……」

「……」

「ちくしょうっ……」

そういうことか…。

「……相沢…」

泣きじゃくる幸司に昇が手を差し出した。

「お前は間違っていた。でも、もういい。俺達に協力してくれ」

「藤原……」

しかし、幸司は昇から目を背ける。

「無理だよ…… 俺……」

「無理じゃない。皆で生き残るんだ。それが一番いい」

「……藤原ああ……」

もう、誰も死なせはしない…。

そう心に決め、泣きながら抱きつく幸司にそっと腕を回した。

「俺… 人を殺したんだぞ…？」

「それはもういいんだ」

「許してくれるのかよ…？」

なおも自分の肩に顎を置いて泣き続ける幸司に昇がやさしく言った。

「ああ… 許すよ…」

だからもう苦しむな相沢。お前には仲間がいるんだ。

俺等は皆、お前の仲間なんだ。

「お前… いいやつだな……」

幸司の手がベルトに動いた。

「いいやつって… 馬鹿だよな」

<ズッ:>

「………」

……え…?

「ハハハッ」

耳元での笑い声がぼやけて聞こえる。

「……相…… 沢……?」

昇にはその現実を理解できなかった。
いや、理解したくなかったのだ。

気付いたときには床にうつ伏せに倒れていた。

その時になって初めて自分の置かれている状況を理解できた。
なぜか背中が痛む。何か… 刺さってる…?

「うっ… ぐぐ……」

体を少しでも動かすと激痛が襲ってくる。

昇の背中—— 肩甲骨の下辺りには鉄杭が突き刺さっていた。

「馬鹿は生き残れねえ」

幸司が金属バットを拾い上げた。

「相沢…… て…… めええ……」

震える声で喋る昇の首を幸司が足で踏みつける。

「俺の勝ちだ」

金属バットが背中中の鉄杭に、無惨に振り下ろされた。

もう、何も元にはもどらない。
死者も狂者も……

「ハハハハハハ…… ハハ……」

その場に響き渡るのは狂者の笑い声だけ。

「ああ…… 今…… 行くよ……」

視界が完全に暗くなる寸前、そんな声が聞こえてきた。

最期に…… 昇は一筋の涙を流した。

ただ悔しくて…… 悔しくて……。

卓郎が祐史の顔を覗き込む。

「音が… 聞こえるんだ…」

「なに？ またか」

祐史は音から逃げるかのように強く耳を押さえている。

「音ねえ…？」

再度耳を澄ますが、やはり聞こえるのは化け物共の騒ぎ立てる音だけ。祐史が言うような音はちっとも聞こえない。

祐史にしか聞こえない音？ 何か意味があるのか…？

突然、祐史が耳から手を離し、歩き出した。

「どうした？」

「……」

祐史は何も答えず、無表情で生徒玄関から外へ歩いていく。

「おい！ どうしたんだ祐史！」

卓郎が前に立ち上がり、肩をゆする。すると祐史は卓郎と目を合わせず、校門のほうを見ながら、

「呼んでいるんだよ…」

と一言だけ言った。

「呼んでる？ 何が？ おい！」

理解できないままの卓郎を振り切り、祐史は化け物の群れへ——
何してんだよ！ 馬鹿っ！！

急いで祐史に追いついた卓郎は、一息を吐き、横から祐史の頬
めがけて拳を振った。

うっ！と声を上げ、祐史が倒れた。それを卓郎が前から見下ろす。

「何考えてんだ！」

「……痛て… 殴ることないだろ…」

殴られた頬を押さえ、口を開けたまま祐史が喋った。

「お前な… 今何しようとしてた？」

呆れ声の卓郎を見て、祐史はハッとした顔をした。

「すまん… 何してんだろ。俺…」

「とにかくここから離れるぞ」

祐史の腕を掴んで引っ張り起こし、その場から去ろうとした時だった。また一体、群れへ向かってくる影が見えた。

職員、来客用玄関の前には駐車スペースが設けられていて、職員の車が何台か停められている。その前を歩いてくる人影はひよろりと高い。

「相沢だ」

しかし様子がおかしい。さっきの祐史のようにただ校門の辺りを見つめて、ぶつぶつと口を動かしながら一直線に群れへ向かっている。

おかしい… なんで人間まで？ 俺は何ともないのに。

幸司を目で追いながらこの不可解な現象に困惑していると、横から祐史が言った。

「行こう。気分悪いし…。たぶんあいつも呼ばれてるんだ」

「だから、呼ばれるって？」

何度言われても卓郎には祐史の言葉の意味がさっぱり理解できない。

「行こう」

二人は幸司が化け物の群れに入り込むのを確認し、その場を去った。

川瀬は、優哉と校長室にもどった後、他の皆と、優哉からあの子が遭ったことの話を聞いていた。

狭い室内の中央のテーブルに蝋燭が一本。それを囲んで座っている

る川瀬と葵と由真と優哉。大脇校長は自分の椅子に座っている。棚に置かれた小さな銅の人形も、蠟燭の揺れる明かりに照らされて不気味に見える。まるで怪談話をしているかのような雰囲気だ。いや、内容としてはそれに近いだろう。

話は2階に居た理由から始まった。

川瀬を手伝おうと後を追いかけたらしいが、どこかきこえない話し方だ。どうしても話したくないことがあるのだらうと、川瀬は何も言わなかった。

一つ目の喰屍鬼^{グール}の話には由真も校長も青ざめた顔で聞いていたが、前に似たような怪物を目撃している川瀬は平然と話を聞いていられた。葵もさほど恐怖を感じていないような顔をし、川瀬の横で足と腕を組んで黙っている。菜津稀は今だ目覚めず、長椅子に倒れている。

恐ろしいことといえば、今、すぐ上の階に、もしかしたら真上にその喰屍鬼がいるかもしれないという想像。これから行動する際に遭遇しかねないという不安。

「でもさー、そんな怪物どこから来たっていうの？」

話し終えた優哉に葵が聞いた。でも当然答えられるわけもなく、優哉は首を傾げた。

誰も答えられない。考えられるとすれば、あの深い闇の奥からだ。だが、恐ろしくて口には出せなかった。

その後は、皆それぞれ考え事をしているのか、長い沈黙が続いた。

「遅いですね。藤原君……」

何分かしてから優哉がぼそっと口を開いた。

「ああ」

確かに忘れ物を取りに行っただけでは遅すぎる。何かあったのだろうか？

探しに行きたいが、もう少しこの場にいたい気持ちもある。人の化け物ならまだしも、喰屍鬼なんてな……。絶対に遭遇したくはない。もう少し待ってみるか……。

「む？ 外が騒がしいですね」

校長が呟きながら窓の外を見た。川瀬も窓へ歩み寄ってブラインドの隙間から外を覗く。

たしかに、何か騒がしい。

大勢の人のうめき声や足音が聞こえてくる。しかし、目を凝らしてもこの位置からは聞しか見えない。

「見に行ってみるか」

それを聞いて校長が驚いた。

「あなた正気ですか？ 絶対にやめたほうがいい。ここに一番安全です」

「しかし……」

必死に止めようとする校長の前に、ためらいながらも川瀬は言った。

「少し様子を見てくるだけです」

また何か言われるかと思ったが、無茶をする川瀬に呆れているのか、説得も無駄だと悟ったのか。川瀬がドアにたどり着くまで一言も言葉を発さなかった。

部屋を出る時、はあ……と溜め息が聞こえた。

「おっさん」

校長室を出た川瀬の耳に卓郎の声が入ってきた。

生徒玄関から卓郎と祐史がこちらへ向かって歩いてくる。心なしか祐史は気分が悪そうだ。

おう。と二人に手の平を向けると、卓郎が後ろを振り返りながら

言った。

「それより外やバイことになってるよ」

「ヤバイ？ 俺も今から見に行くところだったんだ」

二人が川瀬の前まで来た時、校長室の中から葵が顔を覗かせた。
「どうしたの？」

二人を校長室に入れるとドアを閉めて鍵をかけた。

「皆ここにいたのか」

卓郎が全員の顔を見回す。

「藤原は？」

「彼は忘れ物を取りに行ってる… のかな？」

川瀬は曖昧に答えた。

「忘れ物？」

「あっ！ 柴崎？」

祐史が眠る菜津稀に駆け寄って、顔を確認する。

「ああ… よかった…。生きてたのか」

心からほっとした声だ。

「で、外では何が？」

「すごいことになってる。来てくれ」

すると優哉が立ち上がった。

「僕も行きます」

「それじゃ、私も行こうかな。何かじっとしてられないし」

「え？ 南さん…。私も行く」

葵の後に由真も立ち上がり、卓郎の前に集まった。

「…多いな… まあ、大丈夫だろう。祐史はここにいろよ。また
“呼ばれ”たら厄介だ」

「俺も行くよ。何が起こるのか気になる」

「……ったく…」

校長を見ると、呆れ果てたのか頭を抱えている。彼は残るようだ。

「じゃあ行くが、周りに注意しろよ」
面倒くさそうに卓郎が言った。

二十八 誘致（後書き）

今回のサブタイトル、シャレではないです；

二十九 始動

川瀬は卓郎の後ろについて1階の廊下を生徒玄関の方へ進む。
祐史、優哉、葵、由真も一緒にいてくる。

外へ出るのかと思ったが、違った。

「ここがいいかな」

卓郎が1階の男子トイレを覗いて言った。

トイレを右側に見て正面には生徒玄関。スライド式の大きなドアは閉め切られている。

しかしどこからともなく、化け物達の高い声や足音が校舎内に入ってくる。

卓郎の後に続いて川瀬、祐史、優哉、葵、由真の順に男子トイレに入る。

入ると同時に独特のアンモニア臭が鼻に付く。右手に個室、左手に小便器が並んでおり、6人も入るとかなり狭い。

川瀬は半袖の袖で鼻を覆い、深呼吸した。

卓郎が奥まで歩いて行き、窓を静かに半分近く開いた。騒ぎ声が今度ははっきりと聞こえる。

笑い声、喘ぎ声、呻き声。この上なく気持ちの悪い組み合わせだ。

男子トイレの窓は位置からして、そこからはまっすぐに校門が見える。はずなのだが…。

「……………!!!!」

それを見て卓郎と祐史以外の全員が言葉を失った。

まさかこんなことになっていたとは…。

二百… 三百体以上はいるだろう。全校生徒のほとんどの数がそこに集まっている。

一番後ろの由真が、よく見ようと背伸びをする。

「祐史、さっき妙なこと言ってたな？」

一人窓の外を見ていない祐史に卓郎が言った。

「何が起こるか気になる””って」

「……そのことか？」

「お前の言い方は確実に何か起こるというような言い方だった」

「……」

皆、窓の外を見ながらも祐史の次の言葉を待っているようだ。

「そう聞こえたか？ 鋭いな……。何て言えればいいのか。感じるんだよ」

祐史が額を押さえる。次の言葉を考えているのだろう。

「あの時、呼ばれているって言ってたが、声が聞こえるのか？」

「声じゃない。言っただろ、感じるんだって。あの音が頭に響いてくるんだよ……。最初は音だけだったけど、今は感じる。何かが俺を呼んでいるんだ。気をしっかり保ってなきゃ、心を奪われる。俺にも何が何だかわからないけど、これから何か起こるっていうのは……」

そこで頷いて続ける。

「絶対だ」

「……」

絶対——その言葉には恐怖を感じるのに十分な圧倒感があった。これから起こると言う“何か”は明らかにろくなものではないと、その場にいる全員が思っただろう。卓郎までも硬い表情をしている。しかし、おかげで化け物が減ったというのも間違いない。今、校舎内に化け物はほとんどいないはずだ。そう考えると今のところは行動しやすい。あの喰屍鬼と遭遇しなければ。

「もうすぐ来る…」

祐史が窓の外を見た。

全員が唾を飲み込んだ。歯を食いしばり、食い入るように外を見ている。

途端に外が静まり返った。

大脇は皆が校長室を出ていった後、鍵を閉め、大きな黒椅子にもたれた。

キィ…と背もたれが後ろへ下がる。書類に目を通した後にこうやって一息つくのが日頃の楽しみの一つなのだが。

目を閉じた大脇は先ほどの事を考えていた。

馬鹿なやつらだ。自ら命を捨てに行くとは。馬鹿共の考えは理解し難い。

おかしいのは自分ではなく、あいつらなのだ。そう考えると笑いが込み上げてきた。しかしそれと共に押し殺せないほどの怒りも込み上げてくる。

創立7年の私立高校。7年前この学校を創設して以来、ずっと校長という職に務めてきた。それなのに…。

化け物め…。私の所有物をめちゃくちゃにしおって…。これじゃあこの先、私はどうしたらいいんだ？

6年前だってそうだ。創設し立てだっていうのに、あんな事件が起きた。まさかあの女が自殺するとは思わなかった。そのせいで我が校の評判はガタ落ちしたんだ。遺書は見つからなかっただろうか、まあいいが。数年経ってようやく信用を取り戻したところだっ

たのに…。

「……なぜこの学校が…」

いや、なぜ私がこんな目に遭わなければならないのか？

とにかく、あの者達を死なせるわけにはいかないな。私のボディガードをしてもらわなければ…。

気付くといつの間にか外は静かになっていた。

いつも静かな時は、カチツ、カチツと時計の秒針の音が聞こえてくるが、今はそれもない。耐え難い、くつきりとした不安と孤独感。まさか全員が出て行くとは思わなかった。せめて1人でも残っていてくれれば…。

大脇は横に目を向けた。

一人いたな。

長椅子に横たわる少女を舐め回すように見つめる大脇。

可愛い寝顔、盛り上がった胸、短めのスカートから伸びる色白の足……。

ふん…と鼻を鳴らし、椅子を180度回転させる。

窓を隠す白いブラインドに、自分と椅子の影が薄く写っている。

手を上に伸ばせば影も真似をし、椅子の影から黒い手が伸びる。

背伸びをし、手に頬を乗せると、大脇は目を閉じた。

死なずに帰ってくることを願おう。ここにいれば私は安全だ。

そしてこのまま寝てしまおうかと思った時、後ろで物音がした。

安全な… はずだが…。

目を開けた大脇は凍りついた。蠟燭は後ろのテーブルに置いてある。しかし、さっきとは違い、目の前が暗い。

ブラインドに写る自分の影が別の大きな影に覆い隠されていた。

蝋燭の前に誰かが立っている。つまりは自分の後ろに…。ガタンツと音をたてながら、大脇はオーバーアクションで立ち上がった。

後ろには菜津稀が立っていた。

「……なんだ、君か…。脅かさないでくれよ…」

ドサツと腰が抜けたように椅子に座ると、くるりと後ろに向き直った。

「目が覚めたんだね。何があったのか覚えてるかい？」

菜津稀は何も言わずに、ただ校長の机の前に立っている。

最初は寝ぼけているのだろうと思ったが、どうやら様子が違う。

大脇は戦慄を覚えた。菜津稀は右手にカッターナイフを握っていた。

「私の怨みを…」

菜津稀の第一声は恐ろしいものだった。

「6年間の私の怨み…　ここで…」

カチカチツ…とナイフの刃を出す音。

「まで…！　何のことだ!？」

だが、菜津稀が発するその声には聞き覚えがあった。

「6年…　まさか、君は…」

大脇はこれまでにないくらいの恐怖を感じた。

一人の人物の顔が頭の中いっぱいに広がった。

「タケシタカヨ竹下佳世…」

竹下と呼ばれた菜津稀がふふふ…と笑った。

少女は面白くないと言いたげな表情で細い足場に立っていた。すべてを見下ろすように。

「音が止んだわね。もう始まるわよ」

「……」

「心配しなくてもあなたはまだ死なないわよ」

「……もう… やめて……」

もう一人の少女は、涙を流さず泣きじゃくっていた。もう涙が出ないのだ。

「こうなったらもう止められないわよ」

「いや……」

「何人生き残ると思う？ ふふふふ……」

「やめ…… —っ……」

何かが始まった。

三十、実情

「音が聞こえなくなった」

そう言うなり、祐史が窓の外を見た。

気持ち悪いほどの静寂に川瀬は耐えていた。

誰も喋らない。

瞬きもしない。

何が起こるか。頭の中はそれだけだった。

「人間狩りの始まりね」

校門の向こうに広がる深い深い闇。その闇に縦に一本の真っ直ぐな赤い亀裂が入った。

途端に空気が重くなる。

その亀裂が、まるで目蓋が開かれるかのように大きなレモン形に広がった。

血のように赤い大穴の出現。

強い光で、闇が一瞬にして赤く染まる。

「ブラッドホール：」

そう言ったのは卓郎だった。

誰もがその様子に見入っていた。

凄まじい。としか言いようがない。SF映画の非現実的な映像の

ような出来事が目の前で起こっているのだ。

そして同時に、外が騒がしくなった。

化け物共が再び騒ぎ出した。たとえば、一斉に校門の外――赤い闇の中へと行進を始めた。

何が起こっているのか。なんてのはどうでもよくなっていた。

<ゴウオオおおオオオオ……！！！！！！>

足音とは違う音も聞こえる。聞き覚えのあるあの轟音。

「喰屍鬼……？」

川瀬が呟いた。

「びゃああアあ……！！」

「ぎえああああ……！！」

どうなっているのかわからないが、時折、雑踏の中で化け物の悲鳴が聞こえる。

あいつらはホールの中に誘い込まれているのか。

祐史は震えている。もしも自分があ群れに加わっていたら……と考えているのだろう。

あの赤い入り口の向こうには何があるのだろうか？

数分後――

そこには数体の化け物だけが残っていた。

それらは哀れにも行進中に体勢を崩したのであろう。そのまま他

の化け物に踏み付けられたようだ。

苦しそうに地を這っている奴、ぴくぴくと痙攣している奴、すでに動かなくなっている奴。

<ゴオウオオオおおオオ：！！！！>

ホールの中から5体ほど影が現れた。

ずんぐりとした蛙のような。

「あいつだ：」

苦い顔で優哉が言った。

喰屍鬼が倒れた化け物に次々と食らいつく。

逆光で影しか見えないのがせめてもの救いだ。

そこで卓郎が窓を閉めた。

想像以上に大変なことになった。

「見たかよ：？」

「怪物が増えやがった」

「あり得ない：」

祐史、卓郎、葵が口々に言う。

これからの敵は喰屍鬼あいつらか：。

そう思うと生き残るという可能性は絶望的になる。

「急ごう。あいつらすぐにでも入ってくるぞ」

卓郎の言葉に異論はない。

入る時と同じ順番で全員がトイレを出た。

それから10歩と進まない内に、先の校長室の扉がバンツ！と開

いた。

中から大脇校長が左腕を押さえ、血相を変えた様子で飛び出てきた。そして、そのまま川瀬達に気付かずに反対側へ走っていった。そしてその後から出てきたのは……

「柴崎！」

駆け出した祐史の腕を卓郎が掴まえた。

「さて祐史！ 様子が変だ！」

そう、菜津稀は右手に血の付いたカッターナイフを持っている。どう見ても正常ではない。

そんな馬鹿な……。祐史はそんな顔をしている。

こちらの存在に気付いた菜津稀が、ゆっくりと振り向く。

眼が赤い……。

いや、気のせいだ。見た目はともかく、その眼は正常そうだった。

<カチャン……>

小さな金属音。

カッターナイフが床に落ちたかと思うと、菜津稀は一気に力が抜けたように床に倒れた。

外から咆哮が聞こえる度に気が気でなくなる。

菜津稀を校長室に運び入れ、長椅子に寝かせると、数分で目を覚ました。

「私…… 何を……？」

震えながら菜津稀が言った。

長椅子に座る菜津稀に全員の視線が注がれる。

そのまま立っていたり、座っていたりと、姿勢は思い思いだ。

「何でもないんだ。気にすることはない」

自分が人を襲ったなんて知りたくないはずだ。

川瀬は気をつかって嘘をついた。だが…。

「私、校長先生を殺そうとしてたの」

菜津稀の放った言葉は意表をつくものだった。

「覚えていたのか？」

「全部見えてたの。私がやっていること…。でも、体は私のものじゃないみたいで、止められなかった。あの女の人が…」

「あの女？」

祐史がなぜか興味深そうに食いついた。

「校長先生は確か… 竹下佳世って…。6年前に何かあったみたい」
6年前…？

川瀬には何か引っかけがあった。思い当たる節があるような…。

思い出そうと頭を捻っていると、祐史が先に手を打った。

「6年前！　そうか、確か女性教師が首を吊って自殺した！　第一
発見者は校長だとか」

ああ。と川瀬も手を打った。

生徒会室にあった教頭宛の手紙…。関係ないと思ってよく読まなかったが、竹下とかそんな名前が書いてあった気がする。

「で、それがどうしたんだ？」

「うん。その竹下っていう人が私の中に…」

「憑依していた？」

菜津稀が頷いた。

否定できない話だ。十分にあり得る。もう何でも信じることができる。

「それでね。その時その人の心の中を感じたの。その人… この学校が創設された時に就任して、それでそれから校長先生に…。いろいろとひどいセクハラされてたみたいなの。弱みを握られて辞める

ことも、告発するもできなかった…」

セクハラ…。あの真面目そうな校長が？

川瀬は、にわかには信じられなかった。しかし、真面目な人ほど裏で何をやっているかわからない。社会を経験した川瀬は、そういう腐った世の中を知っている。

「それを苦にこの学校で自殺して、遺書を書いたんだけど、それも第一発見者の校長先生に廃棄されてしまった」

「ひどいな…」

祐史が拳を締めた。

まさか、自分の学校の校長が…。そういう気持ちなのだろう。

「ちよっと待ってよ。それは本当に本当なの？」

ただ一人、葵が食ってかかった。

どこからのことを聞いているのか。憑依されたというところか？セクハラのところか？全部なのだろうか？

「わからない…。ただ私は…」

泣きそうな菜津稀。

「一体何なの？ 化け物の次は幽霊？」

「南さん、落ち着いて…」

由真が葵をなだめるが、葵は腑に落ちないようだ。

「化け物の次が幽霊か…。どうせならこの二つは繋がってるんだろう」

卓郎はいつの間にか校長机の傍の本棚のところで何か本を手に出している。

「祐史、お前が見た女はこの人か？」

手にしていた本をテーブルに置いた。

丈夫な革表紙の卒業アルバム。第一期生の時の物だ。

艶のあるページの『教員一覧』と書かれている下に、その頃の教員の写真が載せられている。校長の写真には、今よりも若干若い大脇校長が。そして一番最後の写真。卓郎の示す写真には…。

「この人が竹下佳世…？」

竹下佳世。名前の上に眼鏡をかけた女性の写真。そこそこの美人だが、笑顔に違和感がある。作り笑顔を隠しきれていない。

「この人だ。あの時の女だ」

まじまじと写真の女を見つめる祐史。

「間違いないな？」

「間違いないよ。まさかこの人が…」

三十一 契約

竹下佳世。

校長のセクハラが原因で自殺した女性教員か。

先ほど祐史にその女の霊のことを聞いた。

川瀬はもう一度卒業アルバムの写真を見た。

「重要だな。この竹下という女は」

祐史の話からすると極めて重要だ。どうかしてコンタクトできないものか？

「もしかして、その人が校長を殺すために皆をおかしくしたんじゃない？」

「いや、それはないと思うけど」

祐史が葵の見解を否定する。

「悪い人だとは思えないんだよな…」

それに卓郎も同じ意見のようだ。

「そうだな。そんなことができれば真っ先に殺されてるよ。校長」

「いい線いってると思ったんだけど」

ガクツと葵は肩を落とした。

「いい線はいつてる」

フォローの言葉の後に、川瀬は続けた。

「校長探さない」と

校長を探しに行く。

あのまま放っておいていいものかわからない。

「探さなくてもいいんじゃない？ 死ぬなら勝手に死ねって」

こう言ったのは祐史。菜津稀の話を聞いて逆上しているのだろう。実際川瀬もそうだ。

「そうかも知れないが……」

「竹下佳世をおびき出す餌にはなる」

言い詰まる川瀬の代弁をするかのように、卓郎が言った。

「あ、ああ…… まあ……」

俺はそんなこと微塵も考えていなかったのだが……。酷いことだが納得はできる。

とりあえず苦笑い。

こうして一応探しに行くことに決まった。

3人はいたほうがいいということで、川瀬の他に卓郎、祐史も志願した。

優哉を見張り役に、その他は校長室に残る。

「祐史“音”はもう大丈夫なのか？」

「心配するな。もう聞こえない」

「それはよかった」

まずは武器の確認。

3人ともナイフ系の武器だ。それと、川瀬と祐史がダイナマイトを一つずつ。

「まだ持ってたのか」

卓郎が二人のダイナマイトを見て言った。

「ハハハ。怖くて使う勇気がない。ところでお前のそのかばん。何が入ってるんだ？」

祐史が卓郎がずっと背負っているかばんを指した。

「爆弾だよ。化け物まとめて吹き飛ばすはずだったけど……。そうもいかなかった。預かっというて」

そう言っ、かばんを下ろし、優哉に託した。

「藤原がいれば……」

校長室の扉を閉めた卓郎が一言漏らした。

「……どうしたんだろうな？ もどって来ないなんて」

「おじさん…… あいつは……」

「……」

それ以上は何も言わなかった。

“もどって来ない”それが何を意味しているのかわかっているから。

「とにかく、校長が逃げていった方向を探そう。手遅れにならないうちに」

無駄な考えを抑え込むように、川瀬が重くなった場の雰囲気をごまかした。

二人も、そうだな。というようにそれに頷いた。

死がこれほど身近に感じるなんて……。

しつこく浮かんでくる死のイメージを頭から掻き消した。

私はまだまだ死なない。

竹下佳世！ お前なんか殺されはしない！

一心に竹下から逃れようと走っていた大脇は、いつの間にか体育館監視室に逃げ込んでいた。

鍵をかけ、柵を動かしてドアを塞ぐ。

菜津稀に負わされた左腕の傷が痛むが、大した怪我ではない。

「竹下…… お前の思い通りにはならん」

大脇はガラス越しに館内を見た。

死体以外は何もない。屋外への扉が開けっ放しになっているのが気になるが、たとえ何かが入ってきたとしても、さすがにここまでは来ないだろう。

後は誰かが助けに来るのを待つだけ。それまで動かずに息を潜め

ていれば襲われることはないだろう。

数分かけて呼吸を整え、考えを巡らせた。

「まったく」

自殺なんかして、私を追いつめたつもりだったのか？ あの時は私が最初に見つけたのが幸運だったが。おかげで厄介な遺書を回収することができたからな。

次は他人の体を使って私を殺そうとした。あの柴崎とかいう子が校長室の前に倒れていた時から悪巧みは始まっていたのだろうが、それも失敗に終わった。

「馬鹿な女だ」

さっさと殺せばよかったのだよ。ハハハ。

「何が可笑しいのですか？ 校長先生？」

急激に部屋の温度が下がった気がした。

まさか……

菜津稀の体に乗っ取った時と同じあの女の声。

大脇の後ろに竹下が立っていた。

侵入を防ぐための柵のバリケードも意味を成さず、竹下はそこに立っていた。

6年ぶりに見るその女の姿は、自殺したあの時と変わらない外見だ。首のところに痛々しい紫色のロープのアザも確認できる。

「校長先生」

異常な狂気を帯びている目。大脇への憎しみに染まっていることが見て取れる。

大脇は恐怖しながらも平然を装って対峙した。

「竹下佳世、しつこい女だ」

「私はあなたに殺された。そして復讐するために蘇った」
無表情で言う竹下。

「蘇った？ 馬鹿を言うな。お前は死んだんだ！ 自殺だ！ 勝手に自分で死んだんだ！」

「いえ、私は蘇った。契約をしてね」

「契約？ なんだと？」

竹下の目が鋭く歪むと、空気が更に冷え込んだ。

「悪魔との契約」

<ピキッ…>

背後のガラスにヒビが入った。

大脇は何もしていない。当然このガラスは簡単には割れないようになっているのだが。

竹下。この女の仕業だ。

圧力をかけていないにも関わらず、なおもガラスはピキピキと嫌な音をたてて亀裂を走らせる。

「な、何が…」

逃げる隙がなかった。逃げようにも自らが作ったバリケードによって道は塞がれている。

まさかこいつ、わざと私をここへ…？

館内ではいつの間にか、ずんぐりとした一つ目の怪物が2体、転がる死体をむさぼり始めていた。

三十二 窮地

昇の死体が喰屍鬼^{グール}の餌食になっている。

川瀬は苦悶の表情のままの昇を哀れみではなく怒り——昇をこんな姿にした者への怒りの眼差しで見つめていた。

体育館の扉を開いた三人が真っ先に目にしたのは昇の変わり果てた姿だった。

背中に杭のような物が刺さっている。誰がこんな酷い殺し方をしたのか？ 昇の顔を見るのが辛くなって思わず目を閉じた。

目を閉じて、肉を引きちぎり骨を砕く音が頭に痛く響いてくる。さっきまで生きていたのに……。さっきまで喋って、動いて……。確かに生きていたのに。なぜこの子がこんな最期を迎えなければならなかったのか。一人で行動させたのが間違いだったのだ。自分もついて行ってやればよかった。激しい後悔が川瀬の心に渦巻いた。

「ごめんな……」

もう何も感じなくなかった。

いくら後悔しても意味がないことはわかっている。後悔しても何も変わらないことはわかっているのだ。なぜこれほどまでに悲しいのか、人間特有の感情が恨めしく感じた。

「ああああああっ！！！」

ガシャン！とガラス割れる音と男の低い悲鳴が川瀬の時を戻した。一瞬にして自分達が今やるべきことを思い出し、川瀬は目を開けた。

「ぐふうっ……！」

監視室から男がガラスの破片と共にドサツと落下してきた。大脇

校長だ。

痛みに悶える大脇を監視室のガラスの無くなった大窓から見下すように女が立っている。

「あの人……！」

祐史が女を見て叫んだ。

卓郎が懐中電灯を向けると、女はスーと消えていった。

一瞬だけだったが顔が見えた。あの卒業アルバムに載っていた女教師の写真。6年前に自殺した竹下佳世、その姿だった。

昇をむさぼり食べていた喰屍鬼と、どこかで他の死体をむさぼっていた喰屍鬼が、産まれたての子鹿のように必死に立ち上がろうとする校長に気付いたようで、その新鮮な肉に飛び付いていった。

「ああああ……！！ やめろ……！！ やめてくれ……！！ 来るなああ……！！」

助けを乞う大脇を見て、川瀬は前へ走り出していた。

「怪物野郎……！！ こっちだ……！！」

「グウウウ……」

2体の喰屍鬼が低く低く唸り、動きを止めた。

その時になって川瀬は後悔した。なぜあの校長のために自分は命を張ったのかと。なぜかわからないが助けなければいけない気がしたのだ。それは人としての意地なのかもしれない。

喰屍鬼はすぐに飛びかかってくる。川瀬はそう思った。しかし、

喰屍鬼は2体共動きを止めたまま。

大脇と川瀬を交互に見ている。どうやら品定めをしているようだ。どちらも新鮮な肉に変わりはないが。どっちにしろもう1秒後には殺されるかもしれない。

そうだ、光を！

懐中電灯は全部で2つあったが、1つを校長室に置いてきた。つまり今ある発光器具は、卓郎の手元にあるもう1つの懐中電灯と、川瀬のポケットの中のペンライトだ。

「頼む！ 光を――」

言うまでもなかった。川瀬が口に出すのと同時に、卓郎が懐中電灯を喰屍鬼に向けていた。

2体いるが、丁度並んだように立っていたので一つの懐中電灯で十分に対処できていた。

「グアウッ！」

グールが大きな目蓋を閉じ、短い腕で顔を隠した。

「大脇さん！ 早く！！」

「あ、ああ……」

大脇は半ば4足歩行で窮地を脱した。

「走れ！！」

川瀬は尻をつく大脇の腕を肩に回し、無理矢理に引っ張って走った。

卓郎達のところまで逃れると、卓郎は懐中電灯を喰屍鬼に向けたまま後ずさる。

祐史は川瀬に手を貸し、反対側の腕を担いで走る。

「よし！ 閉めろ閉めろ！」

第二体育館のやつよりもずいぶん鈍いらしい。それが幸いした。最後に脱出した卓郎の合図で扉を閉鎖した。

「死ぬかと思った…… 死ぬか……」

ぶつぶつ言う大脇を三人がかりで引きずり、その場から離れた。一刻も早く逃げなければ扉を破って追ってくるかもしれない。

しかし、すでに数十メートル離れた扉からは何も音が響いてこなかった。

新鮮な肉はあきらめたのだろう。しかたなく昇達の死体を……。悲しみが抑えきれないほどに迫ってきた。川瀬は涙で悲しみを洗

い流した。

優哉は重たくなる目蓋をこすった。

どんな状況でも眠気はお構いなしに襲ってくるものだ。肌寒いうえ、気疲れしているので尚更だ。

校長室には優哉の他に、葵、由真、菜津稀がいる。誰一人として喋らない。獲物を求めて外を徘徊する喰屍鬼に気付かれないようにするためでもあるが、皆どことなく眠そうな目をしている。

しかし、ほんの数時間前まで皆気絶していたはずなのに不思議なことだ。

体力も精神力も限界まできていた。何日も眠っていないような感じだ。

今、この女子3人を守れるのは僕だけだ。本当なら理枝も一緒に守ってやりたかった…。

最後に見た理枝の顔を思い出すと息が苦しくなった。

あそこで喰屍鬼が現れなかったら僕は…僕は理枝を殺せたのだろうか？ たぶんあのまま逃げることもできずに理枝に切り刻まれていただろうな…。

「あ…」

そこで優哉は、重要なことに気付いた。

武器がない…。

そういえば木刀を2階の廊下に捨ててきてしまった。とんでもないミスをしてしまった…。守ろうにも優哉には戦う術がない。襲

われたら逃げるしかない。しかし、手ぶらで外へ出たら死ぬ。

卓郎に爆弾入りのかばんを預かってはいるが、使うわけにはいかない。帰ってくるまで身動きしないのが得策だろう。

ぺた… ペた… ペた…

大きな生物の独特な足音が、たった今その主が窓の外を歩いていることを知らせる。

いつ窓を割ってやつらが入ってくるかわからない。さっきまでの眠気が一気に消え去った。

ぺた… ペた…

足音が近くで止まった。

喰屍鬼と自分達との距離は壁を隔てて4メートルもないだろう。

恐ろしい人喰い怪物がそこに存在している。

「……」

歩き出さない…。入ってくる…？ ヤバイ、入ってくるぞ！

そこにいる全員が戦慄している。

無理だ。抵抗なんかできない。

「グウウウ…」

窓の外から、まるで耳元で唸っているかのように聞こえた唸りが、今から飛び込んで食い殺してやる。と言っているようだ。

「グオウウウ…」

来るっ！！！！

ぺた… ペた… ペた…

——足音は遠ざかった。

緊張感が解け、激しい脱力感。
脅かすなよ… バカヤロウ…

コツ…

今度は扉の外の廊下から足音がした。
おじさん達かな？

校長を探しに行ったにしてはやけに早い気がする。

<カチツ…>

手動ロックのつまみが勝手に回った。
え？ 鍵を開けた？ どうやって？ 誰も鍵なんて持っていない
はず…。

解けたばかりの緊張が再び襲ってきた。
誰なんだ…？

<ガチャ…>

音を立てないようにか、ゆっくりと扉は開かれた。両開きの片方の扉が完全に開かれ、そこに男がいた。

「皆いるな」

卓郎だった。

そうか… 校長が鍵を持ってたんだな。ノックの音すらも命取りになるし。

後ろには川瀬、祐史、校長もいる。

「場所移動だ。食堂まで来てくれ」

卓郎がひそやかに声をかけた。

三十三 待望

少女の顔がホールからの光で赤く照らされる。

少女は楽しそうに笑った。

「ここまで8人も生き残りがいるなんてね。なかなかのものよ」
独り言のように少女が言う。

「……どうして……？ 何が目的……？」

「ふふっ、当ててみたら？ あ、でもあなたは何も知らないんですものね？」

「え……？」

「ここで起こったこと」

少女はまた笑った。

嬉しくて笑うのか？ 楽しくて笑うのか？ それとも嘲^{あざ}けて？
鮮血を浴びた悪魔のような面持ちからは、そのどれも感じられないように思える。

「それじゃ。そろそろ会いに行ってくるわ。あなたは我慢して待っててね？」

「……！！！」

卓郎が校長室に身を潜めていた優哉達を呼び出し、食堂へと移動させた。もちろん川瀬もそれに従った。

食堂は保健室の隣にある。食堂という言葉聞いて、川瀬はまだここを調べていないことに気がついた。

期待をしてはみたが、弥生はいなかった。

だが、死体や化け物がいなかったのは救いだった。

食堂には川瀬、卓郎、祐史、校長、優哉、葵、由真、菜津稀。現在確認されている生存者全員が集まった。

室内に補助灯はない。校長室から持ってきた蠟燭に照らされたそこは、食堂にしては狭い空間だった。縦長のテーブルが2つずつ平行に並べられ、それぞれ周りを椅子が囲んでいる。

「ここのほうが安全そうね」

葵が多数ある椅子の一つに腰掛けた。

そうかもしれない。ここの窓は中庭に面している。喰屍鬼がうろつく外へ面した窓の校長室よりもいくらかは安心だ。しかし、卓郎は安全のためだけにここへ移動させたのだろうか？

当の本人である卓郎はさっそく厨房のほうでカチカチと何かを集めている。ガラス瓶が擦れ合う音みたいだ。

「何をしてるんだ？」

と聞くと、

「ちょっと考えがあったね」

それだけ返ってきた。

すごい子だ。この状況で常に冷静でいるのは彼だけだ。今更だが、こういう子が生き残ってくれていたのは幸福なことだったのだ。

大人である川瀬は恥ずかしながらも安心していた。

「校長、車のキー、持ってますか？」

厨房のカウンターから頭を出した卓郎が校長を見て言った。

「……？ 持ってはいるが……」

校長の返事に卓郎は満足そうな顔をして再び頭を隠した。

「俺は…… 弥生を探しに行く」

卓郎の行動に疑問を抱きつつ、川瀬は弥生の搜索を続行する決心をした。

「じゃあ、俺も」

祐史が川瀬に付こうとすると、

「いや、悪いけど祐史にはこっちのほうを手伝ってもらおう。おっさんも今はやめたほうがいい。死にますよ」

「そうかもな。だが行くよ。弥生はどこかで生きてるんだ」

どこにいろんだ、弥生…。

先走りしそうな気持ちを我慢しながら廊下へ出た。

弥生を見つけた。葵のその言葉を信じて、川瀬は探索を続ける決心をしたのだ。

「お前はどこにいろんだよ…？」

目に見えぬ娘に話しかけた。

誰も死んじゃいけない。

生きていた頃の昇や有里の顔と声が浮かんできた。

それを葉に、恐怖を紛わせた。

1階から2階へ――

ペンライトの光で

閉ざされた非常ドアに手を伸ばした。

優哉達はここで喰屍鬼グールに襲われた。

「……………」

川瀬は音を消しながらノブを回した。

脱出口確保のため、非常ドアを全開にし、開けっ放しにする。

もう川瀬に恐怖はない。

もうすぐ弥生に会える。なぜかそう確信していた。

自分が自分じゃないような感覚。自分の行動が他人事のように感

じる。

何かに引っ張られるかのように歩を進める。

興奮状態にあったのか、背後から近づく敵に気が付かなかった。

一瞬甲高い笑い声が聞こえ、川瀬の首に冷たい手が襲いかかった。

「ひひひひ……!!」

「うっ……!!」

喰屍鬼ではない……。まだ化け物が残っていたのか……!

川瀬は後ろに両腕をまわし、敵の右腕を掴んだ。細い腕。おそらく女性であろう。

しかし川瀬に考える余裕などなかった。

「ああああっ!!」

そのまま上体を前に倒し、力の限りその腕を引っ張った。

背中に人を背負う感覚。同時に化け物の握力が弱まる。

一本背負をまともに受けた化け物は、川瀬と目を合わせるように床に落下した。

その時間こえた、ぐしゃっという音は床に衝突した打撃音ではない。化け物――女生徒の腕が関節部分から逆方向に折れ曲がった音だ。

「ぴぎゃああああアア……!!」

痛々しい悲鳴を上げながら女生徒がのたうち回る。

長い髪を振り乱す姿を見て、一瞬ヒヤッとしたが、弥生ではなかった。

ちゃんと痛みを感じるんだ。可愛そうに、こいつらも巻き込まれただけなんだ。と、改めて思い、この被害者に哀れみの目を向けた。その姿を見ると、とうてい止めを刺す気は起こらなかった。

再び立ち上がらないうちに手早く調べてこの場を退散しよう。

川瀬は小走りに廊下を進んだ。

相変わらず絶叫する女生徒の声を背後に、それがまだ立ち上がっていないことに安心した。

「あああああ——」

ドキッとして川瀬は立ち止まった。

悲鳴が途切れたのだ。それも少しずつ小さくなってから、ではない。明らかに不自然に。途中でスイッチが切られたように…。

後に聞こえるのは硬い物を噛み砕く音。

なぜ非常ドアを開けっ放しにできてしまったのか。川瀬は自分を呪った。良かれと思ってしたことが裏目に出てしまった。

……やつしかない…。喰屍鬼だ！

振り返るな！ このまま前へ逃げるんだ！

「グオオオオオオオウ！！！」

そう思った時、咆哮が響いた。川瀬は思わず振り返ってしまった。さっきまで女生徒に食いついていたはずの喰屍鬼が川瀬目がけて猛突進してくる。ペンライトの光も物ともせず…。

その油断で判断が鈍った。やっと逃げ出そうと足が後ろへ動いたが…。

「ぐふっ…！」

腹部に強い衝撃。180度回転しようとした川瀬の体は、喰屍鬼の突進頭突きによって弾き飛び、背中から突き当たりの教室のドアに激突した。

衝撃で呼吸ができない。立って左へ走れば逃げられるのに…。

3秒ほどで肺は復活した。しかし、逃げる気力が湧かない。

意識がもうろうとする。死ぬ直前というのは不思議と楽なものだ。怖くもない。

これですべてを終わりにしよう…。

命の終わりを感じた。

「グオオオオ！！！」

本能的なものか、無意識に持ち上げられた川瀬の左腕に喰屍鬼が食いかかった。

「あゝあゝあゝっ……!!」

腕に走る激痛で川瀬は現世に引き戻された。

まだ死ぬな。ってかよ……!? くそっ!!

血生臭い息が川瀬の顔に浴びせられる。近くで見ると喰屍鬼の黒い歯は牙ではなく、人間の前歯に近い形だ。肉を切断するのには持つて来いなのだろう。噛み砕くための奥歯もあるようだ。

こんなのに腕を持っていかれてはたまらない。

腕をかじらせたまま横目で武器を探す。出刃包丁は近くに見当たらない。頭突きを食らったときに落としたに違いない。

「あゝあゝあゝ!!!!」

川瀬は喰屍鬼のごつごつした頭を右拳で殴った。しかし、その外皮は見た目どおり硬い。石を殴ったみたいだ。

その間にも喰屍鬼の切歯は川瀬の腕の筋肉に食い込んでいく。

くそっ! ボディが駄目なら……!

目の前の大きな赤い眼に川瀬の顔が映りこんでいる。自分の顔が真っ赤に染まっているようだ。

まだ、俺は染まらない!

「あああああ!!!!」

左腕の激痛に耐えながら再度振るった右拳は、喰屍鬼の眼に直撃した。

「グオオアッ!」

大きな口を開けて叫ぶ喰屍鬼。ヌルツとした感触で拳は横に逸れたものの、それなりのダメージは与えられたみたいだ。

解放された左腕にかまう暇はなく、川瀬は次の行動に出た。

右手でウエストバッグのファスナーを開け、中からスプレー缶を取り出す。ロッカースペースで手に入れた護身用の催涙スプレーだ。

再び川瀬に向かって見開かれた眼にそれを噴射した。

「グオアアオオオオ！！！！！！」

さっきよりも凄まじい轟音が近距離から耳を劈いた。

両手で目を覆う喰屍鬼を足で蹴りどけると、川瀬は逃げるために立ち上がった。

左へ逃げれば階段がある。そっちが一番確実に安全な道だろう。
左へ逃げる。左へ逃げる。左へ――

「――！！！！」

選択を誤ったな。声が聞こえた気がした。

ああ、俺はいつも選択を誤る。しかし、今日まで命に関わる誤りを起こしたことはなかったはずだ。神は俺をどうしたいんだ？

本気で神を憎んだのは今日で2度目だ。

仲間の叫びを聞きつけたのだろう。もう1体、喰屍鬼が階段を上ってきていた。今にも獲物に飛びかかろうと足をしならせている。

反対側に逃げるんだ！

脳が筋肉に命令を下す間もなく、川瀬は取り押さえられた。

「くっそっ！」

腕と足を使って食われるのを阻止するが、至極苦しい抗争だ。
結局、ここで死ぬことになるのか……！

「お父さん！」

半ばあきらめていた川瀬に少女の声が届いた。毎日聞き慣れていたあの声。川瀬が必死に捜し求めていた日常……。

「弥生…？」

……幻聴だ…。けど… 最期に娘の声が聞けてよかった…。
川瀬は全身の力を抜いた。

「お父さん！！」

「グオオアアアッ！！！！」

川瀬の額に生暖かい、ドロドロした液体が垂れた。

幻聴じゃない…？

落としたはずの出刃包丁。それが喰屍鬼の真っ赤な瞳孔に刺さり、鈍く光を反射していた。

重傷を負った喰屍鬼は、跳び上がって川瀬から退き、最初の1体と同様に混乱したように暴れまわった。

川瀬は息を切らして、自分をかばうように出刃包丁を構えている人物にピントを合わせた。

「大丈夫？ お父さん」

「……ああ…」

この瞬間をどれほど待ちわびただろう？

ありがとう。神様……

そして、命を救ってくれた愛娘に感謝した。

三十四 動揺

「弥生… 今までどこに…」

「それは後で。逃げよ！」

「あ、ああ」

とっさに、落ちていたペンライトを拾い、弥生の手を引いて破壊された防火シャッターの孔をくぐり、近くの階段を駆け下りた。とにかく娘と二人で話がしたい。川瀬の頭の中はそれだけだった。

資料室――

1階、トイレ側の階段横にあった小さな埃っぽい部屋。

ドアを閉めると、2階の喰屍鬼^{グール}の悲鳴も聞こえなくなった。

一呼吸おいてから額に垂れていたネバネバしたゲル状の液体を拭き捨てた。

「ああ… 弥生… よかった…」

川瀬は改めて娘の顔を見た。

今朝、見送った時と変わらない、弥生の顔だ。

「よかったっ…！」

娘を力強く抱きしめると、この喜びを噛み締めた。

俺はこのために戦ってきたんだ。もう絶対に離れない！

後はこの世界からどうやって脱出するかだが…。

「いって…」

川瀬は左腕をペンライトで照らした。

喰屍鬼に噛み付かれた左腕は、流血こそしていないものの、内出血で、大きな赤黒い菌形がくつきりと残っていた。

もう少しで、あの生臭い口の中に持っていかれるところだったな…。

本やプリントなどが大量に詰め込まれている棚にもたれて、あぐらをかいた。弥生は隣で両足を立てて座った。

二人の息づかいの音が小さく混じる。

川瀬はあることを思い出し、ウエストバッグを探った。そして飴玉を2つ取り出すと、一つを弥生に渡した。弥生は、ありがとう。と、それを受け取ると、包みを剥がして口に入れた。

しばらくは飴玉を口の中で転がす音だけが響いていた。

「今までどこにいたんだ？」

落ち着いた頃、最初に口にした疑問をもう一度問うた。

「……ずっと3階に隠れてたの。お父さんの声が聞こえて、思い切って出てきたんだけど……」

3階……。先にそっちを調べるべきだったのか……。

「でも……生きていてくれてよかった」

一瞬でもあきらめた自分が馬鹿に思える。

聞きたいことはいくらでもある。しかし、現実、今この子に伝えるべきことは……。

「……今、どういう状況なのかは……わかってるな？」

そんなことは誰でもわかる。

どう言っているのか、わからないせいで、間抜けな出だしになった。

それでも真面目な顔で頷いてくれる弥生。

「俺はお前の電話を受けてここへ来た。そこで河上という生徒に助けられたんだ。彼のことは知っているな？」

とりあえず経緯から順を追って説明することにした。

弥生が頷くのを見てから続けた。

「助けられて、知らされた。人間として生き残ったのは……俺と、あと一人校長を除いて2年3組——お前のクラスのメンバーだけらしい」

弥生は口で飴を転がしながら斜め下を向いて黙っている。

「それで……」

できればこの先は言いたくない。仲の良かった友達が死んでいったなんて……。中には親友と呼べる者もいただろう。だが、いずれは知ることになる。

川瀬は舐めていた飴玉を噛み砕いた。

「今現在、生き残りは、たった7人だ。俺とお前を入れて9人……」
クラスメイトのほとんどが死んでしまった。

川瀬も皆の死を思い出したくなかった。

「……」

しかし弥生に驚いた様子はなく。素直にこの辛い現実を受け入れているようだった。

ただ、無意識に流れ出たような一筋の涙は別として……

「皆食堂にいるんだ。後で一緒に行こう」

川瀬は慰めるように静かに言った。

それからは二人ともただ黙っていた。

「ねえ、お父さん。知ってる？」

しばらく川瀬の肩に寄り添っていた弥生が話し始めた。

「ん？」

「この学校の噂」

「噂……」

「この学校が建てられる時にね……。小さな子供の骨が見つかったんだって」

「骨……」

急に悪寒がはしった。全身から汗が吹き出してくる。

「そうなのか……」

「そういう話、知ってた？」

「知らない……それがどうかしたか？」

「ううん。そういう話聞いたから…」

「……………」

相変わらず悪寒が消えない。

子供の骨…？ 骨…？ 子供の…？

「うう…」

今度は激しい目眩が襲ってきた。

弥生はおだやかな顔で、川瀬の横顔を見つめている。

そんなわけ……

そんな… ある… わけが……

目が眩み… 深い闇に沈んでいった……

『おやすみ。お父さん』

『じゃあね……』

気が付いた時、川瀬は変わらず資料室の冷たい床に横たわっていた。

赤黒い歯形が残った左腕の痛みで、もうろうとした意識が次第と
はっきりしてきた。

「……弥生…」

急いで起き上がった川瀬の隣に弥生の姿はなかった。

「弥生……」

またなのか…。またお前は俺の前からいなくなってしまったのか
…？

「弥生っ…！」

どうしてだ？ どうして…！ どこに行ったんだ！？ どうして…？

「なぜなんだ…！」

何のために姿を見せたんだ？ お前は何なんだよ？ 弥生…！

『おやすみ。お父さん』『じゃあね……』

薄れていく意識の中で最後に聞いた娘の声だった。

再び消えたのはお前の意思なのか？

悔しくてしょうがなかった。床に、壁に、棚に、八つ当たりしたくなるが、その気力もない。

「お前は何なんだ…？ なぜなんだ…？」

なぜいなくなるのか？ この地獄世界と弥生は何か関係があるのか？ そればかりが頭の上を回り続ける。

「落ち着け… 冷静に考えるんだ…」

自分の意思で消えた…？

しばらく床に額をあてがって考えた。

「…あれは… 弥生だったのか…？」

頭がこんがらがってきた。

まてまて、だとしたら誰だっていうんだ？

一瞬、川瀬の脳裏に一つの影が浮かんだ。

「…馬鹿馬鹿しい…」
なぜなんだ…。

頭を悩ませていた川瀬は、車のエンジンをかける音でハッとした。

外からだ。

何事かと資料室を出て来客用玄関へ――

ちょうど玄関の前をヘッドライトを光らせた一台の軽自動車走り抜けるところだった。

「卓郎……？」

車は校門前の広いスペースの入り口に止まった。そして車の運転席のドアを内側から開けたのは、卓郎だった。助手席には祐史が乗っていたようだ。

「何をしてるんだ？」

川瀬は車から降り立った二人に駆け寄った。

「あ、おっさん」

「車なんか持ち出して何をする気だ？　ていうか車の運転もできるのか」

「さっき校長に教わった」

「簡単に教わっていきなり走り出すからな……死に直面することに、いい加減慣れたけど……」

祐史がふらふらと卓郎の横に歩いてきた。

「これ校長の車なんだよ。ちょうどオートマチック車だったからな」
「何を始めるんだ？」

そう、それが一番の疑問。

卓郎が少しだけ微笑んで言った。

「うーん、悪あがき」

校門の向こうのレモン形に広がっている赤い世界から、複数の大きな影が近づいてきていた。

三十五 攻防

ヘッドライトを校門へ向けたまま、軽自動車のエンジンは、かかり放しになっている。

「やつら、やっぱり来たか」

卓郎がホールから近づいてくる影を見て言った。

ヘッドライトの光を警戒しているのか、非常にゆっくりとした足取りだ。どうやら“白い光”には特別弱いらしい。

「あのホールを閉じない限りやつらは無限に増えるぞ」

「おい、いい加減なにを企んでいるのか話してくれないか？」

卓郎の“悪あがき”という言葉だけでは何も理解できない。

「ホールを閉じさせるんだ。強制的にでも」

そう言うのと、後部座席のドアを開けた。

そこには赤いポリタンクが2つと、ヘルメット、卓郎お手製のタイマー式爆弾と一緒に置かれていた。

「喰屍鬼共の目を掻い潜りながらこの量のガソリンを集めるのに少し時間を食った。おっさん、帰ってくるの遅かったから駄目かと思っただよ」

「ああ： 襲われたけど、なんとかか：」

あのことを言うべきかどうか迷ったあげく、言わないことに決めた。余計な推量をしてほしくなかったのだ。

「しかし、よく校長はこんな車を明け渡したよな」

祐史がその軽自動車をまじまじと見た。

つやのあるブラックの車体が、いかにも丁寧に手入れされていたことを、大切にされていたことを物語っている。

「命には換えられないからな。校長ももうすぐ来るだろう」

卓郎が言ったとおり、間もなくしてもう一台の車が奥の駐車場か

ら校門前に到着した。今度はワゴン車だ。運転席に校長の姿が確認できる。

「俺達がこっちを準備している間、皆にも他の物を準備してもらってんだ」

卓郎が言った。

後ろのドアをスライドさせて、中から優哉と葵が、瓶が入ったプラスチックの箱を片端ずつ持って出てきて、それを川瀬達の前へ慎重に置いた。

「作れるだけ作ってきたわ。ちょっと少ないかも知れないけど」

ふーっと葵が溜め息をついた。

箱に入っている瓶を確認する。瓶が20本入るプラスチックの箱に、18本の瓶が入っている。

川瀬はその一つを手にとった。

「火炎瓶か」

瓶の中には液体が入っており、口に灯油の臭いを放つ、湿った布が詰め込まれている。

「ま、こんなもんか。おっと、時間がない。おっさん、手早く説明するから聞いてくれ」

喰屍鬼の動きを確かめながら卓郎が説明を始めた。

「この車をホールへ突っ込ませる。うまくいけば――もしかしたら、だが、ホールを強制的に閉じさせることができるかもしれない。やつらに俺達の脅威を思い知らせてやるんだ」

そこまで言って、卓郎は後ろを振り返って喰屍鬼がまだ襲っていないことを確認して先を続けた。

「この車にはガソリンと爆弾が積まれている。ここからホールまでの距離は詳しくはわからないが、校門まで50メートルちょっと。爆弾のタイマーを余裕を持たせてセットして、クルーズコントロールの設定できる最低速度、45キロ出たところでシステムをオンにする。そしてすぐに飛び降りる」

「・・・・・・」

クルーズコントロールとは、アクセルを踏まなくても一定速度を維持して走行できる機能だ。それを使えば確かに可能かもしれない。しかしそれだけのスピードで飛び降りるのは、あまりにも危険すぎる。

表情から川瀬の考えを読み取ったのか、卓郎が付け加えた。

「もちろん提案したのは俺だ。俺が車に乗る。皆は援護してほしいんだ。まっすぐにホールへ攻撃できるように」

「やめろ！ 危険すぎる！」

しかし卓郎は、川瀬の警告も気にせずに準備を進める。

「どうしてもやるんなら、俺が代わりに！」

「おっさん！ おっさん。時間がないんだ。俺は覚悟が出来ている」

「けど――」

「タク！ 来るぞ！」

「グオオオオオオオオ……！！！！！！」

いくつもの咆哮が空気を振動させた。

「わかった。俺が受け止めてやるから、安心して飛び降りてくれ」

「頼んだ！」

卓郎はそう言うのと、運転席に乗り込んで自転車用のヘルメットを装着した。

「それとおっさん。川瀬、助けてやってくれよ」

卓郎が、まるで遺言のようにそう言った。

わかつている。川瀬は微笑んで頷いた。

「南さん！ 早く！」

ワゴン車から由真が降りてきた。菜津稀も乗っているのだろう。

「いいからあんたは乗ってなさい！ 私は大丈夫だから！」

今にも自分に駆け寄って来そうな由真に、葵が慌てて叫んだ。

しぶしぶ乗り込んだ由真がドアを閉めた。が、ワゴン車は川瀬達の後ろに止まったままだ。いざという時に、乗り込んで逃走できる

ようにだろうか？

運転席に座っている校長の表情は、かんばしくない。

不安になりながらも、川瀬は火炎瓶を一本掴んだ。祐史、優哉、葵も一本ずつ持って、すでに各々の発火用具で火を点けている。川瀬も急いでライターを取り出し、火を点けた。

「グオオオオオ！！！」

祐史が、自分目掛けて突進してくる喰屍鬼に、火炎瓶を投げつけた。

喰屍鬼は、たちまち大きな火の玉のようになり、奇声を上げながら速度を落として、全身を激しく揺さ振った。

校門前は早速、激しい戦場となり、悲鳴と火の粉が飛び交った。

川瀬も襲い来る目の前の敵に火炎瓶を投げつける。瓶が割れ、中に入っていた灯油に火が移り、たちどころに激しく燃え上がる。

火だるまになった喰屍鬼は、川瀬にたどり着く前に地面に倒れるが、灯油がすべて燃え、火が消えれば、またよろりと立ち上がってくる。あの石のように硬いボディには、さほど効果はないのだろうか？

「くそっ！ 恐ろしい生命力だ！」

悪態を吐きながら次の瓶に火を点ける。

18本あった火炎瓶は、ものの2分で半分以上減った。

ホールへ真っ直ぐ爆弾を突っ込ませるために、道を開かなければならない。

ホールから、また2体の影が現れた。

「きゃああああ！！！」

人間の悲鳴が校長達が乗っているワゴンから響いた。

見ると、2体の喰屍鬼がワゴンを襲っていた。一体は屋根に乗っ

かり、一体は地面で跳ねて、後面ガラスを攻撃している。校舎の喰屍鬼が騒動を聞きつけてやってきたのだろう。それを振り払うようにワゴンが急発進した。

川瀬は持っている火炎瓶を、立ち上がった喰屍鬼に叩きつけ、プラスチック箱の、更に数の減った火炎瓶の中から一つ引っ掴み、ワゴンへと走った。

<ドシャンッ!>

ジグザク走行の後、ワゴンは、20メートル先のところで校舎の――来客用玄関横の壁に衝突し、止まった。

屋根に乗っていた喰屍鬼が、反動で前へ投げ出され、音鈍く壁にはねた。

取り残されたもう一体は、川瀬の前をワゴンの獲物へ向かっていった。

川瀬は持っていた火炎瓶の布に火を点け、前へ投げた。

「グアアウウ!!!」

炎上する喰屍鬼の横を素通りし、ワゴンのスライドドアを横へ引いた。

由真と菜津稀は、シートベルトをしてなく、強い衝撃でガラスも割れていたにも関わらず軽傷で、意識もはっきりしていた。校長は運転席でエアバッグに顔をうずめている。

「校長?」

声をかけると、ゆっくり頭を起こし、川瀬に笑いかけた。

「早く出る――」

手を伸ばそうと、前屈みになった川瀬の尻に岩のような物がぶつかった。

「きゃっ!」

無理矢理車内に押し込まれた川瀬は、正面の座席に座っていた菜津稀に受け止められた。何に突き飛ばされたのかは、見なくても想

像できた。

「ゴウオオオオオ!!!」

背中に火が点いたままの喰屍鬼が、怒り狂ったような形相で川瀬を睨みつけていた。駆けつける途中に撃退したはずだったやつが、しつこく追ってきていたようだ。

車内に菜津稀の悲鳴が響いた。

睨み合うように向きを変えた川瀬は、おそらく唯一の弱点であろう、“目”を、素早くベルトから抜いた出刃包丁で切り裂いた。

「今だ、早く!」

川瀬は右手で、腰のところにあつた菜津稀の手首を掴み、左手で由真の腕を掴んだ。

校長は、手元のドアが潰れていたので、助手席側のドアまで逃れようとしていた。

川瀬は二人の手を引いた。

「早——く……」

菜津稀に振り向いた川瀬は愕然とした。由真は言葉なく震えている。

「おじさん……」

菜津稀が恐怖と痛みで震えた声を出した。

屋根に乗っていたもう一体の喰屍鬼が、菜津稀の後ろのガラスの割れた窓から頭を突き入れ、大きな口で菜津稀の左肩にかぶりついていた。

白い制服に、じわじわと血がにじんでいる。

「逃げ……て……」

「駄目だ……そんなこと……。今助けてやるから」
川瀬は喰屍鬼に体向け、体勢を整えた。

しかしそこまでだった。

外で悶える喰屍鬼と同じく、目を切り裂くはずだった包丁は、目

標に到達する直前に払いのけられ、川瀬の手元から消えてしまった。

「あああっ！！！！」

菜津稀は押し倒され、前方座席側に倒れこんだ。肩の流血はますますひどくなっているようだった。

校長が慌てて助手席のドアから外へ出て川瀬の腕を引っ張る。

「逃げましょう！ 早く！」

「何を言ってるんだ！！ あんたそれでも校長か！？ 生徒を見捨てるのか！？」

川瀬は校長の手を叩きつけるように振り解いた。耳に入るのは、外で騒ぐ喰屍鬼の悲鳴、由真の泣き叫ぶ声、菜津稀の呻き。

菜津稀は仰向けで前方座席のほうに腕を伸ばしている。

「早く！！」

川瀬と由真は、校長に引かれ、強制的にワゴンから離された。

何か助ける方法があるはずだ……！ 何か……。

川瀬は無意識にウエストバッグに手をかけた。

「……………！！？」

そこで気がついた。ウエストバッグの口がパツクリと開いていることに。そしてその中からある物が抜けていた。

川瀬は2メートル前のワゴンの車内を見た。

たしかにあの時……ライターを取り出す時にはたしかにあった。

そしてその後ちゃんと、きっちり閉じたはずだ。

「……………」

そういえば、さっき俺は、右腰のところにあった菜津稀の手首を掴んだ。まさかあの時……

それに気付いた川瀬は啞然とした。

小さく呻きながら右手を伸ばす菜津稀。左手には、ちらりと輝く銀色の筒が。そして前方座席のほうへ伸びていた手は何かを掴んでいた。黒い何かを取り出していた。よくわからないが、シガーライターのように見える。

「馬鹿っ……！！」

シガーライターが銀色の筒――ダイナマイトに近づけられ…。

「離れろ！！！！」

川瀬はとっさに、校長と由真の腕を引いて、駐車場の乗用車の陰に逃げ込んだ。

<ドゴオオンッ！！！！！>

空気が、鼓膜を切り裂くように激しく振動した。

三十六 獵人

一回目の爆発の後、二回目の爆発が起こった。ワゴン車のガソリンに引火したようだ。

燃え盛るワゴン車を、川瀬は駐車場の車の陰から眺めていた。

二度の爆発で、車内とすぐ外にいた喰屍鬼グールは間違はなく死んだだろう。だが、また尊い犠牲が出てしまった。菜津稀の命と引き換えに死んだのが喰屍鬼2体だなんて…。

川瀬は炎に向かって黙禱もくとうした。

煙は星のない闇の空へと吸い込まれていく。

やっぱり俺は無力だ。誰も守れやしない。

俺は――俺は弥生さえ見つけることができれば、それだけでいいと思っていた。大切な命さえ守ることができれば、それだけでいいと思っていた。

「俺はバカヤロウだ…」

身近な命すら守れないじゃないか…。今は周りのすべてが、俺にとって大切な命だというのに…。

「おじさんは悪くないよ…」

由真の慰めさえも、屈辱だった。

一刻も早くこの悪夢に終止符を打たなければ。

「二人はここに隠れているんだ。いいな？」

返事を待たずに、川瀬は駆け出した。

卓郎は車の運転席で、じっとその時を待っていた。

助手席の爆弾のタイマーは30秒にセットした。デジタル数字が

『30』と表示している。後部座席にはガソリン入りのポリタンク。人生最大の賭けだ。失敗した時のことなどは考えない。必ずこれで終わらせる。

何度も何度もクルーズコントロールの手順を確認する。

「まだか？」

あと2体こちらへ近づく喰屍鬼がいる。

ガソリンの臭いが、卓郎の心を少しばかり落ち着かせてくれる。

卓郎はバックミラーとサイドミラーを覗いた。川瀬の姿がない。

それにさっきの爆発は…？

校舎の白い壁がオレンジ色に染まり、黒々とした煙が立ち昇っている。

運転席側は祐史が。車を挟んで反対側に葵。その隣は優哉が守っている。

「グウオオオオ！！！」

喰屍鬼2体が車の前で左右に別れ、1体は祐史、1体は葵と優哉に襲い掛かった。

卓郎のすぐ横で戦闘が始まった。

喰屍鬼の引っ掻きを、祐史はバックステップでかわす。卓郎に気を使ってか、車から喰屍鬼を遠ざけるように戦っている。

「はぁっ、すまん！ 手間取った！」

川瀬が窓をノックして言った。卓郎は窓の開閉スイッチを押した。「何があったんだ？」

「いや、ちょっとな…。後で話す…」

その表情からは、悪い知らせしか浮かんでこない。

「わかった。後で…。フォロー、お願いします…」

自分でも声が裏返っているのがわかる。思っている以上に緊張している。

2体の喰屍鬼は片づいたようだ。ホールまでの道も開かれた。

卓郎はドアを開けた。

アクセセル： スイッチ： 脱出……。アクセセル： スイッチ脱出……。
ブレーキペダルを踏み込み、チェンジレバーに手を置いた。
おっと、その前に爆弾のタイマーを作動させないとな。

「あっ……」

駄目だ。また1体現れた。

ホールの中からまた影が1つ。大きな、大きな影……。

「おい…… 何だあれ……」

川瀬が後ずさっている。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

窓ガラスが振動するほどの雄叫び。そしてヘッドライトも気にせず、すばやく移動し、次の瞬間にはもう車の正面に立っていた。

身長は2メートル以上ある。今までの喰屍鬼よりも明らかに大型だ。ごつごつとした濃い緑色の表皮だが、形は人間に近く、腕も足も長い。目も二つある。まるで喰屍鬼になり損ねた、または、なりかけの人間のように――

「なっ…… こいつ……！」

二つの赤い眼が忙しく動く顔。その顔は―― その顔の面影は――

「相沢だ…… あの野郎……」

緑色になりつつある顔が、見覚えのある薄ら笑いを浮べた。その怪物は、間違いなく幸司だった。

そこまでして邪魔をしたいのか……！ 狂人め……！

幸司の長い腕がフロントガラスを突き破った。しかし、その腕の先の鋭い爪はギリギリのところまで卓郎には届かず、卓郎はすぐに外へ脱出した。

「タク、無事か！ 相沢め！ 生きてたのか！」

「人間の感情は死んだみたいだけどな……」

卓郎は地面に唾を吐いた。

その場の全員が立ちつくしている。

「こいつをどうにかしないと、車を動かせない」

「どうする？」

「ゴアアアアアア！！！」

笑っているような幸司の咆哮。皮膚が固まりかけた顔も、引きつりながら笑っている。

「――！ がっ……！」

卓郎の前にいた祐史が一瞬でなぎ倒された。

「祐――」

弾丸のように素早い幸司の攻撃は、すぐにターゲットを卓郎に変え、襲いかかった。

卓郎が倒された。続けざまに川瀬も無力に殴り倒され、怪物、幸司の次のターゲットは葵。

よく見知った怪物の顔を、葵は恐ろしく臭い生ゴミを見るような目で見た。

「グググッ……」

先ほど倒した喰屍鬼が苦しそうに喘いでいる。

こいつらは一回火炎瓶をぶつけても死なない。二回ぶつければ、死にはしないものの、起き上がれないまでにダメージを与えることができた。でも、そこにいるのは2メートルを超える相手だ。

葵は幸司の動き一つ一つに目を凝らしながら、ゆっくりと後ずさりした。

一瞬でも隙を見せてはいけない。三人も倒されるのを見た葵は、その攻撃がどのような凶悪なものかがよくわかった。

<カチャン…>

足が火炎瓶のプラスチック箱に当たった。警戒しながら視線を下げると、一本だけ残った瓶が目に入った。

幸司は、葵が瓶を掴み上げ、ライターを発火させる。その行動を楽しげに見ている。

「本当に怪物なのね…」

葵は灯油のしみ込んだ布に、恐る恐る着火した。

<パリン!>

目の前で嫌な音が鳴った。

手に持っていた火炎瓶は、上半分を残してあとは綺麗に無くなってしまった。もとい、邪悪な爪によって横へ吹き飛ばされた。

幸司は右腕に降りかかった灯油を一舐めし、葵を睨んだ。

明らかに楽しんでいるのだと、葵にはわかった。自分の顔がだんだんと恐怖に染まるのを。

「……変態的などろだけには変わらないみたいね…」

平然な表情を作りながらも、葵の心は恐怖でいっぱいだった。

どうして日本って国は、銃社会じゃないのかしら？ ああ… この国では自分の身さえ、ろくに守れないのね…。

最悪な状況に陥ったときは、そんなことばかり考えてしまう。

「このっ!」

優哉がこぶし程の大きさの石を幸司にぶつけた。石は首筋に当たったが、幸司は痛そうな顔をせず、ただ不機嫌そうな顔で優哉に向いた。

今よ!

握っていた割れた火炎瓶の口には、まだ小さな火がくすぶっている。葵はそれを幸司の右腕に押し付けた。

小さな火種は、ボウツと、腕に付着した灯油に燃え移り、緑色の腕は瞬く間に炎に包み込まれた。

早くこいつから離れなければいけない！

間合いが近いと不利になる。かといって敵のリーチも長い。そう、こちらにはなす術はない。できることといえば、逃げるか優哉のように石を投げるくらい。どちらが意味のある行動か、一目瞭然だ。

腕の炎にうろたえる幸司に背を向けて逃げ出した。

どこまで追ってくるかしら？

校舎の中へ逃げよう。やつは体がやたら大きいから、狭い場所なら自由に動けないはず。最も無難な考えだった。考え自体は……。しかし、葵はこの怪物の恐ろしい執念深さには気付かなかった。

バキッ！と耳の奥に響いた音と、頭に響く激痛。幸司の硬い凶器部分のどこかが後頭部を襲ったことは刹那にわかった。だがそれ以上思考することはできなかった。受身もとれない状態で、硬い地面に派手に転がった。

「うー……」

葵は唸りながら無意識に敵へ目を向けていた。

視界がひどくぼやけ、物の形もはつきりしない。それどころか周りの音も聞こえない。

幸司は片手で誰かを持ち上げているようだ。

それは人形のように、抵抗もせず……。すでに事切れたようだった。

誰かが殺された。

でもどうでもよかった。今の葵には、すべてが無関心だった。自分の“死”に対しても……。

三十七 神風

川瀬は、車を支えにして立ち上がった。

「くそっ…」

頭の痛む部分を指で押さえた。側頭部を殴られたようだ。

ああ… よかった。血は出ていない。

「……おっさん…」

傍らで、倒れたままの卓郎が川瀬に話しかけた。

「おう、大丈夫か？」

「ああ、祐史は？」

祐史も卓郎と同じで、そばに倒れている。呼吸はしているようだ。

「大丈夫。生きてる」

「よかった…」

友人の無事を聞いて多少元気になったのか、卓郎も立ち上がって頭のヘルメットを取った。

「あいつを殺さないと、また犠牲が出る…」

少し離れたところの幸司を見ると、ちょうど掲げていた死体を投げ捨てるところだった。

幸司の体に隠れて見えなかったが、誰かが餌食になったのだ。

「でも、今なら… 車を発車できる」

そう、もう行く手を阻むものはない。ホール前は静まっている。

「グオオオオ!!!」

幸司はまだ満足していないようだ。おそらく、この場の全員を殺しても満足はしないのだろう。

人間的な選択は――

二人は顔を見合わせ、同時に走った。どう戦うか。そんなことを考える暇はなかった。

車の陰に独り残された大脇は、不安で落ち着かなかった。

気がついたら隣に由真の姿がなかったのだ。どこかへ逃げたのだろう。

……怖い……

巨大な影が暴れまわっている。そんなもの見たくもなかった。

「こっち向け！ のろま！」

川瀬と卓郎が巨大な影を挑発した。

「やめてくれ……」

大脇は二人のその行動に対して、激しい怒りを覚えた。

毎回毎回、なんて無茶苦茶な連中だ！ あいつらは何がしたいんだ！？ あいつらが死んだら本当に私独りになってしまう！ それに、計画はどうしたというんだ？

大脇は卓郎から、計画の大筋を簡単に説明されていた。

車に爆弾を積んで校門の向こうへ突入させるなんて、これもまた無茶苦茶な計画だ。しかし、もっといい計画を考えられるのか、と言われても何も言い返せない。

無茶苦茶な計画だが、乗ってみようと決めたのだ。

それに…… あいつらには借りもある。

大脇は、身を屈めて車の陰に隠れながら移動した。

巨大な怪物を相手に、川瀬と卓郎は戦っている。間合いを取りながら慎重に。戦っているというよりも、誰かを守っているようだ。

二人のおかげで、怪物は大脇の存在に気付いていないようだ。

大脇は中腰のまま自分の車へ向かった。

車の近くに祐史が倒れている。

震えながら呼吸をしている祐史を、引きずって車から遠ざけた。

「ううー……」

祐史が目蓋を絞って呻った。

落ちていたヘルメットを被り、エンジンの音に雑じって運転席のドアを開けると、ガシャン！と、どこかのガラスが割れた。続いて近くから聞こえた咆哮に驚いて、隠れるように慌てて座席に座った。

タイマーは、すでに30秒にセットされていた。

使い方などは聞いていないが、キッチンタイマーのスタートのボタンで作動するのだろう。

大脇はフロントガラス越しにホールを見た。

真っ赤な光は、まっすぐこちらを照らしている。遮るものはない。何度も深呼吸して心を落ち着かせる。

なぜ私はこんなことをしているのか……。まったく、笑える。

大脇が行動に出たのは、大人としてのメンツでもある。自分も何かに貢献しなければ、生きて帰っても堂々と胸を張れないと思ったのだ。

もちろん借りもある。助けてもらったことに感謝している。

ドアが全開になっていることを確認し、思いきってタイマーを作動させた。

デジタルの数字が『30』から『29』へ変わり、すぐに『28』と、どんどん時間を減らしていく。それを見ると、せっかく落ち着きかけていた胸の鼓動が、再び激しくなった。

すぐにブレーキペダルを踏み込み、『P』の位置にあったチェンジレバーを『D』に入れた。

クルーズコントロールの機能は一度も使ったことがないが、絶対に失敗はできない。説明書で読んだ、クルーズコントロールの手順を思い出して、アクセルペダルに右足を置いた。

タイマーは『25』を表示した。

「あ…？」

突如、車内に冷氣のようなものが流れ込んだ。

<パタン…>

全開だったはずのドアが、勝手に閉まり、勝手にロックがかかった。

大脇の周りで渦巻いていた冷氣は、一箇所集まり、目に見えて人の姿に変わった。

その瞬間、大脇は何かを悟った。脳裏の奥の奥に押さえ込み、必死に考えまいとしていた事。

隣には――助手席の爆弾を透かして、一人の女がどこからともなく入って、そこに座っていた。

「お前……」

かろうじて口に出た言葉は一言だけだった。

竹下…！

金縛りのように体が動かなくなっていた。精神的なものではなく、本当に動かない。ハンドルを握った手も、ペダルに置いた足も…。
ただ一箇所、首だけは自由に動かすことができた。

あきらめの悪い女だ。腐った性格の醜い女！

「もう邪魔はないわ」

大脇にとって、もはやこの女は、死の象徴となっていた。

「くっそお…！」

竹下は、満足そうな顔で大脇を見ている。

大脇は思いつくかぎりの暴言を心の中で吐いた。
何も抵抗できない。右足が勝手にアクセルペダルを踏み込んでいくのをわかってはいても、抵抗できない。完全な操り人形と化していた。

車は徐々にスピードを上げ、あっという間に時速50キロを超えた。

校門が迫り、目の前が赤一色になった。しかし大脇の足は容赦なくペダルを踏み込む。

明白なまでの“死”の感覚。

そこはもう、すでに死の世界だった。

『9』『8』『7』…

生存者達の希望は、あまりにも非情に、一定のリズムで大脇の死のカウントを表示させている。

「さよなら、校長先生」

「うあああああああああ……！！！！！！」

車は赤い光の中へと消えた。

さあ… どうするか…。

幸司の長い腕が繰り出す攻撃を、十分な間合いを取って避けながら、卓郎は考えていた。

普通に考えて勝てる戦いではない。こんなことはただの時間稼ぎにしかないのはわかっている。

気を失っている葵をかばいながら、とにかくこれ以上の犠牲を出さないように、川瀬と二人で幸司を挟んで、両側から注意を引く。

ははっ、こんなことでいつまでもつかない？ 早く何か考えない

と…。それに：

卓郎は校門前に停車してある車に目を遣った。

早くあれを動かすんだ！　ホールから敵の応援部隊が飛び出してくる前に！

「卓郎！！」

「はっ…！！？　があっ…！！」

焦りのせいで注意がおろそかになっていた。喉元を片手で高々と吊り上げられてしまった。

「卓郎！」

<ガシャン！>

まるでそれを待っていたかのように更に更に不幸が降り注いだ。

校舎内に残っていた喰屍鬼^{グール}が、2階の窓から現れた。

窓ぐらい開けろよ！

地に降り立った2体の喰屍鬼は、すぐに川瀬を囲んだ。こうなつては不幸を呪うほかない。

「神よ…　極上の不幸をありがとよ…！！」

窒息を逃れようと、抵抗する腕の力も弱まり始めた。

幸司は卓郎を横に振り回し、1階トイレの窓枠に押し付け、首を絞める力を強めてくる。

「ぐぐっ…」

「シね…！！　シネえ…！！」

目を見開いた幸司が恐ろしい、低い声を出した。

しかし、卓郎の耳には届かなかった。だが、唯一、残された希望。オートマチック車の発進音だけは、しっかりと耳に入っていた。車は急発進し、黒い矢のように赤い世界へと放たれていった。

爆発音は聞こえなかった。

感じ取れたのは微かな空気の振動と、幸司の力が緩まる感覚。

途端に、川瀬を囲む喰屍鬼が、トランペットを吹いているような高い声を出して、土で形成されていたかのように、ぼろぼろと崩れ始めた。

その土塊が地面に山を作ったとき、核爆発のように、ホールが一瞬间赤い強烈な光を発し、一本の筋になったかと思うと、闇に溶けるように消え去った。

それまで赤く染まっていた闇は、再び漆黒を取り戻した。

ざまーみる… やってやったぜ…！ これであとは…

ホールも喰屍鬼も消えた。だがそこには、まだ幸司は存在していた。存在して、変わらず卓郎の首を絞め上げていた

なぜこいつは消えない？ 人間と怪物の中間だからか？

だが十分な隙はあった。

腕が少し下げられたおかげで、片足のつま先を窓枠に引っ掛けることができた。

「タク！」

いつの間にか目を覚ました祐史が、銀色の物を卓郎に向かって投げた。

ああ、かましてやるよ。

「くたばれ。クソツタレ！」

目の前で、キャッチしたダイナマイトの導火線に火をつけて見せると、その意味がわかったようで、幸司は卓郎を手離そうとした。もう遅い。

火花を散らすダイナマイトの尻を幸司の口に突っ込み、更にそれを思い切り蹴り込んだ。その力で、そのまま後ろの窓ガラスを破り、中に転がり込むと、トイレの個室に身を隠した。

<ドオンッ!!!>

予想通りの爆発の後、ガラスの破片と、赤い肉片がいくつも転がってきた。

これであいつは確実に死んだな。

苦しみから解放され、吐き気よりも笑いが腹の底から湧き上がった。

相沢… 死んでも、てめえの罪は消えねえよ…。

すべてが崩れ去り、この悪夢が現実を取り戻してくれることを卓郎は願った。

「………」

……まだ夢は醒めてはくれないようだった。

三十八 元兇

「南さん… 南さん…」

由真…？

「南さん、大丈夫？」

「由真… あんた…」

「ごめんなさい… 南さん…」

「…由真…？」

「ごめんなさい…」

何で謝るのよ… 由真…？

「私… 南さんに迷惑… かけたから…」

「何言ってるの。そんなこと…」

「ううん。ほんとに、ごめんなさい」

嫌な気分…。

体が痛いし、頭が重い。それに、何だか騒がしい。

「南… おい、大丈夫か？」

男の声がした。

葵はゆっくりと目を開いた。

「俺の声が聞こえるか？」

「…おじさん…」

ぼやけた川瀬の顔が葵を見下ろしている。

…えーと… ああ…

自分はどうしたのか。一番最後の記憶までたどりついて、心の中で手を打った。

あの怪物に殺されかけたんだったわ。てっきり殺されたかと思っ

たけど…。

もう一度目を瞑って、視界の霧を追い払った。

「あいつは？」

葵は幸司のことを言った。川瀬はすぐに誰のことなのか理解したらしく、何も聞き返さずに答えた。

「死んだ」

「そう… よかった…」

川瀬に助けてもらって起き上がり、そこにいる見慣れた顔の連中を眺めた。

川瀬、祐史、卓郎… 優哉…

「由真… は…？」

葵は気になっていた。目覚める直前に、夢だったのかもしれないけど、由真と会話した記憶がある。由真はなぜか謝っていた。

もちろん生きているはずだ。しかし、謝る由真の声がまだ頭にエコーしている。

「………」

「……南……」

「……え……？」

何……？ この雰囲気…… 何で皆、俯いてるの？

何かを決したように、川瀬が立ち上がって横に退いた。

そこには、捨てられた等身大の人形のように、少女が無造作に横たわっていた。

「ひいっ……」

葵の頭は真っ白に染まった。

声も出ないまま、蒼白な顔の少女のもとへ這っていくと、涙と同時に、真っ白だった頭の中に、ごちゃごちゃとしたものが大量に流れ込んできた。

首を不自然に曲げ、口元から赤い筋を這わせた由真。目を閉じて、とても安らかとは言えない死に顔。

「嘘よ… 嘘よ… 嘘よ…」

混乱の中、葵は言葉を何度も繰り返した。

「南さん… 川見… は…」

優哉が何か呟いた。

「……………」

「南さんを… 助けようとして… 飛び出してきて……」

葵は虚ろな目で優哉を見上げる。

「殺されたんだ……」

「……………」

こいつ、何て言ったの？ 由真が… 私をかばって殺された？

私の身代わりになって、この子は殺されたっていうの？

「なんで…」

葵の中で怒りが一気に爆発した。

「あんた、それを—— 由真が殺されるところを黙って見てたの？」

「いや… 僕——」

「助けもせずに、見殺しにしたのね？」

「違う。僕もあいつに殴られて、動けなかった…」

「見殺しにしたのね!？」

「違う! 本当に動けなかったんだ!」

言い訳など聞きたくない。こいつは、ただ怖かったのよ! 殴られて自分は動けない、ということを口実に、自分を動かさなかったのよ!

葵は手の平に力を入れ、優哉を殴ろうと決心した。だが、いざ立ち上がろうとすると、立ち上がる力がないことに気付き、脱力してそのままがつくりと頭を落とした。

由真… どうして謝ったのよ…? 謝るのは私のほうなのに…

葵はずっとわかっていた。由真という存在が、この状況でいかに心の支えになっていたか。気の強い葵は、自分を頼ってくる者を冷たく突き放そうとしていた。自分に素直になれず、自分に寄りかかろうとする者に冷たくしてしまう、悪い癖だった。

本当は、頼られるのが嬉しかったのに……。由真はずっと、自分が足手まといな存在なのだと責任を感じていたに違いない。だから、こんなこと……。

わかってる。私が悪かった……。他の誰も悪くない。

「ごめんね…… 由真……！」

葵は人目も気にせず、そのまま泣き崩れた。

仕方のないことだった。川瀬は、そう自分に言い聞かせた。菜津稀の死に、祐史が悲しみ、由真の死に葵が悲しむ。もちろん全員が悲しいに違いない。

優哉は葵の言葉にショックを受けているようだった。

“見殺しにしたのね？”その言葉は川瀬の心にも重く響いた。自分も菜津稀を見殺しにしたも同然なのだから。

仕方なかったなんて言葉ではすまされない。だが、そう思う他ないのだ。罪悪感是自己を破滅させる。

川瀬は優哉の肩を優しく叩いた。

葵もわかってはいるはずだ。優哉に責任がないことくらい。ただ、怒りをどこへ持って行こうか迷っているだけなんだ。

由真を殺した幸司は、ダイナマイトで頭を吹っ飛ばされ、絶命した。その後は、喰屍鬼グールと同じく、土塊と成り果てた。

果たしてこの計画は成功だったのだろうか？

祐史が言っていた。車を動かしたのは、最終的に計画をやり遂げたのは校長なのだと。校長はそのまま車と共にホールへ消えた。結局3人も死んでしまった。これは多大な犠牲に違いないのだ。一人ひとりの“死”の上に、俺達の“生”は、今、成り立っている。

成功：　とは言えないな。言っではいけない。だが、俺達は生きている。

終わらせよう。悪夢を。

「ふふふふ…」

闇から声が響いてきた。

「やってくれたわね」

反響していた笑い声のすぐ後に、女の声がはっきりと近くで聞こえた。

燃えて黒く焦げたワゴン車。もうほとんど火は消え、真っ黒な煙だけを大量に生み出している。

それを背にして、少女が立っていた。

皆の、黒く、赤く汚れた白い制服とは全く対照的に、今までずっと安全地帯にいたような、ほば白いままの制服を着ている弥生。

「川… 瀬…？」

「川瀬？」

卓郎と、祐史が弥生に近づこうと、歩き出した。

「待ってくれ」

川瀬は二人を止めた。

代わりに、川瀬が一步、弥生に近づいた。

「弥生…　なのか？」

「何を言ってるの？　お父さん」

弥生の目は明らかに弥生ではなかった。まるで鬼のような、悪魔のような、鳥肌の立つ恐ろしい目をしていた。

「あんた達、ほんとに面白いわね。こんな行動、予想していなかったわ」

「誰だよ、お前…」

卓郎はナイフを抜いていた。

「あらあら、怖いわね。私を殺すの？」

弥生の眼が鋭く光った。

「川瀬… お前… 何を知っている…？」

卓郎が震えた声で言った。体が動かせないのか、ナイフを構えたまま体も震えている。

「何をつて？ もちろん全部よ」

「…：教えてくれ。何者なんだ？」

今度は川瀬が聞いた。

「アハハ、あなたの娘よ？ わすれたの？」

「違う… お前は弥生じゃない」

「ふふふ… 教えてあげるわ。この出来事について」

言いながら、皆の表情を見ているようだった。弥生は微笑んで続けた。

「まず、私は契約者よ。悪魔と契約したの。あなた達は何も知らないわよね？ あなた達を襲っていた人間は、みーんな、その契約の生贄なの。この日が来るまで長かったわ、ほんとに」

こいつが… 操っていただと？ それに悪魔と契約？ 神話の話か？

「悪魔と契約すれば、悪魔の力を得られる。そして、私の望みが叶う」

「望み？ 何を望んでいる？」

それに弥生は答えず、マイペースに話を続ける。

「私は手に入れた力で、ここを人界と隔離し、人間を操った。この力を手に入れるにはね、相当の生贄が必要だったの。この学校の皆にはそのために死んでもらったわ。やつらはやつらの世界から、直接人界に手を出すことができないの。だから私が人界から手を貸してやったの」

「……」

「どう？ 少しはわかったかしら？」

「生贄に使うだけならなぜ… 人間を操った…？ そして、わざわざ俺達だけを残し、そいつらに殺させようとした…！？」

卓郎がフーフー言いながら言葉を絞り出した。

「そのほうが面白いでしょ？」

限界だった。もう聞きたくなかった。

こいつは弥生ではない！

「許さない… 正体を見せろ…！ お前は誰なんだ…？ あ…？

答えろお…！！」

川瀬の凄まじい怒号にもうろたえず、不気味な笑みを消さない弥生。しかし、弥生もどこか怒りを隠しているようだった。

「誰って……」

涙を拭った葵が立ち上がって弥生を睨んだ。

「こいつはあなたの娘よ…！ あなたの娘で…！ 殺人狂よ…！！

もうイヤ…！！ 殺してやる！ 殺してやる！ 殺してやる…！！」

「黙ってなさい」

弥生のその言葉と同時に、葵は喉を絞められたように、うっ！と、声を出し、黙った。

「お前は弥生じゃない！ 俺の娘なんかじゃない！」

「何を言ってるの。この子の言うとおり、私はあなたの娘で… 殺人狂よ？ あはははは…！」

「お前は… 俺の娘なんかじゃない……」

涙でがらがらになりながら、川瀬は訴えた。

俺の娘がこんなことするはずがない！

「そうね…。隠れん坊しましょ。見事、私を見つけたら、人界に帰してあげる」

何を言うのかと思えば、隠れん坊だと！？ ふざけるな！

川瀬の今の顔は、おそらくこの中の誰よりも恐ろしいものになっているだろう。それに気付いていても、この怒りを微塵たりとも抑えることは、とうていできないこと。

「でもあなた達、鬼だからってのんびりしちゃ駄目よ？ ふふふ…」

「待て…！」

弥生は校舎の中へ歩き出した。全員、体を動かさなかった。

許さない…！ 俺が見つけてやる…！！

金縛りから解放されたのは、弥生が校舎内に隠れて2分後だった。

三十九 休戦

2階の廊下――

優哉は単独、ある人物を探していた。

川瀬弥生が現れ、校舎内に“隠れた”後、生存者達は各々が思い思いの行動を取った。

感情に任せ、場を去る者、先のことを考える者、目的があり、独りどこかへ行く者と、それぞれだが、共通しているのは、誰も隠れる者を探そうとしないことだ。

もちろんそれは最終目的で、皆がそのことを忘れているわけではない。ただ、一時休戦という形をとっているだけなのだ。

あれ以来、校内は決して静かになった。1階の廊下に、土塊の山が一つできていたことから、どうやら喰屍鬼^{グール}は全滅したようだ。静かになったことから、人の化け物もないのだろう。

まだ99パーセント危険だというのは承知しているが、追われる立場から“鬼”という追う立場になれたことは、なんとなく心が楽になる。

優哉は耳を澄ませた。

「・・・・・・」

あっちか…。

顔を上げて廊下を更に進んだ。

もうここへは来ないと、固く決めていた優哉の足取りは重かった。友人を自らの手で葬った場所であり、恋人を失った場所。できる限り目を瞑って歩いた。しかし…

ここに死体は無かった。天井や壁、床に無数に散った血痕はそのままだが、死体が無い。

「生贄…」

弥生の言葉を思い出した。

生贄とはすなわち、神や悪魔に捧げる生きた貢物^{みつぎもの}…。生贄は悪魔の餌となる…。皆、やつらの餌となったのか…？

「悪魔め…」

今度は僕が葬ってやる。

2階女子トイレ――

個室から誰かがすすり泣く声が聞こえる。

優哉は深く息を吸い込んで、ゆっくりと吐いた。

「うっ… うっ… ぐすっ…」

「………」

個室の閉じたドアを前に、なかなか言葉を出せなかった。中にいる者は、優哉に気付いていないようで、ただ一心に泣いている。

「……南さん…」

勇気を出して発した言葉に、中にいる者は、はっ、と泣くのをやめた。

「……何よ…？ あんた…」

少し上ずった声で、中の葵が返した。

驚かせてしまったようだ。いきなり話しかけるのは失礼だったかと、そのとき後悔した。

「ちよつと… ここ、女子トイレよ…？」

「わかってる…。南さん… 話があるんだ」

「由真のことなら… 謝らないでよ…？」

「え…？ ああ… いや、僕にも責任があるし…」

凶星だった。優哉がここに来たのは、由真のことで葵に話を聞いてほしかったからだ。

「そうね… でも由真は… 死んだのよ」

「……」

「馬鹿よ… 隠れてればよかったのに…… 馬鹿よ…」

「……ごめん…」

「謝らないでって言ったでしょ？ 誰も悪くはなかったの。言ってみれば私が悪かった…。あの子、私をかばって死んだんだから…」
葵はべつに優哉を責めてなどいなかったと、優哉もそれをわかっていて。ただ辛かった。守れたかもしれない命が失われてしまったことが。そしてそれによって悲しむ人が近くにいることが。

見たことのない葵の悲しむ姿が、余計に優哉を困惑させていた。

「ごめんなさい…。あなたは悪くなかったのに…。ごめんなさい…」

「いいよ。僕も悪くなかったわけじゃない…」

助けようと思えば、助けられたかもしれない。あとほんの少しの勇気と、ほんの少し、自分に勝つ力があつたならば…。

「ごめんね……。ちよつと… しばらく独りにさせて…」

「うん… 気をつけてね…」

誰かを失った悲しさは、底なし沼のように自分をどこまでも溺れさせてしまう。その沼から這い上がる精神力を持たないと駄目なんだ。

理枝が何かをささやきかけたようだった。それは、再びトイレから響く、葵のすすり泣く声であった。

階段を下りたところに川瀬がいた。

どこかへ向かっていたらしく、歩みを止めて優哉に向いた。

「よお、南はどうした？」

「2階のトイレにいます… 独りにしてくれ、と」

優哉は疲れていた。葵と話ができて、彼女の口から、恨んでいないということを聞いて緊張が解けたのだ。優哉には今はそれだけで満足だった。

今はゆっくり休みたいと思った。

「わかった。気を抜くなよ」

「わかってます」

短い会話を終え、川瀬と別れた。

保健室に入った優哉は、すぐにベッドに寝転んだ。

怖くてたまらないはずなのに、独りになりたい。優哉も葵と同じ気持ちだった。

遊びの続きは… 後でいい…。

眠るつもりはない。ほんの一瞬だけの休息を…

しばらくして、ドアの向こうで足音がしたが、気にはならなかった。

川瀬は、保健室の前で優哉を見送った後、その隣の食堂へ入った。入ると、青い炎が厨房のほうに見えた。

「何してるんだ？」

卓郎が厨房のコンロでヤカンを火にかけていた。

相変わらず落ち着きのある、頼もしい背中。卓郎はヤカンから川瀬へ目を移した。

「コーヒー、おっさんも飲みます？」

「……ああ、もううよ」

卓郎がコーヒーを作っている間、川瀬は椅子に腰掛けて弥生のことを考えた。

「ブラック？ 砂糖は？」

と、時々卓郎が話しかけてくる。

「ミルクなしで、砂糖を頼むよ」

川瀬はそう答えて再び考えにふけた。

悪魔との契約。契約の生贄。隠れん坊。そして何よりも、弥生のこと。あんな弥生は見たことがなかった。いつも大人しく、優しい弥生しか川瀬は知らない。

認めたくないという気持ちと共に、とある過去の出来事が頭をよぎった。

「秋澤神社……」

忘れられないその名前。昔、この地に建っていた神社だ。

あれこれ考えているうちに、卓郎がテーブルのところへやってきた。

卓郎は、川瀬の前にコーヒーを置くと、向かいの椅子に座った。

「ありがとう」

熱いコーヒーを少しすすると、幾分ホッとする。

卓郎が、ミルクの入っている自分のコーヒーを一口飲むと、言った。

「おっさん。悪魔って、信じます？」

「悪魔…… ああ、信じるよ…… 今は」

「悪魔との契約…… あいつはそう言ってたな。契約によって力を手に入れた、と」

「俺にはわけがわからない……」

やっと謎が一つにまとまりかけている。だがその答えは…… 川瀬にとってあまりに酷なこと。

「はあ…… やっと俺がここにいる理由を理解できた」

「気を落とすことはないよ。きっと、川瀬は…… ああ、あいつが

あんなことをするはずがない」

「ありがとう……」

コーヒーの苦みが心地よかった。

「さて、困ったあいつを探さなきゃな」

呟きながら卓郎は、木製のテーブルの、空になったカップの横にナイフで何か彫っている。

「君はどこに隠れたと思う？」

「校内のどこか…… 特殊な場所じゃないか？ 校庭…… 体育館…… 屋上……」

暗闇で喋る卓郎の顔には、恐怖の色は全くうかがえない。冷静にこの遊びの真理を思量しているようだ。

「……なあ、どうして君は、そんなに冷静でいられるんだ？」

その問いに、卓郎は一瞬、ナイフを動かす手を止めた。

「冷静か……。そうだな、俺の人生って…… おまけみたいなものなんだ」

川瀬は首を傾げた。

「6年前…… 俺は死ぬはずだった」

そう言うのと、持っていたナイフを手の平に乗せて、柄の部分をつと見た。

そこに『T』という文字が刻まれている。

「河上卓馬…… このナイフは俺の父さんの形見なんだ」

「形見って……」

「俺の父さん、警察でさ。警部やってたんだ。なかなか固い人でさ、いつもごたごたに巻き込まれて……」

卓郎の表情が変わった。過去を思い出し、まるでその時の幸せに浸っているような。

「そんな性格だから、ある暴力団とも深いところまで関わってたんだ。それである日―― 6年前、父さんと母さんと俺、親子3人で

旅行に行こうと山道を走って、その時大型トラックが俺達の乗った車に突っ込んできた。そのままガードレールを破って崖下に……。俺には何がどうなったか、わからなかったけど、目が覚めたら病院のベッドで……。俺だけが生きていた」

その部分を語る卓郎の表情は、少し曇っていた。

「人目につかない道路だったし、そのトラックも逃げていて……。犯人は捕まっていない。でも後で父さんの友人だった刑事から聞いたんだ。この事故は偶然じゃなく、おそらく父さんが関わっていた暴力団の仕業だと。いろいろ邪魔だったんだろ、父さんの存在が」

「……すまない。嫌な話させて」

「いや、もう昔のことだし、今は祖父母が親代わりだし……。『強く生きろ』『自分の身は自分で守れ』が父さんの教訓だったから」

話し終わると、再びテーブルの上でナイフを動かした始めた。

「……そういえば、それからかな……。俺が泣けなくなったのは……」

カリカリと、ナイフで木を削る音だけが、数十秒間、響き続けた。いた。

“ 生きる！ ”

動きを止めた卓郎の手元には、力強い文字が刻まれていた。その文字に励まされたような気がして、気力が湧いてきた。

川瀬は勇んで、両足の裏で床を踏みしめた。

その頃、祐史は第二体育館の扉の前にいた。

持ち物は懐中電灯と包丁。武器は念のために構えておく――それが癖になってしまったのかもしれない。

周りには援護してくれる者も、ピンチになったとき助けに来てくれる者もない。だが祐史はなぜか確信していた。ここは安全だ、と。

祐史が独りで行動したのには理由がある。

どうしても、あの人ともう一度二人で話をしたかった。しなければいけないと思ったからだ。

「あの人はここにいる」

誰に対してもなく頷いていた。

三十九 休戦（後書き）

いよいよ終わりが近づいてきました。

四十、対話

祐史が倉庫の扉を開くと、案の定、その人はいた。

倉庫内はなぜか明るいように見える。考えれば今までだってそう
だ。月も無く、光は差し込まないはずなのに、本当なら完全に視界
は真っ黒なはずなのに、少しの明るさは感じられていた。この世界
はやはり特殊なのだろう。しかし、ここはそれよりも数段明るい。

「あら、いらっしやい」

微笑む女――竹下佳世は、前に会ったときよりも穏やかな顔を
していた。何かをやり遂げてすっきりしたというような。憎しみと
悲しみに染まっていた瞳も、優しい色に変わっていた。

祐史はゆっくりと倉庫の中に踏み入った。

竹下は、天井から垂れ下がった、輪になったロープの後ろ。足元
に喰屍鬼グールのものと同じような土塊が人の形をつくっていて、ここに
いた怪物のものだろうとすぐにわかった。

二人はゆっくり揺れるロープを挟んで向かい合った。

「何の用かしら？」

竹下の変わりように少し驚いて、間が生じていたことに気付かな
かった。

「少し話をしたくて来ました。あの… 校長… 死にました」

「ええ、知っているわ。でも、まさかあの男が人のため――かど
うかはわからないけど、そういうことに命を張るなんて。ちよつと
見直したわ」

「校長のおかげで皆助かりました」

そうか、校長が車から降りなかったのは、この人が…。

「あなたは何か知っていそうですね…。契約について」

「それが目的？」

「ええ」

祐史はできるだけ堂々と振舞った。この女を完全に信用したわけ

ではない。祐史が真っ直ぐにここへ来たのは、ここが彼女の死んだ場所だからだ。そう、彼女はすでに死んでいるのだ。すべてを信用できるはずがない。

ロープが左右に3往復した頃、竹下はようやく答えた。

「悪魔との契約…。契約した者は邪悪な力を手に入れる。知ってるわよ」

やはりそうか。と、心が弾んだが、次の言葉は予想だにしていなかった。

「私も契約者だから…」

「……は…?」

何て言った? 私も契約者…?

「て… ええ?」

「契約といっても、私はあまり力を得なかった。膨大な力を得ようとすれば、生贄が必要になるから。私が悪魔と交わした契約は、鮮明な、最低限の力のみ。難しい話になるわよ?」

「話してください」

祐史は迷わなかった。とにかく、今、弥生の身に起こっていることを何でもいいから知りたかった。

「人を激しく怨んで死んだ時、悪魔は現れ、そして契約を持ちかけてくるの。私は校長を怨んでいた。できることなら復讐したかった。だから私は契約したの。そして復讐できる最低限の力を私は望んだ」

「その契約の代償は…?」

「代償は私自身。悪魔と契約を交わした霊は成仏できないの。事が済んだらやつらの世界でやつらに食われる。それが最低限の代償ね。けっきょくのところ、悪魔との契約は契約者にとっては復讐のためのもののね。怨んで死んだ人が、復讐するためのもの」

黙って聞く祐史だが、話の次元がよくわからず、混乱している。

頭の中に次々と入ってくるワードを整理しつつ、考える。

「悪魔は契約した魂を食らうことを最低限の条件に、力を与える…。契約をした霊は悪魔に近い存在になるわけか…？」

「そういうことね…。悪霊ってところかしら…？ それとあなた達を襲っていた“一つ目”は――」

竹下の目線が足元の土塊に移り、また祐史にもどった。

「悪魔の根っこのようなものね…。 “一つ目”を通じて、悪魔に人の魂が集まるの」

ますます混乱する頭を必死に働かせ、話に追いつこうと努力する。

「それじゃあ、川瀬は…。」

川瀬は人間なのに、悪魔と契約した…？ どうやって…？

「でもあなたの復讐は終わったはずでは？ あなたの目的は果たされたはずなのになぜここに存在しているんです？」

「…完全には… 達成されていないわね…」

「何を…？」

竹下は首を振った。これは話してくれそうにない。

「では、あなたは6年前に自殺し、その時に契約を交わしたのでしょ？ なぜ今になって復讐を？」

これにも竹下は首を振った。

「じゃあ川瀬は… 膨大な力との代償に、自分の魂だけでは足りず、この学校の皆の魂を代償にしたと…？」

「それは… ちよつと違うみたいよ。悪魔は、魂を食らいたいがために契約を勧める。悪魔にとってはただ魂が集まればそれでいいの。あの子のような力を得るには、たしかに相応の条件を出してやるけど… この代償の大きさは異常すぎる…」

「……」

川瀬は自らすすんで大量の生贄を与えたのか？ 皆、何のために死んでいったんだ？ この女の話が本当だとして、一体何者なんだ？ 川瀬弥生は…。

「どれほどの生贄が必要になるのかは、私もよく知らない。そもそ

も、力で人を操ることは難しいことだと思うわ。操り人形のように
はできないはずよ。納得できる方法としては： たぶん、魂を抜き
取った後に、魂に細工してそれをまた体に戻した：」

魂に細工： 邪悪な魂に変えたってことか。話が突飛している。
やはり次元がわからない。

もう直接聞いてみるしかないのか：。

「……彼女を止める方法はあるんですか？」

……またロープが3往復した。

この沈黙は苦ではない。相手の返事に期待を膨らまし、待つ。き
つといい答えが返ってくるはずだ。

ロープが更に2回往復した。

竹下は残念そうに首を振った。

「私にはわからない：。彼女の真の目的が何なのか：」

「そう： ですか：」

胸の中で大いに膨らんでいた期待が、風船の空気が抜けるかのよ
うに一気にしぼんだ。

祐史は一礼してから踵を返した。

「ありがとうございます。それと、助けてくれたことにも感謝し
ます。あなたは俺があの世界に引き込まれないように警告してくれ
ました。あそこに行っていたら俺： 相沢みたいに仲間を襲ってい
たかもしれない：」

「危ないところだったわね。悪魔は邪悪な魂と化した人間を呼び寄
せていたみたい。あなたたちを襲っていた人たちと同じような魂に
なりかけていたということね」

「ええ、そうみたいです。それでは」

けっきょく、肝心なことは何一つわからなかったということか。

やはり、まずは彼女を見つけるしかないようだ。

倉庫から足を外に踏み出すと、竹下が言った。

「最後に一つ教えてあげる」

祐史はすぐに立ち止まって、その最後の一つが、今の暗い気持ちを打破してくれるものであることを願った。

竹下に背中を向けたまま、耳の神経を後ろに集中させる。

「人間は、契約者にはなれないの」

その言葉が頭の中に浸透するまで、わずかに間をおいてから、勢いよく振り返った。

「どういうことだ――」

「今のが最後の一つよ。じゃあね、気をつけてもどきなさい」

自動で扉が閉ざされる瞬間、竹下は微笑んでいた。今までとは違い、温かみを帯びた表情だった。

言われた通り、もどって自分なりに理解したことを皆に話して聞かせよう。

そうするしかなかった。

祐史が倉庫を出て行って、数分。

揺れるロープを見つめていた竹下は、何かを感じたように、ビクッと身震いをした。

倉庫の扉が開いた。

「あら… あなたは…」

入ってきたのは少女だった。

べったりと血のりで染まった制服と腕。顔にも、無数にあるホクロのように、血が飛び散っている。

「失礼しますよ、先生」

「めずらしい来訪者ね。あの男の子が、川瀬って言ってたから、私もそう呼ぼうかしら？ 川瀬さん？」

弥生は、室内のあらゆる物品に目を向けていたが、竹下の足元の土塊でピタリと止まった。それに気付いた竹下も、足元に目をやって、眉を曇らせた。

「かわいそうなことをしたわ。この子はここを守ってくれたのに……」

「所詮、ただの傀儡くぐつにすぎないわ。ま、たしかに、痛みを感じて、考えることはするけどね。くだらないわ」

弥生は心の底からそう言っているようだった。

「あなた何を考えているの？ 川瀬さん？」

「ふふふ…… 先生こそ、何を考えいるの？」

二人は笑顔で睨みあった。

「あなたにとっては、どうでもいいことよ」

「私にとって面白くないこと…… じゃないの？ 先生？」

ぴりぴりとしたオーラが、形になったかのように鋭く周囲の物質を突き刺した。

弥生のほうが竹下よりも上位に立っているようだった。明らかに見下した口調で弥生が言った。

「ここで森崎君と、仲良くいろいろ話してたみたいじゃない？」

途端に竹下の顔から笑みが消えた。

「……あの子…… さっき帰って…… あなた……」

無表情になった竹下の顔が、恐怖の表情に変わるまで、何秒とかなかった。

「あなた、あの子をどうしたの？」

竹下の声は唸るように低かった。威嚇しているようだが、弥生は

それに動じない。

無邪気な笑顔が、恐ろしい悪魔のような雰囲気に変化した。

四十、対話（後書き）

これまでの話の中で、紛らわしい文章などが多々ありましたので、修正しました。わかり辛い中、ここまで読んでくれた皆様に感謝です。

四十一 接吻

弥生は竹下を完全に圧倒していた。

力だけではなく、覇気も、何もかもが竹下を上回っている。

「さあ、そんなことよりも、あなたはなぜ、今だここに残っているのかしら？」

“先生？” 弥生の言い方は皮肉たっぷりだ。

「あの子達を… 見守るためよ」

「見守る？ 結末を見守るという意味かしら？」

「必ずしもあなたの思い通りになるとは限らない。あの子達には、あなたの思想を打ち破る力がある」

「ふふふ… たしかに、大きく予想外なことはやってくれたわ。でも、この後は… どうかしら？」

「やっぱり、あなたは危険すぎる…」

竹下の声は更に低くなった。

「危険なのは先生も一緒…」

「あなたと一緒にされたくないわ！」

「一緒よ、あなたも私と同じ契約者」

「あなたのように卑怯じゃない。そこまで人を利用して、何を望むの？」

「……私の望み？ 私の望みは——」

「………」

「ふふふふ… あははははは…！」

今度は狂ったように高笑いして、後ろから刃物を取り出した。

「あははは…！ あなたには関係ないし、あなたはもう用済みよ。

ま、けつきよく何の役にも立たなかったけどね。これも誤算と言え
ば誤算ね」

直前に何かを傷つけたような、生々しい鮮血にまみれた包丁。

「ちよっと—— まって——」

「さよなら。馬鹿女」

弥生が揺れるロープを包丁で切断した。ロープは、スパッと紙を切るようにたやすく分断した。同時に、竹下の首のあたりに線が入り、そこから血のように漆黒の闇があふれた。

「あなたの思い通りには—— ならな—— い——」

竹下は闇に包まれ、消滅した。明るかった空間は、照明が落ちたように暗くなり、その中では弥生一人が微笑んでいた—— あざけ笑っていた。

ハハハ…… 情けないな……

手を前に伸ばしても、誰も助け起こしてはくれない。

下腹の傷口から流れ出る大量の血。体を動かすとそれは勢いを増し、叫ぶほどの痛みをとまって襲いかかってくる。

止血が必要だ……。俺がこんなことで死ぬわけないだろ——

——もしかしたら、この“遊び”は永久に続くのかもしれない。

第二体育館と第二校舎をつなぐ渡り廊下を進みながら、祐史は真面目にそんなことを考え始めていた。

馬鹿げてるかな？ タクに言ったら殴られそうだ。

竹下と話をして、知りたかったことは、ほとんど教えてもらえなかったが、だいたいのことはわかった。ただその話で、弥生が本当の悪党である可能性が更に深まってしまったことは、否定しようもない事実。しかし、弥生のことは今でも好きだ。彼女がどんな悪党であっても、そうではなかった頃の彼女をよく知っている。たとえば

それが偽りの姿であつても。

いや… もしかしたら今の彼女は…

祐史は、些細な可能性を信じようと思った。

よし！と声を出して気合をいれると、途端に卓郎や他の皆と早く合流したくなり、歩調を速めた。

<カチャ…>

吹抜けのところまで来たとき、数メートル先の第二校舎の扉から化け物が姿を現した。

「動いてるやつもいるのか…！」

腕や制服を血で染め、顔を下に、長い髪を前に垂らした状態のその女生徒を前に、文句を言つて包丁を突きつけた。相手は血にまみれた姿だが、武器を持つていないように見て取れる。

俺は殺人に対して、妙な興奮を覚えていた…。それは竹下佳世の言う邪悪な魂になりかけていたということだろう。あのときまでの俺はどうかしていたんだ…。もう殺したくないが、やむ終えない。さっさと殺してしまおう。

女生徒は、2歩前に進むと、重たそうに頭を持ち上げた。

点々と、赤黒い斑点が散ったその顔は――

「か… かっ…」

驚きのあまり声を出すか、その声は言葉にならない。

化け物ではない。いくら血で染まっていようと、その顔を見間違えるはずがない。愛する川瀬弥生の顔。

祐史は、包丁を前に向けたまま、握る手にいつそう力を入れた。一つの可能性に期待を込めて…。

「川瀬、お前は…」

額から口元に流れてくる冷や汗を噛みしめて、赤く充血した弥生の眼をまっすぐに見た。人の良し悪しを表すのは、顔ではなく眼だと、いつか本で読んだことがある。

校門前のときのような恐怖はその眼からは感じ取れない。

「森崎君……」

弥生の目から涙がこぼれた。

よたよたと、弥生が祐史に近づく。

大丈夫だ。そう思ったとき、祐史から緊張が消えた。包丁をベルトに差し込んで、後ずさりはずせず弥生を待ちかまえた。

「森崎君っ……！」

「川瀬……」

弥生は甘えるように、血塗られた腕を祐史の首に回して泣いていた。

彼女をこんなにも近くに感じたことはない。もうこのままどうなってもいいと思うほど、祐史は幸福だった。

「私……私……」

弥生はしゃくり上げながら何度も謝った。祐史は弥生の頭に顎を置いて、髪をなでてやる。

汗と血の臭いしかしなが、関係なかった。まさに永遠に続いてほしい時間だった。シチュエーション的には最悪だが、気持ちを伝えるには最高のチャンスだと思った。

「……俺な……前から川瀬のこと……」

今までずつと言いたかったことを今——好きだ、と。

しかし、その言葉を口にすることはできなかった。気迫がなくなっただけではなく、寸前に口がふさがってしまったのだ。

全身を包み込むような、温かみとやわらかい感触。二人の唇と唇は熱く重なり合っていた。

どれくらい続いただろうか。祐史にとっては短い時間だった。嬉しさ以前に、驚きしか感じなかった。

弥生は祐史の口から唇を離すと言った。

「ごめんなさい。ありがとう……」

「いや…… こちらこそ……？」

脳が、溶けたかのように正常に働かなくなっていた。だから気付かなかった。ベルトから包丁が抜かれていることに…。

包丁は弥生の手にあった。

え…？ 川瀬…？

弥生はまた涙を流した。

「さよなら……」

殺される！ そう思い、悔しさと泣きたい気持ちを抑えながら、後ろへ回避行動をとった。

だが違う。弥生が両手で握り、振り上げた包丁の刃先は、なぜか下を向いている。

「おい……」

そのとき悟ったのは、さよならの意味。あれは祐史の死を示していたわけではなかった。

包丁は、弥生自らの腹に向かって空気を切った。

<ザスツ…>

包丁は肉を裂いた。

「馬鹿かっ…！」

「森崎君…」

包丁が刺さったのは弥生ではなく、祐史の右腕だった。

「お前が死んでどうするんだ…！？」

深々と腕に刺さった包丁の根元から、じわじわと血が湧き出てきた。刃が抜かれて血液が噴き出しても、強い痛みは感じない。弥生を救いたくて必死だった。

俺は川瀬を救いたい！ 救いたいん——だ……。

弥生は笑っていた。

そして、気付いた。自分の下腹に包丁の刃が半分以上埋っていることに。それは皮をすりぬけ、筋肉を破り、内臓にまでも達しているようだった。

「くっ… ああっ…!?!」

激痛で声が出ない。

目を見開いて弥生の顔を見ながら、祐史は崩れた。
それを見下す弥生の眼は…

「くそっ… お前は誰っ… だ…」

祐史はうつ伏せのまま精一杯、弥生を睨みつけた。

「ふふふ、さよなら森崎君」

一瞬、意識が遠のいた間に、弥生はいなくなっていた。

「ぐうっ…! つー…」

情けないぜっ…! 情けないっ!

「ううっ!」

でも、これで些細な可能性は確実なものになった。

あれは川瀬弥生ではない!

間違いない。眼の色が変わった。途中で別の何かとすり替わったんだ。

傷口を押さえても指の隙間から血は流れ、脳が機能しなくなり始めている。

男って、どのくらい血が減ったら死ぬんだっけ?

余計なことばかりを考えてしまう。それが更に血液の流出を促進しているような気がした。そしてそれを補うかのように呼吸が激しくなる。

「あうっ…!」

痛いな、ちくしょう…! 苦しんで死なせるように腹を刺しやがったな…?

「はっ…! はっ…! はっ…!」

くっ！ 今度は眠気が……。よくあるパターンだ。ここで寝たらもうあの世だよな……。俺じゃあ……。悪魔は契約を持ちかけてはこないだろうな……。

次に目を閉じたら死ぬ。そう自分に言い聞かせる。

まだ死ねない……。川瀬を助けるために……。早く皆のところまで――

「――どうした祐史？」

面倒くさそうな、いつもの卓郎の声。

朝の教室はいつものようにいろいろな話が飛び交っていた。

「ねえ、それでそれで？」

弥生が興味津々に話の続きを求めた。

「あ、ああ、それで先輩がさー、それを触ってみたんだって。そしてたらそれは太い胴体をくねらせて逃げたんだ」

「ハッ、また、からかわれたな」

卓郎がそっぽを向いて鼻で笑った。

「まったくよお、ほんつとうに感動のないやつだなー」

いつものたわいのない、笑いにあふれたやり取りだった。

四十一 接吻（後書き）

あとほんの少しだけ、お付き合います。

四十二 遊戯

寒い……。食堂と廊下では温度差があるのだろうか？

川瀬は腕をさすった。

それまでは肌寒い程度にしか感じなかったが、今は冬に突入したのかと思うくらいだ。心の中が寒くなったせいだろうか？ それなら気合でなんとかするしかない。

あいつを探そう。

あの悪魔から弥生を取り戻す。そしてこの狂った世界から脱出する！

食堂の扉に背を向けていた川瀬は、左に体を回した。保健室にいる優哉を呼びに行かなくてはいけない。まずは全員をそろえて作戦を立てたほうがいい。

コンコン……

ノックしてからドアを開け、中へ入った。

鍵をかけないなんて無用心だな。とは思ったが、気を抜くなど言われても、気抜けしてしまうのは仕方のないことだ。

「優哉、寝てるのか？」

「……」

ベッドを囲むカーテンに向かって呼びかけたが、返事がない。

寝ているのか……

川瀬はカーテンを横に開いた。

「あれ？」

いない。暗いが、ベッドに誰かが寝ている影はない。

どこか行ったのだろう。と思いつつ、懐中電灯をベッドに向けた。そこにはやはり誰も寝てはいない。ただ真っ赤に染まったシート

があるだけ――

は……？

シーツに信じられないほど大量の血―― 大きな血溜りがある。

ぽた… ぽた…

シーツに、音をたてて赤い滴が一滴、一滴と早いペースで滴り落ちる。

今度は天井に光を移動させた。

一瞬、天井に大の字が描かれているように見えた。しかしそれは服を着て、靴を履いて、顔がある…。口と、目もそれに負けないくらいに大きく開いた、優哉の苦悶の顔が…。

首に深々と刺さったハサミをつたって血は滴っていた。

川瀬は呼吸をするのも忘れ、腰が抜けて尻餅をついた。意識がどこかへ飛ばされたように、ただ漠然と、ベッドに溜まっていく血だけが視界に入っていた。

どうして… 優哉が…？ ……誰に…？

「……………」

あいつしかない！

悲しみよりも怒りの感情のほうが大きくなった。

「許さない…！」

もう一度、懐中電灯を手に取り、上に向けた。

天井ではなく、ベッドが着けてある壁の上のほう…。そこには血で書かれたであろう文字があった。

『ニカイ トイレ』

2階トイレ…？ さっきどこかで聞いたような……。

頭の中で再生されたのは優哉の言葉だった。

『2階のトイレにいます…』 『独りにしてくれと…』

あの時、階段から下りてきた優哉が言っていたことだ。

思い出した川瀬は、すぐに腑抜けになった足に力を叩き込んで立ち上がった。

その途端、ビチャッ！と優哉の体が天井からベッドの血溜まりに落下した。

どうやって天井に接着されていたのか。疑問がよぎったが、考えることもせず、胸の上まで跳ねてきた赤い液体にも気を止めず、勢いをつけてドアを押し開けた。

2階のトイレには南がいる！ 絶対死ぬな！ 死ぬんじゃないぞ！

2階のトイレまでは本気で走ってすぐだった。

迷うことなく女子トイレに入ると、一つだけ閉まっているドアに手を伸ばした。

ここを開けて本当に南が死んでいたらどうしよう？ また優哉のよう… あんな姿で死んでいたらどうする？

川瀬はとりあえず呼吸を整えた。

何が隠れん坊だ！ あいつは全員を殺すつもりなんじゃないか！？

どうしようもなく、狂ってしまいそうなほどの憤怒にさいなまれた。このまま自分を忘れて壊れてしまうのではと思ったとき、脳が怒りにブレーキをかけた。

頭の熱が下がり、冷静な思考ができるようになって、ようやく個室の中から小さな息づかいが聞こえていることに気付いた。

「南！ いるのか！？」

「……おじさん……」

中から声が返ってきた。

葵が生きているとわかって、とりあえずは安心してドアを押した。葵は便座式のトイレの前に立っていた。何かあったのか、立ったまま震えて涙を流している。だが外傷はないようだ。ちゃんと、生きてそこにいる。

「南…」

川瀬から安堵の息がこぼれた。

「おじさん……」

葵の声が震えているのは、他ならぬ恐怖によるものだった。安心しろ。俺が守ってやる。

川瀬は葵に手を伸ばして肩に置いた。

葵は何かを伝えようとしていたようだが、それはここを出てからでもかまわない。落ち着かせてから話を聞けばよいのだ。

『い』『な』『い』『で』

そう口が動いているように見えたのも、光を当てたとき、彼女の首のところで何かが細く光ったように見えたのも、気のせいだ。

動かない葵を連れ出そうと、彼女に近づいたとき、その考えがどれほど愚かだったかを思い知った。

川瀬の足に足元で細いものを切断した感覚があった。

<ヒュンッ!>

何かが空気を切る音。

足元を見ても何もない。気になったのは顔の数センチ前を漂う赤い糸。それは空中に浮いたまま横へ伸びていた。

それが見えない糸をつたう真新しい血の粒だとはすぐにはわからなかった——数秒後にそれと気付いた頃には何もかもが手遅れで、葵の固まった表情が、血の糸にピントを合わせた川瀬の眼にぼんやりと映っていた。

「ミナミー」

首の定位位置からずれていく葵の頭部。果てない恐怖を感じたまま視界の下へ消えていく。ただ川瀬の顔だけが虚しく苦笑していた。

<ベシヤベシヤッ!>

生臭い液体を帯びた肉が固い床に衝突する音は、川瀬の耳にも聞こえていたが、川瀬は反応しなかった。

個室内に張り巡らされていた糸は、何らかの条件で凶器となって葵の体を切り刻んだ。糸は凶悪にも葵の頭部だけではなく、両手、両足ともを胴体から切り離していた。五体を失った体は、血を吹きながら川瀬の足に寄りかかっている。

川瀬は糸に触れようと手を近づけた。川瀬の手は空を掴み、それまで幻覚でも見ていたかのように、そこに糸はなかった。

これで終わりのはずはない。また何か手掛かりを残しているはずだ。

川瀬は、自分を取り囲む壁、便器、天井を照らした。しかしどこにも手掛かりのようなものはない。

何か目的があったはずだ。これは… そういう“遊び”なんだ！これまでにないほどの凄まじい感情が込み上げてきた。怒りに似ているが、それを超えるほどの強烈な感情――

「殺してやる…」

――復讐心。

必ず見つけ出して殺してやる。

頭の中でフラッシュバックしたのは、仲間達の死に顔。誰もが苦痛や悔しさをまとったまま死んでいった。化け物となった生徒や教師達も同じだ。

それまで目を向けることすらできなかった足元の葵へとようやく視線を移した。

胴体からもうほとんどの血液が流れ出たのだろう。川瀬のスニー

カーは血の海に浸かっていた。

足に寄りかかった胴体を優しく床に倒してやってから、転がった頭部の開いたままの目を閉じてやった。

『コウテイ』

胴体の背に、赤い文字が殴り書きされていた。

次は校庭か。あいつはそこにいるのか？ それともまた誰かが犠牲に…？

…考える余地はない。川瀬はすぐに指定された場所へ向かった。卓郎は… 祐史は無事だろうか？

川瀬の復讐心は走るたび—— 足を前に出すたびに少しずつ膨らんでいった。

無事なはずだ。あの二人は——

生徒玄関から出て部室棟を抜けた先に校庭はある。校門とは逆の方向だ。

一周500メートルのだった広い庭。そのどこに次の手掛かり—— もしくはあいつがいるのかはすぐにはわからない。

校庭の入り口から一通り見回す。すると角のほうで大きな木が目にと留まった。

あそこか…？

そう感じた川瀬は、一直線にそこへ走った。

この木はたしか、秋澤神社の頃の神木…。しかし、後に伐採されたと聞いたが…。

風のない世界で、その大木は枝を揺らしていた。何かの記憶であるかのように…。小さな神社の土地を取り込んで建てられた学校、心無い人達によって伐採された神木。それが目の前に蘇ったかのよ

うに……。

過去のあの場所に戻った気がした。

手の届く距離まで近づいた川瀬は、神木に手を触れた。そう命令された気がして、川瀬はそれに従ったのだ。

神木から何かが腕を伝って全身に流れ込んだ。そのエネルギーのようなものは全身を駆け巡って川瀬を身震いさせた後、脳に音のない映像を送り込んできた。

古い神社。赤い鳥居。ご神木。すべてがあ那时的のまま…。

これは何かの記憶…？

白い塊が神木の前に置き去られていた。

川瀬は第三者目線ですべてを見渡していた。

白い塊は生き物であることがわかるが、まるで死んでいるように動かない。いや、死んでいるのかもしれない。

しばらくして老人がやってきた。

懐かしい男の顔だ。秋澤神社の神主。

今となってはとくに他界した人物。川瀬がこの人物に対して抱いていた印象は“淋しい老人”だった。家族がいないらしい。そういう噂を聞いたことがあった。淋しそうな風貌をしていても、誰にでも愛想の良い人物だった。

そう、だから俺はこの人に――

老人は、白い塊を驚いた表情で抱き上げた。

次に映ったのは、神木の下に作られた石のだるま。
これは死んだあの子の…？
死んだ…？ 死んだ…のか…？

映像は途切れた。

川瀬は神木から手を離した。

……すべてがわかった。すべての謎が解けた。

「……花月…」

ふと第一校舎の屋上を見ると、赤いものが光ったように見えた。

最後はあそこか…。

もう川瀬には驚きも、恐怖も、疑いもなかった。

俺がすべてを終わらせなければならぬ。すべてがそれを暗示している。

待っていてくれ、弥生。

もう少しだけ、形のある幸せを望んでいたのかもしれない。

両親を失った卓郎は、6年間、家族の思い出に苦しまされていた。あれから毎晩寝る前は、楽しかった頃を思い出して涙し、眠りについて、あの事故の悪夢に苦しんだ。以来、卓郎の人格は大きく変わった。

たまに、涙って何だろう？ と疑問を感じるようになった。
事故から2年で一生分の涙を流し、悲しみという感情を心の奥に

封印した。

なのになぜ…？ この感情は何だ？

「ったく… お前は馬鹿だよ……」

卓郎は、冷たくなった親友の傍らに座っていた。

あれから探索を再開した卓郎が、第二体育館への渡り廊下で目にしたのは、うつ伏せで血を流している祐史だった。すでに生命活動を停止した体は、寒い屋外で冷えきっていた。

祐史の足からは、後方へ5メートルほど、苦しみ這ったであろう痕跡。

痛くて苦しかったはずだ。それなのにお前は――

「幸せそうなツラしやがって……」

祐史は笑っていた。

なぜ皆先に逝っちまうんだ？ 皆、俺を独りにしやがって…。

また、思い出が卓郎を苦しめた。

俺… ほんっと… 素直じゃなかったよな…。マジで… お前には感謝していたんだぞ…。

目の前が霞んだ。

祐史… お前は皆と違って楽しく死ねたんだよな？ そうだよな？ 頬を伝った涙は温かく、しょっぱかった。

「なんだ。お前でも泣けるじゃん」

祐史が語りかけてきたように思えて……

「うるせえよ……」

卓郎は悲しい笑いを返した。

四十三 復讐

屋上への最後の階段を駆け上がる頃には、戦う体力は皆無になっていた。体力の限界はとうに超えている。腹が減っては軍はできぬ、とはこのことだ。片足を上げるのも億劫になる。

3階から屋上へつながる階段の途中には、簡単なつくりの柵のような扉が道を塞いでいた。

設置されて間もないのであろう扉には南京錠が取り付けられていて、開けることも、よじ登って越えることもできなかったが、いつか手に入れていたドライバーを使って蝶番を外すことで解決した。もちろん、『立ち入り禁止』と書かれた張り紙は無視した。

もしかしたら俺も操られていたのかもしれない。俺だけがこの先に行けるように…。

すぐそこに“弥生達”がいる。

気付けば武器を持っていなかった。だが引き返す気はない。その扉を開ければいるのだ。

俺の娘達が――

鍵のかかっていないドアは、川瀬を最後の舞台へといざなった。

第一校舎屋上――

風はないが、冷気が肌を刺す。しかし、それがさほど気にならないのは、走ってきた川瀬の体温が上昇しているおかげか、高揚した精神のおかげか。

薄っすらと明るい舞台に、二人の少女が立っていた。

奥の一人は弥生。そしてもう一人は――

弥生……

いや、顔も髪型も、容姿は弥生と瓜二つだが別人だ。まるで弥生を真似てつくられたような姿の少女。

弥生は川瀬に背を向けて、コンクリートの塀から呆然と外側を見ている。もう一人の少女は川瀬を見つめて微笑んだ。

「花月^{カツキ}……」

川瀬はその少女の名を呼んだ。

——あの日、妻の若奈^{ワカナ}を産婦人科へ送り、川瀬は待合室で診察が終わるのを待った。

1月に入ったばかりで、窓の外は雪がちらついていた。

「ありがとうございます」

妻が一礼して診察室から出てきた。

出産予定は今年の3月。「順調に育っている」産婦人科の先生にそう言われたと、帰りの車の中で喜んで話していた。

「名前は考えてくれた？」

そう言われ、川瀬は曖昧な返事を返した。妻が子供を産み、夫が名をつけるという約束だった。

「呆れた……。父親になるんだから、ちゃんと自覚しなきゃ」

「いやあ、すまん。そうだなあ、予定日が3月だから……」

赤信号で止まったとき、川瀬は言った。

「“弥生”はどうだ？」

「いいじゃない。で、もう一人は？」

「そうだなあ、もう一人は——」

——少女は少し驚いた表情をした。

「花月？　それが私の名前なの？」

「ああ：　そうだ：」

今度は少し嬉しそうな表情。

「花月：　そう……。よかった。これで一つ：　私の目的は達成されたわ」

名前を知ることが：　目的の一つか。

「何が本当の目的なんだ？　……弥生をどうする気だ？」

「もう姉さんは反応しないわよ。完全な抜け殻状態。大勢の友達が死にゆく様を観て、友達や好きだった人を自分の手で殺したのだから」

「お前が弥生の体を使っていたんだろ！？」

「そうね。でもその間、姉さんには自分が何をしているのか、ちゃんとわかっていたのよ」

殺させた……。葵：　優哉：　みんな……

「……許さない。お前の罪は……」

俺は許せない。花月は皆を殺した。この罪は：　どうやっても消すことはできないんだ。

「消せない罪？　アハハ。いいのよ消さなくて、いえ、消さないでほしいわ。私の目的は……」

「……」

「復讐だから」

冷たい風が吹いた気がした。体が冷たくなって固まっていく感じがした。

……なるほど……。俺への復讐というわけか……

川瀬の心に迷いが生じた。すべてを破壊した元凶である花月への復讐心が薄れていく。

「どうして私を捨てたの？　お父さん？」

「……」

花月の言葉はナイフのように川瀬の胸を突き刺した。

川瀬は目を瞑った。約16年間も押し殺してきた罪悪感。

仕方なかったんだ――

――無事産まれた赤ん坊は、双子で、二人とも女の子だった。幸せな家庭を築ける。そう確信して疑わなかった。

だが――

若奈は死んだ。

特に体が弱いというわけでもなく、健康体だったはず。なのに退院から数週間後、突然倒れて再び入院。

「過度の疲労が原因です」と医者に言われた。

川瀬は仕事が忙しく――忙しいわりに給料は少ない――育児や家事はすべて若奈に任せきりだった。

俺が働かないと家族は生活していけない。どうすればよかったんだ？

俺のせい……なのか……？

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

ベッドの上で若奈は謝っていた。

若奈は回復の兆しを見せることなく、他界した。

残されたのは川瀬と二人の娘、姉の弥生と妹の花月。

川瀬は悩んだ。自分独りで二人も子供を育て、養っていけるのか。施設に預けるのも手だが、経済的余裕は全くなく、実家に頼ることもしたくなかった。遠いし、あまり親と仲が良くなかったからだ。

そのときに思い出した。

秋澤神社……。

神主の秋澤さん…… 淋しい人……。家族を…… ほしがっていた――

「――あの人なら…… お前を自分で育て、大事にしてくれると思った」

川瀬は泣き出したい気持ちを必死に押さえていた。

たしかにこの子は俺の娘だ。弥生の妹だ。だが俺は…… あの時の俺には……。弥生一人だけなら、何とか育てていけると思っていた。一人だけなら……。

「だから私を神社に捨てたのね？」

「違う…… 違う……！ ちゃんと…… 余裕ができたなら迎えに行くつもりだった……！」

「でも、私は死んだ。その日にね」

「俺は何も知らなかったんだ……！ 秋澤さんが死んで…… お前の行方もわからなかった……！」

まさか死んでいたなんて思わなかったんだ！

川瀬は心の中で必死に訴えた。花月に理解してほしかった。決してお前を裏切ろうとしたわけではないと。

「本当なんだよ……」

俺は薄々わかっていたのかもしれない。ここへ来て、こんなことに巻き込まれたとき、嫌でも16年前のことを思い出した。いくらその可能性が濃くなっていても、考えたくなかった。自分のあやまちを。

「……契約をした私は、成長しながらずっとこの地にいた。本当は、最初はまだ一度お父さんに会いたかっただけ……。優しく笑いかけて抱きしめてほしかった……。ここに高校が建って、姉さんが通い始めたのは偶然よ。そんな偶然がなければ、私に復讐心は芽生えなかった

たでしょうね…」

どうして私だけが幸せになれなかったの？ 花月はそう言っているようだった。

「だから、今度は復讐のために、再度契約を交わしたの」

双子なのに、どうして姉さんだけが幸せになるの？ と…。

「最初から… 俺だけを残すつもりだったのか…？」

俺一人がここへ辿り着いたのは偶然ではない。隠れん坊の本当の鬼は、俺一人だけだったのだ。

「正確には途中から。まさか、生き残るなんて思わなかったもの。

できれば、ここを—— 私を見つけてほしかったけどね…。それに… お父さんと、遊びたかった…」

なるほど… ということは、全員が死ぬことを前提として、この復讐という遊戯を始めた。果たしてこの先のシナリオは用意されているのか？

「お前は、けっきょく全員を殺すつもりなんだな？」

「……そうね…」

花月が手で弥生に何か指示を出した。

弥生は黙ってコンクリートの塀に足をかけ、その上に立った。

「まで…！ やめろ！」

今にも闇に身を投げ出しそうな弥生。川瀬は自分の足が動くことを思い出した。

そんな終わりは認めない！

弥生に飛びかかろうとした川瀬は、ドアの開く音に動きを止められた。

後ろのドアから歩み寄ってきたのは卓郎だった。

「卓郎…！」

今の川瀬には彼は救世主に等しい存在。花月を止められるかもしれないと思えてきた。

絶対に止める。川瀬は意気込んだ。

「花月： たしかにすべての原因は俺だ。親としても人としても最低だった…」

許されないかもしれない。だがわかってくれ！ 俺はお前を愛しているんだ！

……こんなのは違う……。死ぬのは弥生ではない……。俺だ……！ 死ぬべきは俺なんだ！

「そうだよ……。あんたのせいで祐史は……」

その声に全身の毛が逆なでされたようだった。

花月ではない……。声は後ろから—— 耳元から……。

腕が動かせなくなった。ものすごい力で両腕を背中で絞められ、うつ伏せに床に押し付けられた。

「あんたのせいで祐史は…… あんたのせいで祐史は…… あんたのせいで——」

なにも理解できなかった。

狂ってしまった……。すべてが……

“生きる！” 卓郎が刻んだ言葉。それは皆の絶対的な目標だったはず。誰も死にたくはないし、誰にも死なれたくはない。生き残った全員が、生きようと足掻いていた。必ずなんとかなると信じていた。

なのに……！ 俺達はオモチャにすぎなかったのか……！？ 自分の運命を自分で切り開くことなんか、初めからできなかったっていうのか……？

川瀬をねじ伏せた卓郎も泣いていた。涙が川瀬の頬をかすって、一滴、二滴、三滴……。

「あんたのせいで祐史は死んだ……」

魂の抜けた人間のように、そればかりを繰り返していた。憎い…… 悲しい…… 悔しい……！ そう叫ぶように。

「心が壊れた人間を操るのは簡単ね。ふふふ……」

人間というのは、ひ弱で、もろい生き物なんだ…。

「やめろ……」

人の力は強くなかなかつた。止めることなんか…… できない
…！

「これで終わり」

「やめろおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

弥生の体は闇へ――

繰り返される卓郎の嘆きも、花月の高笑いも、川瀬の悲鳴にかき
消されていた。

四十三 復讐（後書き）

そしてエピソードへ――

エピソード

昼前、病院前で車を降りた植山は、足早に病院出入り口の自動ドアを通過した。

薬などの病院独特の臭いが、植山は嫌いだっただ。さっきまで苛立っていた植山にとって、これほど鼻につく臭いは――いや、さっきまでのあの悪臭から解放されただけマシなのだろう。そう思うことにした。

「警部――待ってください――」

警部。自分を呼ぶ男の声を無視して植山は受付へ。

車を駐車場へ移動させていた一人の部下が走って追いついてきた。「病院の中で、走るのは好ましくないぞ。それと、ここで警部と呼ぶのもよくない」

すいません……。とキョロキョロしながら謝る部下を隣に、受付へ着いた植山は、黙って警察手帳を出した。

「お待ちしてました。すぐに――」

「お待ちしておりました。こちらです」

受付のナース姿の女性が立ち上がりとした時、受付の隣のドアから白い服を着た男の医師が出てきた。警部と呼ぶ声が聞こえたのだろうか。

二人は医師の案内で、エレベーターに乗り込み、5階へ昇った。ナースステーションの前を通り、何度か廊下を曲がり、突き当りの部屋。

個室の入り口に『川瀬春介』と名前が入ったプレート。

ここで間違いないな。
植山は気を引き締めた。

<コンコン…>

しばらく待ってくれるようにと言って、案内をした医師がノックをして先に部屋に入った。

中には患者以外に誰かいるようで、話し声が聞こえる。

「意識が戻った、と連絡があったはずですよね？」

苛立ちをみせる植山に、部下が話しかけた。

「ああ、そのはずだ」

携帯に連絡が入ったのは約20分前、すぐにそれまでいた現場から部下を連れて、できるだけ車をとばしてきた。馬鹿みたいに忙しいのにだ。わざわざここへ来たのは、それだけ重要なことだからだ。そう、我々は忙しいのだ。1分1秒だって無駄にはしたくない。

数分後、医師が二人入室を許可した。

さあ、この人物にはいろいろと聞かなければならないことがある。室内には、女性医師と男性医師、さきほど案内してくれた医師は、二人に道を譲って、ドアの前に立った。

計6人。3人の医師と、植山と部下。それと患者。

「あなたが警部さんですか？」

女性医師が入ってきた植山に聞いた。

「警部の植山です。こっちはわたしの部下」
部下が挨拶した。

「川瀬さん、目を覚ましたんですか？」

川瀬はベッドの上で上半身を起こして、窓の外へ顔を向けている。心地よい日差しが川瀬を温めるように、降り注ぐ。

「川瀬さん。お話を伺ってよろしいですか？」

「……」

答えない。いや、反応していないようだ。

植山はもう一度、少し声を張って言った。

「川瀬さん。聞こえてますか？」

「警部さん」

女性医師が止めた。

川瀬はやはり何の反応も見せない。

「目を覚ましているのでしょうか？」

「ええ、昨日の夜に。ですがこのとおり、何の反応も見せません」

「どういうことです？ 目を覚ましたと言うから我々は——」

どうなってんだ？ 今この男は……

嫌な予感がした。

たしかに、川瀬が目を覚ましたら、至急連絡をしろと言った。だがそれは——

「正確には、起き上がっただけで、目を覚ましていません」

それまで川瀬を診ていた男性医師が立ち上がって言った。

「わたしは精神科の医師ですが、こんな重度の患者を診るのは初めてで……」

男性医師が首を振った。

意識がない……。と言っているのか？ ふざけるな！ この男だけが頼りだというのに……！

「川瀬さん！ 目を覚ましてください！ あそこで—— あの学校で何が——」

二人の医師を押しつけて川瀬の体をゆする。

「警部さん！ 刺激を与えないでください！」

「警部！」

男性医師と部下が植山を川瀬から引き離そうとする。

植山はそれを振り払って怒鳴った。つのっていた苛立ちが爆発する。

「あんたら今回の事件がどんなものなのか、わかっているのか！？」

「この男がどれほど重要な存在かわっているのか!？」

「この男は——！……いや……すまない……」

ひどい有様だった。まるで校内で殺し合いが起こったような、凄まじい光景。

校内で激しい乱闘があつたとしか考えられない。その他、目撃者などもない。昼間にも関わらず、そのときの校内の様子を知る者はいなかった。

なんとしてもこの男に話を聞く必要がある。しかしその男さえも

「……意識はもどりますかね？」

•
•
•
•
•

「……彼の娘も……死体で発見されたんです。屋上から落下したよう
うで……」

「そうでしたか…」

全員の視線が川瀬にそそがれた。だが、やはり川瀬は反応することはない。

この事件は普通ではない。今の警察はかなり混乱状態にある。3日経ってもマスコミや生徒の親族にすら詳しいことを公表できない状態なのだ。

「川瀬さん… 闇を恐れるんです」

女性医師が言った。

「恐れる？ 意識がないのに… ですか？」

「ええ、しかし、目は開けていますし、瞬きもしています。つまり、起きていながら、眠っている状態なんです」

「……わけがわからない…」

「少しでも部屋を暗くすると、発作を起こします。現状を知らせようと、とりあえずお呼びしたのですが… 今は安静にしておくべきですね…」

どちらにも手を出せない状況か…。まいったな…。

「そうですか… わかりました…。また何かあれば連絡ください」

植山は部下の胸を叩いて病室を出た。

迷宮入りという言葉が頭を悩ませた。

あの男はどんな夢を見ているのだろうか？

植山には川瀬は笑っていたように見えた。

せめて良い夢を―― 植山は願った。

楽園のように明るい草原。その真ん中の小さなログハウス。

家の前の花畑で、幼い二人の女の子が遊んでいる。

川瀬は木の階段に腰掛けて女の子達を見守っていた。楽しそうな二人の笑い声。静かで平和な楽園。

その声を聞いていると、自分も楽しくなってきた。

一緒に遊ぼう。そう思った時、家の中から声が聞こえた。なぜか懐かしい、愛おしい声だった。

川瀬は笑って叫んだ。

「弥生ー！ 花月ー！ お母さんがおやつ作ってくれたぞー！」

「はーい！」

双子が元気に返事をした。

エピローグ（後書き）

『完』です。

ここまで読んでくださった方に感謝します。

開始から「漆黒の遊戯」一筋でがんばってきました。

これからは他のジャンルにでも挑戦しようと思っています。
本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1788b/>

漆黒の遊戯

2010年10月8日14時05分発行